

大空の戦士「Uコン伝説」

藤永 潤 著

— はじめてのUコン —

世の中が安定期を向かえ、昭和が一番輝いていた頃、いろいろな遊びが流行った。この頃はテレビゲームなどの類もなく、少年たちはいろいろと工夫し自らの能力を発揮していった。

そんな中、中学生の川辺信彦は友人の中浦良太と背藻井川付近の河原へと向かい中浦の友と会うことになっていた。川辺は中学で知り合った中浦に小学生時代の友人が面白い遊びをしているというので、紹介されるということになっていたのだ。川辺は中学一年であり、中肉中背の色白で、何にでも興味をもち、新しいものがあればとことんまで、顔を突っ込む方であった。一方、中浦は背が高く細く、真っ黒に焼けた小さい顔に白い歯がよく似合ったスポーツ少年であった。堤防の縁には、火山灰を下地としたちょっとした広場があり、少し沈みかけた太陽の光を浴びて、人の影も長くなっていた。広場の中には、四～五人ほどの少年が居て、川辺たちが近づくと、突然ブオオオ…という音とともに、模型飛行機が舞い上がった。

「あれか！りょう」

川辺が驚いた表情で中浦に尋ねた。

「おおー、飛んだ飛んだ。…あれだよー！あれがUコンだ」

「そうか」

「ああ…」

川辺たちは、次第にUコンを飛ばしている場所へ近づきつつあった。Uコンと呼ばれる模型飛行機は、二本の線に引っ張られて、中心にいる少年の周りを勢い良く、ブロロオオーンと音を立てて飛び回っていた。中心にいる少年は、飛行機の方を向き、一緒にグルグルと回転していたのである。

「おーい！」

中浦が大きな声で、集まっている少年たちの集団に声をかけた。それに、気づいた少年たちは、笑顔で振り返り手招きをした。

「おおー！りょうー！早く来いやー！」

「大介の見たことない機体だな！」

「おお、新作だ！長距離タンクしょってるから、あいつ目回して倒れるぞ」

Uコン機を飛ばしているのは、牛米大介と呼び、このUコン仲間では一番腕のよい少年だった。飛んでいるUコン機の機体は、白に黄色いストライプが入っているように見えた。というのも、結構なスピードで飛んでいたのも、完全にそのスピードに目がついて行くまでには、慣れが必要だったからである。

「長距離用のタンクか？ そいつはいいや」

案の定、牛米は回転している飛行機とは同時に回らずに、頭だけ観衆の少年たちの方を向き、左手で手招きした。

「おー！ 来いよ！ …入って来いよー」

少年たちは、カカカ…と笑いながら二人程上空のUコン機の高度を確認して、飛行機の下をくぐるようになってから、一斉に走り出した。走ると、地面からは火山灰の砂塵が舞い上がった。旋回しているUコン機は安定に飛行を続け、走り出した二人は、無事に円の中心部にたどり着いた。円の中心は三人となり、皆上空のUコン機を見つめながら回転していた。

「はあー」

と、そこには、口を開けた状態で呆気にとられていた川辺の姿があり、一緒に来ていた中浦が笑い顔で言った。

「ノブ。今、誰かに操縦替わるぞ！」

中にかけ込んだ二人のうち、背の極端に小さい少年に大介の手からハンドルと呼ばれる操縦桿が渡った。中心の三人は全員、口を開けたまま同時に回転を続けていた。ハンドルが渡される瞬間、安定に飛行を続けていたUコン機が多少上下にグワリグワリと揺れたが、無事操縦の交代が行われたようだった。川辺はそのようすを見て、

「おーお」と声を上げた。

「なっ！替わったろ」

「ああ」

「順番に燃料が切れるまで、ああやって替わるつもりなんだ。あいつら…」

ハンドルを渡した牛米は、観衆の方に向けて走りだした。その上空を、変わらずにブロロローンというエンジン音を響かせて、左回りに旋回を続けている。中心で操縦している少年は、牛米が円の外に出るのを確認すると、高度を少し下げた。

「いやー、面白いわあれ…りょう。最近飛ばしてないのか」

円の外に駆けて来た牛米が、ニコニコしながら話しかけてきた。同時に、川辺の方へ目をやった。

「なんか最近飛ばしてないんだよな。そろそろ飛ばさんとなハハハ…」

「今日持って来ればよかったのによ」

「まあな、…ああ、そういえば中学の友だちなんだこいつ」

そう言って、川辺の方へ目をやり牛米に紹介した。

「川辺って言うんだ。それでな、こいつが牛米」

川辺は軽く会釈をした。

「大介でいいよ」

「こいつ、Uコン見るの始めてなんだ」

「そうか、面白いだろう」

「ああ、すげーな」

と、感心したように川辺が返事をした。円の外には今飛んでいるUコンとは、別に色とりどりの機体が置いてあった。川辺は、そこでしゃがみ込み、じっくりとUコンの機体を観察し始めた。

機体の前方には、アルミ合金製と思われるヒダヒダの付いた、丁度オートバイのエンジンを超小型にしたようなエンジン部分が見られ、それに連動してプロペラが取り付けられてあった。

「触ってもいいぞ！」

「本当か？」

「ああ…どうせ、おれんじゃないから」

「えっ？」

「冗談冗談…いいよ。触っても」

「ハハハ…」

「カカカ…」

川辺は翼の部分や、上下に動く昇降舵に触れてみた。

「へえー！…結構大きいんだな」

大きさは全長で一メートル程あるように見えた。と、そのとき、飛ばしている方向で叫び声が聞こえた。

「おうおうおう、あぶねえーハハハ…」

いつの間にか操縦は、もう一人の太った少年に替わっていた。Uコンの機体は上下にユラユラと揺れていて、ふざけているようだった。そこで、大介がその方向を向いて、言った。

「あいつら、今に落とすぞ！」

次の瞬間、急上昇でバランスを失い、失速した機体が勢いよく、ガガーンと地面にたたきつけられた。

「カーっ！やりやがった」

火山灰の地面からは、大きな砂塵が上がり機体が大破したようだった。同時に観衆も含めて全員が、墜落現場へと走りだした。場所に到着すると機体は無残な姿となっていた。翼はボキリと折れて、地面にはエンジンが食い込んでいる状態で、かなり破片が散乱しているのだった。

「あーあ」

「やったー」

と、少年たちは口々に言い、残害を集め始めた。

「大介。すまん」

と太めの少年が謝るように言うと牛米は笑顔で、

「いいよ太ッチョ、また修理するから」

「すまん」

そういうと、牛米は太った少年の肩を軽く叩いた。残害は、太った少年たちが拾い集めていたので、牛米は川辺の方を向き言った。

「まあ、こういう事もある訳よ…しょっちゅうな。あっそうだ。来いよ」

牛米は、機体の回収を他の少年たちに任せて、川辺を置いてある他の機体の方へ招いた。そうして、真っ赤なキングフィッシャーと呼ばれる機体を持ち上げて川辺に見せた。

「教えてやるよ。…Uコンは、このエンジンの力で飛ぶんだ。そうして、ほら…」

持ち上げた機体の翼の上の金具を動かして見せた。動かすと、昇降舵が上下に動いた。

「…こいつがな。エレベーターを動かして、機体を上下させるようになってるんだ」

「エレベーター？」

「ああ、こいつだよ」

と尾翼の動いている部分を指さした。川辺は首を縦に振りうなずいた。

「…それから、このスイベルからな、2本のワイヤーにつながって手元のハンドルと連動するんだ。だから、ハンドルを上にはすれば機体は上がる、下にはすれば下がる…単純なんだよ。分かった？」

「はあ?!」

「じゃあー、飛ばしてみるか？」

「えっ?…でもー」

「ああ、落としたら困るってかー?…大丈夫、大丈夫。おれがついてるから」

川辺は少し考えた。

「ああー。…でも今日はやめとくよ。見るだけにしとく」

「そうか?…いつでも言えよ。教えてやるから…それに、中浦も居るしな」

「おお、俺だって結構なもんだぜ」

そう言って、中浦が笑った。

その日は、Uコンを眺めるだけで、終わったのである。

— 空中戦の映画 —

それから、一週間という時間が流れ川辺は中浦とともに、丁度上映していた映画を見に行ったのだ。そのときに上映していたのは、第二次世界大戦のバトル オブ ブリテンを舞台にした、戦争映画『空軍大戦略』である。この中には、英国を救ったといわれるスピットファイヤーという有名な紳士の戦闘機が登場し、それが、ほとんど主人公と言っても過言ではなかった。中浦は結構こういった戦時的歴史に強く、これがハリケーンだとかメッサシュミットだとか言って説明をつけ加えていた。川辺は、スピットファイヤーが気に入ったようで、その戦闘機が登場してくるとしきりに映像を見ながら言った。

「これー、格好いいな」

「これ、スピットファイヤーって言うんだ。強いんだぞ」

「ゼロ戦よりか？」

「いや、やっぱりゼロ戦の方が強いけどな」

「ふーん」

映画の終盤は、ドイツ軍がイギリス上空から消えていくというような内容だった。

映画館を出ても、その感動が続き、人殺しのために造られた兵器と言いつつも、やはりその洗練されたデザインは、強さと美しさを誇っていた。思いだしたように川辺が言った。

「りょう。あるかな？スピットファイヤー」

「えっ？何が」

「だから、Uコンにスピットファイヤーの機体だよ」

「あーあ、ハハハ…お前！やる気になった？Uコンハハハ…」

「そうだよ！あるのか？スピット」

「あるよ、結構人気あるんだぞ！…そうだ、これから見に行くか」

「おお、行こう」

二人は、少し早歩きになって、模型屋へと向かった。

飛鳥模型店についた二人は、ショーウィンドウの中の模型飛行機に目が行った。その中には、丁度川辺が欲しがっていたスピットファイヤーが展示されていたのである。それを見た川辺の目が一瞬大きく見開かれた。

「おい！あったスピットだよこれ…そうだよなー？」

「そうさ。これがスピットファイヤーさ」

「格好いいなあー」

「まず、入ってみよう」

「ああ」

ガラガラと店の戸を開けると、店内の天井には何機もの飛行機がぶら下がっていた。

「おおー、すげーな。これ全部Uコンか？」

中浦は首を横に振って言った。

「いや、全部じゃないよ。ほら、翼のところにスイベルが付いてるのがUコン、あとはラジコンだよ」

「へえーっ」

店主が川辺たちの方を向き、元気のよい声で言った。

「いらっしゃい！…何？Uコンかい？」

川辺は、かなりニヤケ顔になって、

「そう！」

と言った。

「あっ、その顔はこれから始めたいという顔だな？」

「あれー？どうして、分かるのー？」

「分かるさ、顔に書いてあるよー」

「ハハハ…」

中浦も店主の言葉を聞いて、笑っていた。

「おっちゃん。こいつスピットが気に入ったみたいだよ」

「おおスピットかい？…表の…」

そう言って、ショーウィンドウ側を指さした。

「いい機体だよ。ありゃー…けど、今日は見に来ただけだな？ハハハ…」

「おじさん、何んでもお見通しだな」

「あたり前よ、プロだからな」

店主は、腕をまくり拳を作って力瘤を作って、それを叩いて見せた。

中浦と川辺はその仕草を見て、ニコニコと笑った。そうして今度は、エンジンなどを見るため、ガラスの展示ケースの中を覗いた。店主は、そのようすに自信気にケースの中を指さして言った。

「表のスピットか？…やっぱり、無難なところでエンヤのイチゴウだな。…これだよ」

「へえー！…これかあー」

川辺は、顔を近づけるようにして、ケースを見ると店主がケースから、エンジンを取りだした。エンジンの大きさは、手のひらに丁度乗るほどの大きさで、アルミ合金の色をしていた。ドン！と台の上に置くと、川辺が手に取って見た。

「なんか、すごいなー」

「そいつも、上手く慣らしをしてやると、よく回るエンジンになるよ」

「慣らし？」

そこで、中浦が説明した。

「そう、エンジンは慣らしが必要なんだ。最初は、しばらく台にくくり付けて、低回転で長時間かけっぱなしにしてやる」

「そういうこと」

と、店主が笑う。と、その時、店の外でブロロローンという音が聞こえた。店主は、外の方へ目で合図を送った。

「丁度今、エンヤのイチゴウが慣らしをしているぞ」

「おお、ちょっと見てみようぜ」

「ああ」

店の外では、大きな木製の台にくくり付けられたエンヤの一・五エンジンが、かなり大きな音を立てていた。

「なんか、力ありそうだな…ところで、イチゴウってエンジンの大きさのことを言ってるのか？」

「ああ、そうだよ。大概はイチゴウかゼロキューだよ。ゼロキューはイチゴウより小さいんだ。ワイヤーも違うんだよ」

「へえー？…お前詳しいな」

「すぐに、お前も詳しくなるよ」

そうして、川辺はUコンに必要なものの装備を確認していった。

家に帰った川辺は、Uコンへの夢を抱きつつ自分の貯金とにらめっこをしていた。

「うむ。なんとか買えそうだ」

中浦から借りたUコンの専門雑誌『Uコン技術』を引っ張り出し、パラパラと頁をめくり始めた。

「ふーん、随分いろんな機体があるんだなー」

早速、翌日には銀行へ行き貯金を降ろした川辺であった。すぐに、中浦と会う約束になっていた。

「お前、金持ってんなー」

「いやー、ちょっとした貯金だよ」

「だいじょうぶか？」

「何が？」

「貯金！…何かに使うんじゃないのか？」

「うむ？…それはUコンだよ」

「ハハハ…」

飛鳥模型店に入った川辺たちは、愛相の良い店主と再び顔を会わせた。

「おっ！また来たな。…その顔は、ついに買いに来たなあ」

川辺は、その言葉でふきだした。

「ハハハ…当たり！」

「ありがとうーございまーす。…やっぱ、スピットか？」

「そう、あれ！」

と、ショーウィンドウの中を指さした。店主は、一瞬考えたような表情をして、応えた。

「おおっ！完成品でいいのか。自分で作らないんだな」

「作る？」

「そう、ほとんどの人が、自分で作ってるんだよ」

そう言う、棚の上から濃い目の青い長い箱を降ろして川辺の前に置いたのである。

「これだよ、キット品は…こっちの方が安いぞ」

川辺は箱の蓋を開けて、中を見た。中にはバルサと呼ばれる木材や型になったベニヤなどの材料が入っていて、製図用の青い設計図も入っていた。

「うむー、そうか、作るのか…でも、いいや俺はあれで」

「そうか」

「まあ、お前は、最初完成品でもいいかもな」

中浦が釘を打つように言った。

それから必要な物を全て揃えたのである。結構せっかちだった川辺は、Uコンを抱えてさっそく、この間の広場へと向かった。

ー 初フライト ー

広場に到着すると、ブロローンという、Uコン機の飛び回る音が、響いていたのである。

「やってる、やってる」

広場は、相変わらず牛米たちのUコン飛行場と化していて、数機のUコン機が待機していた。今飛ばしているのは、この間の太っていた奴だった。川辺と中浦に気が付いた牛米は、

「おお、見に来たのか？」

と言いつつ、川辺が手にしているスピットファイヤーを見たのである。

「あれっ！…買ったのか？スピット！」

「ああ、今な」

「…それ？飛鳥にあった奴じゃないか」

「よく分かるな」

「完成品買ったのか？」

「そうだよ」

「ふーん、見せてくれよ」

川辺は、牛米にスピットファイヤーを差しだした。

受け取った牛米は、じっくりと機体を回転させるようにして、眺めたのである。

「やっぱり、完成品は綺麗だわ」

完成品は、模型専門の店で作るため完成度が高く、仕上げ状態も良好なのである。スピットファイヤーの機体は、三分の一下側がクリーム色で、上面は迷彩と呼ばれる軍隊用の塗装をしていたのである。迷彩塗装は、スプレーを使いぼかしたように二色以上の色で塗装されているものである。翼の上には、イギリス空軍のトレードマークが張り付けてあった。赤とブルーの丸い略章である。

「飛ばしてみようかなー」

と、なにげなく川辺がいうと、驚いた表情をして牛米が言った。

「えっ！これとかー？」

「ああ…だめか？」

中浦もその言葉に対して言った。

「待てよー、エンジンの慣らしも終わってないし。それに、もったいないよー」

「そうだよ、俺の機体があるから、まずはそれで練習してからにすれよ」

しかし、川辺はどうも不満な表情を見せたのである。

「いや、いいよ。飛ばしてみる」

牛米と中浦は、顔を見合わせて呆れた表情をした。

「じゃあーさー、俺が上に上げてやるよ。そうして、教えるからーでないと、絶対に落とすぞ」

「ああ、分かった」

やがて、今飛んでいた飛行機が燃料切れで、着陸をした。Uコンの場合は、ラジコンと違って、エンジンのコントロールができないので、燃料が切れるまで、飛び続けなければならないのである。

スピットファイヤーが、操縦用のワイヤーに取り付けられた。新品のスピットファイヤーの燃料タンクにひまし油の燃料がポリエチレン製の容器の先端に取り付けられたチューブより、送り込まれた。タンクからは、上下二本のパイプが機体前方のエンジン後方から突き出ている、そのパイプの上の方から燃料を入れることになっていた。下のパイプから、ピューッと燃料が吹き出れば満タンということだった。

次は、キャブレターと呼ばれる部分に数滴燃料が落とされて、バッテリーからの電源コードをプラグと呼ばれる着火用の器具へと通電された。一方のコードは、バッテリーからエンジン上部のプラグの頭へ取付けもう片方は、エンジンに接している金属部分であれば、どこでも良かった。コードを取り付けると、シューという音が聞こえてきた。これは、プラグの熱線部分が通電されたことにより、真っ赤に焼けているという状況だったのだ。そうして、中浦が機体を支え、牛米がプロペラを回転させてエンジンを始動させるのである。Uコンのエンジンというのは、簡単に始動できるようになるまでは慣れが必要だった。

牛米はキャブレターを指で塞いで、ゆっくりとプロペラを回転させてみた。これは、エンジンを始動させるのではなく、燃料をエンジン内に送るのと様子を伺うという二つの作業なのである。数回ゆっくりと回すと、ガクッ！と手に感じるものがあった。

「きたっ！」

次の瞬間に、人差し指と中指を揃えて、プロペラを本格的に回転させたのである。しかし、回転させるとすぐに始動するのではなく、数回回転させないとなかなか、始動しないのである。回転させるたびにエンジンからは、ブロンという音が聞こえた。そうして、一度手を止めて、もう一度燃料ポンプを使い排気部分から、直接エンジンルームに、数滴の燃料を送ったのである。それでプロペラを回転させると、ブロロロ…、プスン！と、いって止まった。

「おお、なかなかこいつかかりやすいぞ」

そう言って、ニコリと川辺と中浦の顔を見た。

さらに、プロペラを回転させると、ブロロロン、ブロロン…と不規則に低い音でエンジンが回転を始めたのである。その途端に牛米は素早く、ニードルバルブと呼ばれる送油量調節のバルブを回転させ始めた。川辺は不安そうに牛米の作業を見守っていた。ニードルバルブを調節していくと、不規則な低音から、高回転のカン高い安定した音へと変化していった。ブブブブロロロ…そこで、最高出力に達した時には、スピットファイヤーは、すでにプロペラの推進力で、前進しようという力と風圧ですざましいものとなっていた。さらには、間近でのエンジン音もすごい迫力

で、大声で叫ばないと会話すらできなかった。牛込は、中浦に首を縦に振って合図を送り、川辺に行こうという合図をしたのである。それと同時に牛込と川辺は、中央に置いてあるハンドルめがけて走って行った。川辺は少々緊張した表情をしていた。

ハンドルの置いてあるところへ到着した牛米は、それを取り縦に構えた。しかし、ここですぐに離陸する訳ではないのだ。というのも、ハンドルは上下同じ形をしているので、上下反対に持つということも考えられ、エレベータ（昇降舵）の確認をするのが決まりとなっていたのだ。牛米はハンドルを手いっぱい上に上げて見せた。すると、機体を押さえている中浦が片方の手を上に上げた。次にハンドルを手いっぱい下に下げた。すると同時に手が下に向けられた。中浦が手下に向けてエレベーターが正常に作動している合図を送ったのである。

「いいか、こうやって必ず確認するんだぞ」

「わかった！」

川辺の方を一瞬見た牛米は、再び中浦に目をやりハンドルとは反対の左手を上に上げてそれを振り降ろした。それと同時に、スピットファイヤーが中浦の手から離されて、離陸が始まったのである。川辺は、その瞬間にゴクリと唾を飲んだ。火山灰の上をゆっくりと滑走し始めたスピットファイヤーは、時折小石などで弾みながらも、尾翼をゆっくりと持ち上げたのである。尾翼が上がるのを確認すると、牛米は静かにハンドルを上にしていった。すると、スピ

ットファイヤーは、フワリと浮かび上がり、安定して上空へと上がって行ったのである。川辺にとってはUコンのハンドル位置からの眺めは初めてで、感動する一瞬でもあった。

「おおー」

と、叫ぶだけの川辺であった。上空に上がってから一〜二週ほど回転したあと、飛行安定性能を確認した牛米は、川辺の後ろに回り込んでいった。

「いいか、ハンドルを上によれば上がるし、下によれば下がるんだ。だけど、あまり急激には、動かすなよ」

「ああ、分かった！」

そうして、緊張している川辺にハンドルを渡した。最初は牛米も手を添えて補助しようとしたのだが、突然川辺が、ハンドルを牛米から奪ってしまったのである。と、その瞬間から、安定して飛行していたスピットファイヤーが上下にものすごい勢いで体勢を崩し始めた。

「うわーっ！」

「だめだー！」

次の瞬間、急上昇したスピットファイヤーは、川辺側に入り込み、弛んだワイヤーからは、もう操縦が伝わらなくなったので、慌てて反対側に走りだしたが、失速したスピットファイヤーは、ものすごい勢いで地面に激突していったのである。

「やっ、やったー！」

という驚きの声がみんなから上がり、墜落地点へと駆け出した。川辺はしばらく呆然としていたが、事態に気が付き、恐る恐るみんなより遅れて、駆け出した。

「あーあ、もったいない」

「こりゃー酷いわ」

と騒いでいる後ろから、川辺がのぞき込むようにして、墜落地点を見た。

「あー」

がっかりと落ち込んだ表情をして、そこにしゃがみ込んでしまったのである。それは、映画「空軍大戦略」で見たあの堂々たるスピットファイヤーの姿とは、かなりかけ離れたものであった。その落差が、さらに川辺の心の中で悲しいものへと変わっていった。

「だってお前、ハンドル取っちゃうんだもなあー、まだ早いよ…ひとりは…」

「……」

牛込が困った表情で川辺に言ったが、中浦はそれを慰めるように、しゃがみ込み、

「心配すんなって、良くあることだよ…最初おれのキングフィッシャーで練習すれば良かったな。…スピットは修理できるからさあー、持って帰ろうぜ」

「ああ、分かったよ。すまんかったな牛込」

「なんにも」

「それにしてもこれ…」

と機体を持ち上げ、主翼の左が原型をほぼ保っていなかった。尾翼のエレベーター部分もグラグラになっていたの
で、そっと支えるようにして、立ち上がった。

「しゃーないな、ワイヤー外そう」

と中浦が言った。周りのみんなは残念そうに、川辺の後ろ姿を見送っていた。丁度日没に近づき、濃いオレンジ色
が半分山に沈みかけた太陽を中心に、広がっていた。

ー復活の日々ー

飛鳥模型店では戸を開ける音がして、ズタズタになったスピットファイヤーを抱えた川辺と、それに付き添うよう
に中浦が店内に入ってきた。店主は、ショーケース中の整理をしていたらしく、ケースの下から立ち上がるようにし
て、顔を出した。

「いらっしゃい！」

スピットファイヤーが目に入った店主は、目を丸くして言った。

「おお！ひでえーなあ、それー…さっき持ってったばかりじゃないか？」

「へへへ…やっちまった」

「どれどれ」

ズタズタになったスピットファイヤーを、ショーケースの上に置いた。天井にぶら下がっている他の展示されているUコン機は、目を背けて悲しんでいるようにも見えた。

「それで？…どうする！直すのかい」

少し考えて、川辺が「うん」という返事をした。中浦は横から苦笑いして店主を見ていた。川辺当人は、頭を掻いて困った表情をしていたのだが、店主は笑っていた。

「これー、お金かかるよ。…丸井くん！ちょっと！」

「だいぶかかりそう？」

「ちょっと待ってくれー、うちの製作大将が来るから」

すると、店主の右後ろの戸口から、少し長髪でヒョロっとし、ニキビ面の若い店員が姿を現した。

「はい？…うわーあ！やってもうたな。派手に…」

と、苦笑いをしながら近づいてきた。丸井と呼ばれた店員は、一瞬店主の顔を見てから、川辺たちの方を向いた。

「いくらかかる？」

と店主が丸井に言うと、少し困ったように眉間にしわを寄せているようすだった。その表情に川辺は、再び不安になり、少し下を見た。

「うむー！」

と、うなりながら丸井は、翼の下や尾翼を眺めていた。

「そうだなあー、五千円ってとこだなあー」

「ええー、五せ・ん円」

と血相を変えた川辺に、間を置かずに、

「なんだけれど、大出血サービスで千円でいいや」

「ほんと！」

と急に明るい表情になった川辺と中浦に、店主が、

「オイオイオイ、また内が赤字かよー。ハハハ…まあいいさ！これからの大事なお客さんだしな。…これから、沢山かってくれよ」

「えっ、ほんとにいいんだよね。千円で…」

そういうと、店主は黙ってうなづいた。

そこで、彼らと店側の契約が成立し、スピットファイヤーは瀕死の重傷を負いながらも、復帰する兆しが見えたのである。

「…で、どのぐらいで直るのさ？」

「日数か？」

「そう」

「うーん、一週間ってとこだな」

「ありがとう。頼むよ」

川辺は完全にニコニコ顔だった。店主も笑いながら、うんうんと数回うなづいた。

「じゃあ、これ預かるよ」

と言って丸井は、スピットファイヤーを持って戸口から、奥へ消えて行った。

その修理までの日々の中でも、毎日のように日暮れまでの短い時間、Uコン機が誰かの手によって、飛ばされていた。川辺は、その間じっと飛ばしている姿を、うらやましそうに見つめていたのである。

三日後、中浦がいつもの飛行場に彼の愛機のキングフィッシャーを抱えて、川辺とともに姿を現したのである。飛行場では、相変わらず牛込大介が中心となって、フライトを楽しんでいた。

「おっ！ついにキングフィッシャー登場か？」

「おお、しばらく飛ばしてないから、軽く肩ならしってとこだな」

飛行していた、Uコン機が丁度着陸すると、牛込は笑みを浮かべて、

「りょう。次飛ばしていいぞ」

「おお、次いいか」

とキングフッシャーを、離陸地点へと運んで行った。

「りょう！飛ばすんかあー」

「ああ」

と他の者にも声を掛けられた。ワイヤーから外されたメッサシュミットは、例の太った者が離陸場所から、待機場へと移動して行った。すぐに、外されたワイヤーには、中浦のキングフィッシャーが取り付けられた。

入念にエンジンの調整をしていたので、中浦のキングフィッシャーのフジ〇・九は、数回の始動で心地よい金属音を上げて、出力全開の状態まで跳ね上がり、離陸態勢が整ったのである。大概是、パイロットが自分でエンジンを始動し、補助する者が機体を支えて、離陸までの補助をするという流れになっていたのである。一通りの準備が終わると、中浦はニコリと補助の者に笑みを返して、出発の合図をした。

ブイイイーン！と一・五エンジンよりは、少し高めな音を立てて滑走を始めたのである。そのとき、キングフィッシャーの離陸の様子を伺っていた牛込が独り言を言った。

「あれー？りょうのキングフィッシャーは○・九だろ？あれ一・五用のワイヤーだぞ」

ワイヤーは、エンジンのサイズによって二種類用意されていた。一・五用と○・九用である。一・五用は○・九用に比べて長いのである。

「あれっ？これワイヤー違うぞ！」

と既に離陸した後に、中浦が気づいた。しかし、Uコン機の場合燃料が切れる迄、飛び続けなければならないという宿命があったので、どうすることもできなかったのである。ここでの障害は、ワイヤーの重さで、機体が少々内側に引っ張られて、飛行が安定しないということだった。

「でも…だいじょうぶそうだわ」

その瞬間、キングフィッシャーは、一段と高い位置に上昇していった。一・五ワイヤーのおかげで、機体のスピードが遅く感じられた。そのため、周りの情景を背景に飛行中の様子を伺うことができたのである。通常は、パイロット側から機体とともに上空を眺めると、周りの景色がものすごい速さで流れていくものであった。しかし、中浦の視線の先では、結構ゆっくりと余裕を持って景色を眺める状況だったのだ。

「いいぞ、いいぞ、なかなかいいぞ」

と中浦は独り言を言い、円周の外で見ている川辺に手招きをした。

「こいよー！」

牛込は、川辺の方を見て言った。

「川辺行けよ。りょうが呼んでるぞ」

「おお」

川辺はキングフィッシャーが、円周の手前まで来た瞬間に、一気に中心めがけて駆け出した。

ブイイーン！

相変わらず、安定した飛行で中浦のキングフィッシャーは、飛び続けていた。ダッダッダッ…と走った川辺が中浦の所までたどり着き、中浦右横に着いた。Uコン機は、全て左周りなので、その位置に着くのが一番よかったのである。

「ノブ。どう？やってみるか」

川辺は不安な表情を見せて呟いた。

「いやーあ、危ないから…」

「だいじょうぶだって！おれが付いてるしさ。それに、急なハンドル操作しなければ…そうだ。最初はさあー、手首動かすなよ。腕を上下するだけにして、やってみようよ」

「そうかあ？」

「ああ…来いよ」

中浦はハンドルを右手から、左手に持ち変えて補助する姿勢を取った。

「さっさあー」

二人はその場で、ゆっくりと回転を続け、川辺は静かにハンドルに手をかけた。

「ノブ！焦るなよ…ゆっくりだ。ゆっくり動かせ」

「分かった」

ブイイーン！

ハンドルは左側から、本来手を入れる部分の外側を持ち、右から川辺がそっと、定位置に手を添えた。川辺は緊張で少し、顔が引きつっていた。

「そうだよ。それ！…ゆっくり動かせばいいんだよ…」

ブイイーン！

「だいじょうぶじゃないかノブ」

川辺は口を開けて、目をキョロキョロとしていた。

「ノブ！機体ばかり見るな、目を回すぞ。ときどき、他の風景も見ろんだ」

「わ・分かった」

そうして、横目で川辺のようすを伺い、中浦はうなずいた。

「よーし、だいじょうぶだ。おれー、手離すぞ」

「えー、ちょっと待ってくれって…」

「だいじょうぶだってノブ！」

そうして、静かに手を離した。

「あああー、おう？だ・だいじょうぶだ。へへへ…分かってきたぞ」

「だろー」

ブイイイーン！

中浦は軽く拍手を送り、みんなの方を見た。そうして、両手をみんなに向けて大きく振ったのである。

「やったー！ハハハ…」

みんなも、拍手をしていた。その中、川辺の操縦するキングフィッシャーは、安定した状態で飛び続けていた。

旋回を何度も繰り返していくと、段々と川辺の表情も緩んできた。だが、慣れない川辺は、機体を見続けていたため目が回ってきていたのであった。

「おっおおおお！」

「ノブ！大丈夫か？」

川辺の足どりは、千鳥足になっていき機体もフラフラと揺れてきているのであった。外から見ていたみんなも笑いながら、

「落ちるぞー！ハハハ…」

と叫んでいるのだった。

その時である。キングフィッシャーのエンジンが燃料切れで、パタリと止まった。それと同時に川辺の手に力が入り、ハンドルを強く握ったのである。

「ノブ！貸せ！ハンドル貸せ！」

「ああ？あああー」

機体はエンジン停止により、次第に高度を降ろして行った。右後ろに居た中浦は、川辺の持つハンドルに素早く飛びつき、川辺は手を離した。

「よし！」

一度体勢を崩したキングフィッシャーではあるが、中浦の手に渡ると、安定した滑空姿勢を見せて、静かに火山灰の広場の上に降りて行ったのであった。

ザザッ！…カラカラカラ…

キングフィッシャーは接地音とともに、軽やかに着地し、少し走ったところで止まった。

「やったー！ハハハ…」

と、みんなから声が上がり、駆け寄ってきた。中浦は川辺の肩を軽く叩いた。

「うまくいったな、ノブ」

「やっぱり上手いわ、りょう」

「なに、じきに覚えるさ…」

「ハハハ…そうかなあー。でも、やっと飛ばせれたよ」

「ああ、面白いだろ」

「うん、少し目が回ったけれどな、ハハハ…」

そこへ牛込たちが近づき、川辺と中浦に拍手を送った。

「川辺！ やっと一人で飛ばせれたな」

「ああ、面白かったよ。なんとなくコツが分かった。少しずつ動かせばいいんだよな」

「そうさ」

単独に操縦した川辺は嬉しくて仕方がないのであった。さらに、中浦も一・五のワイヤーで見事に着陸したということで、満足気だった。

その晩のことである。自宅の部屋で川辺は、中浦から借りた専門誌「Uコン技術」を何度も繰り返して見ていた。それと、機体以外の備品を取り出しては、点検していたのである。

「うむー、これが結構いい匂いなんだよな」

と、Uコン機用の燃料の匂いを嗅いでいた。このUコン用の燃料はラジコンと共有になっているもので、ひまし油やニトロなどの配合されたもので、燃料のグレードによって、ニトロの配合が高まり、さらにそれに準じて金額も上がっていくのである。

川辺の部屋は、二階の一室で下から階段を掛け上がる父、益男の姿があった。

「ノブ！入っても良いか」

「ああ、いいよ」

ササーという、襖状の引き戸を開けると、そこには白熱球の淡い光がこぼれ、雑誌を手にする信彦の姿があった。

「ノブ！なんか最近、飛行機を買って遊んでるんだって？」

「飛行機？…Uコンだよ、Uコン」

「Uコンか？…ハハハ、どこかの川の名前みたいだな」

「おっ！とうちゃんなかなか、学術的なことじゃないか。それはメコン！」

「ハハハ…でっ！そのUコンだかメコンだかってのは、どこにあるんだ？」

益男がニコニコ顔で、ノブの前にあぐらをかくようにして、座り込んだ。益男は、黒い縁の眼鏡をかけていて、髪を七三に分けていた。

「なんだ、とうちゃん！Uコンに興味があるのか？」

「うむ？いや、まあなんていうかさー、たまにはノブがどんな遊びしてるか…」

「…おれが、どんな遊びしてるか。観察？」

「オッホホン…じらすなよ」

と益男は、頭を搔いた。

「しゃーないなあ。だけど、今は無いよ」

「な・無い？」

と拍子抜けをした表情を見せる益男であった。

「そう、ちょっとね。修理に出してんだよ」

「修理？…ハハハ…さてはノブ？お前、墜落させたな」

益男が人差し指を信彦に向けて言った。

「イエース！そういうこと」

「あっ、そう…」

と、座ったまま後ろを向いた。

「でもね。ほら！この雑誌を見れば…」

後ろを向いた益男がニコニコしながら再び、信彦の方を見た。

「えっ！なになに」

信彦の両手の上に見開き状態に広げられている雑誌があり、その雑誌をのぞき込むようにして、益男が奪い取ったのである。雑誌の中には数々の機体が紹介されていて、パラパラと素早く頁をめくっていく益男の姿があった。

「うむー！ふむふむ、うむー！」

「まったく、どっちが子どもか分からんよー」

笑みが膨らんだ益男が、二頁進んでは一頁戻ってという動作を繰り返しながら、問いただした。

「んで、ノブのはどれだ？」

「うーんと、…ちょっと貸してよ」

「あっ！」

再び雑誌を取り上げた信彦は、数頁パラパラとめくり、益男に雑誌を戻した。そうして雑誌の中の機体に指を差したのである。

「これだよ、これ！…」

「ス・ピッ・トファイヤーっか？…ノブ、やっぱり戦闘機は、ゼロ戦だぞ！ゼロ戦…」

「いいよ、そんなこと言うんだったら、とーちゃんには見せないから…」

「あっ、いや！戦闘機は、スー？スピットファイヤーだなハハハ…」

その時、襖戸を勢い良く開ける音がした。

「ちょっと！とーちゃん！何回呼んだら聞こえるの！…ノブも！」

「はっ？はい」

と益男は、黒縁眼鏡を人差し指と親指で挟んで、持ち上げた。

「あんたまで、ノブと一緒にあって、そんなことしてんの！いい加減にきなさいよ…ご・は・ん！…たくもー！あたしは女中じゃないのよ！」

そういうと信彦の母、萌子は襖戸をバターン！と強く閉めて、階段をダダダ…と掛け降りて行った。

「ほおーう、驚いた！…まったく、男のロマンというのが分からんのかねえー、なあーノブ」

「さあー？どうだか」

そう言って、二人はオドオドと下に降りて行ったのである。

やがて約束の一週間が過ぎて、飛鳥模型店へ足を運ぶ信彦と中浦であった。

店内に入ると店主が戸を開ける前から気が付き、ニコリと笑った。

「できてるよ！」

と一言弾むような声を上げて、店内を歩いてくる二人に話しかけた。その言葉に信彦は、精いっぱい的笑みを浮かべて返事をした。

「ほんと？」

「丸井くーん！きたぞー！」

この間修理に持ってきたときに、奥から出てきた丸井が戸口から現れた。手には、ピカピカに輝いているスピットファイヤーを手にしていた。

「おおーう、…おれのスピット！」

スピットファイヤーは取りあえず、ショーケースの上に置かれた。中浦もニコリと笑い、

「あああー？すごいな綺麗に直ってるわあー、さすが丸井さん」

「苦労したんだよ。これ直すの？特に主翼はズタズタだったからねえー」

と自慢気に言った。

「家の飛行機製造工場は、町一番の職人が居るからなぁーフフフ…」

確かにスピットファイヤーは、前回よりより輝きを増しているようにも見えた。

「それじゃー…これ！」

「おう！サンキュー」

信彦は店主に千円を渡した。

ガチャガチャーン！チーン！

「毎度ありー！」

と相変わらずひょうきんな店主であった。

翌日は日曜日だったので、その日は信彦も真っ直ぐに家に帰り、翌日大勢Uコン仲間が来るということもあって、入念な点検をしているのであった。信彦はプラグという点火具を十字レンチで外し、上からスポイトを大きくしたようなポンプで燃料を数滴垂らして、プロペラを何度も空転させてみた。プラグが外れて圧縮の無いエンジンは、シュポシュポという音を立てて回転した。排気部からは、汚れて黒くなった燃料が出てくるので、それらをぼろ布で拭き

取っているのである。さらに軽合金製のエンジンの頭部に、再び十字レンチでプラグを取り付けて、最後に一ひねり増し締めをした。

「よーし！いいぞ…」

と言いながら、圧縮が加わったエンジンを数回、回転させてみた。今度は、圧縮が始まる辺りで、ジュシャー、ジュシャーという音が聞こえてきた。

「ノブ！…入るぞ！」

襖の向こうから益男の声が聞こえ、すぐさま信彦の部屋へ入ってきたのである。

「とーちゃん！まだ入って良いって言ってないようー」

「堅いこと言うなようー。分かってんだぞ。修理から戻ってきたの？…おっ！それか？スピッツファイヤー！」

「違う！スピットファイヤー！」

「そうそう、それ！…うむーどらどら？」

益男は浴衣姿でニコニコと信彦へ近づき、機体に触ろうとした。

「とーちゃん！…最近変だよ」

その声に一瞬手を少し引っ込めたものの、あきらめない益男の姿があった。益男は、銀行員で毎日遅い帰りが続いていたのだが、この日は土曜日ということで早く帰宅したのであった。

益男が異常に興味をそそり、子どものような表情になっているのを見て、信彦は思わず「ぷふっ！」と吹き出し、機体を益男に渡した。

「ほらー！もう」

「ほほうー、凄いなあー…うむ？思ったよりも軽いんだなあー…それで、これがエンジンかあ？」

と眼鏡を人差し指と親指で摘んで、目の位置から上へ持ち上げて眺めていた。

「うむー！こんな小さいエンジンで飛ぶとはなあー、とうちゃんはゴム動力の飛行機しか飛ばしたことないんだよハハハ…」

そこで、下から萌子の声が響きわたった。

「ちょっと！お二人さーん！ごはん食べるの？たべないのーう？」

「おっ？こいつは危険信号だ！…いま行くぞー！」

と苦笑いしながら、大きな返事をして、信彦の顔を見た。

「ノブ、行くぞ！…」

「ああ」

そう言って、二人同時に下に降りて行った。

木漏れ陽が窓の外からチラチラと振りそそぎ、雀たちのさえずる声で、信彦は目を覚ました。日曜の朝というのは、鳥のさえずる声も気になるほどに聞こえてくるものだ。

「あっあーう…朝かあー」

信彦が窓際に立つと、朝靄が少し立ちこめていて、木や葉の上に光る水滴が輝いていた。その光景を眺めつつ、振り向きぎわにスピットファイヤーを見たのである。信彦は少しだけ微笑み、再び外を眺めて背伸びをした。背伸びしながら深呼吸をしたら、支度をするため襖を開けて廊下に出た。萌子によってピカピカに磨かれた廊下を数歩歩きだしたときである。

「あっ！」

ダダダ…ドテッ！

「痛てー！」

信彦は突然転んだのである。

「痛てーなあー、あれー？これなんだあー」

信彦の足元には、一本のヒモがあり、その先は信彦の斜め向かいの部屋へとつながっていた。そこは、益男の書斎であった。

サササッー

戸の開く音が聞こえて、益男がニコニコ顔を出した。

「とーちゃん？」

「ヒヒヒ…抜け駆けはいけませんぞ、抜け駆けは…？」

と、起きがけの益男が笑っているのであった。そうして、ヒモの先は益男の手にくくり付けられていて、結わえてある左手を上を上げて、自慢気な表情を見せた。

「とーちゃん！いい加減にしてくれよ。…それにそんなところで寝たのー？」

「ヒヒヒ…」

「たくー！頭でもおかしくなったんじゃないの？…それに痛いじゃないか、ほらー！」

と言って信彦は、すりむいた肘を見せた。

「うむっ！そりゃーすきありじゃー」

「なにいつてんだよ。子どもみたいに」

「ちょっと！あんたがたー！朝から何騒いでるのー！」

と萌子の叫び声の下から聞こえた。二人はその声を聞いたとたんに、人差し指を立てて口に当てて、静かに行動した。そうして、ヒソヒソ話しのよう話した。

「とーちゃん、いいかい！とーちゃんは留守番！…これは子どもの遊びなんだからー」

「それはないだろー、ノブ！」

「シーッ！…声が大きい」

「おっ…いいだろ、見に行っても…」

「だーめ」

「いいだろ！」

「だめ！」

「ちょっと、あんたがた何やってんの！」

良く見ると、階段の頂上には萌子が腰に手を当てて睨んでいた。

食卓に付くと萌子が、味噌汁とご飯を二人の前に出し、益男は何気なく新聞を広げた。信彦は出されたご飯を、急ぎ目に食べている。

「ノブ。そんなにかけこんだら、胃に良くないよ」

と萌子が言いながら、ゆっくりと自分の口にご飯を一口入れたのである。テレビからは、朝のニュースが流れてきていた。

「ちょっと、とうちゃん食べないなら、下げちゃうよ…」

「あ、あっあ…いや、いま食べるところだ」

慌てながら益男は、新聞を閉じて小さな声で独り言を言った。

「…まったく、新聞ぐらいゆっくり読ませてくれよなあ〜」

その声に萌子がギラリと目を見開いて、益男を睨んだ。

「ちょっと、とうちゃん何か言った」

「えっ？ハハハ…別に〜。あっ、ほら！かあちゃん今日は曇のち雨だってさ…」

その言葉に呆れた表情をして、萌子は沢庵をガブリと大きな音を立てて噛んだ。

益男もやっにご飯を食べ始め、納豆に手を出したところだった。唐突に電話のルルル…という呼び出し音が鳴り、萌子が立ち上がった。その立ち上がった瞬間に、信彦はご飯を一気に駆け込んだ。

「ちょっと、とうちゃん。町内会長の関田さんからよ」

「ゴホッ！ゴホッ！…おっ、分かった」

益男は納豆で粘ついた口元をティッシュペーパーで拭いながら、電話口へと向かったのである。

「ああー、もしもし…」

「ああーなるほど…でもねえー、今日は晴のち雨だっていうし、…そうそうそう、この間は大きいのを上げた。ハハハ…」

その電話に夢中になっているところで、信彦は音も立てないで二階へ消えて行き、再び降りてきたときには、スピットファイヤーを抱えていた。ゆっくりと、静かに茶の間を通り過ぎて行き、萌子はその様子を黙って見ていた。

すっかりと、仲良しの町内会長関田との会話に夢中になっている益男は、そんなことも知らずに、釣りの話しに花が咲いていた。益男の電話はさらに長引き、萌子が益男の肩を軽く叩き、食卓を指さした。益男は話しをしながら萌子の顔を見て、数度うなずいた。

「いやー、行きましょうハハハ…」

萌子はそのうなずきのあと、すっかりと食卓を片づけてしまったのである。

「うん、そうですね。うんうんうん、じゃあーまた」

ガチャリ

と受話器を置き、益男は両手を蠅のように擦り合わせながら、食卓へと戻って行ったのである。

「あれ？…かあちゃん、おれの飯は？」

「あんた、うなずいていないって言ったでしょう」

「言っていないよ。あれは食べるってことだったのに、ひどいなあ〜」

「なに言ってんのよ、どうせ遊びの話でしょ。あたしだって片づかなくて困ってんだから、いないといたらすぐ片づけるのよ…ごらんささい。ロンが喜んで食べてるわ。ハハハ…」

萌子の視線の先には、川辺家の犬のロンがペチャリペチャリと美味しそうに音を立てて、益男の食事を食べていた。

「あああ、ロンお前まで俺を！…うむ？かあさん。そういえば信彦は？」

「ノブならさっき飛行機持って出て行ったわよ」

「えええ、あいつー！どいつもこいつも全く、おまけにノブと行くと思ったから、会長の釣りの誘いまで断わっちゃたよー、まったく厄日だ」

背藻井川の広場では、牛米たちがすでに集まっていた。朝から好天気のため、いつもより活気があるようにも見えた。信彦は一人でスピットファイヤーを抱えていて、中浦と広場で待ち合わせることにしていた。

「おっ！甦ったなハハハ…」

と牛米が笑顔で信彦を受け入れた。信彦とスピットファイヤーは、朝日を浴びてキラリと輝いた。

「まあね。…ほら！」

右手でスピットファイヤーを持ち上げて、挨拶をした。さっそく、広場では太ッチョのメッサシュミットが離陸前のエンジン始動をしていて、ブルルン、ブルルンと指でプロペラを叩きつけるようにして回していた。

「メッサか？」

「おお、宿命のライバルってどこだな…」

「でも俺はまだ、ひよっこだから、ライバルなんかにはならないよ」

「…いやあー、コツさえ掴めばすぐさ…あっ！ほら、りょうが来たぞ」

中浦がツカツカとゆっくり歩いてきて、機体を上に持ち上げて大きく振って見せた。

「あれ？…りょうの奴、新作か？…あれはカーチスじゃないか…」

「あれー？ほんとだ。買ったなんて、ひとも言っていなかったけどなあ」

「カーチスは一・五用だな、…じゃあエンジンも買ったのかあ…最近みんな力あるなあ」

そこへ他の者も集まってきた。まだ始動していない太ッチョのメッサも始動を一時止めて、駆け寄ってきた。

「りょう、いつ買ったのよ」

「へへへ…秘密工場は、着々と動いていたのだ」

「エンジンもかあ？」

「ああ、すっかりと慣らしも終わってるよ」

「エンヤか」

「ほうら！」

中浦はカーチスをみんなの居る中央に置いた。

その出来事に、信彦のスピットファイヤーの存在も小さくなってしまった。また、カーチスの出来もなかなか良く、完成品に近いように見えたのである。

「りょう！出来もいいよ。ピカピカじゃないか。どら…」

牛米はカーチスをそっと持ち上げてみた。

「へへへ…ちょっと今回は、頑張って時間かけて作ってみたんだ」

カーチスを持ち上げた牛米は少し首を傾げながら言った。

「りょう。これさー、出来はいいけどちょっと重たくないかあ？」

「ちょっとパテを使いすぎたんだよ」

「ふーん」

カーチスの曲面はかなり綺麗に仕上がっていて、見栄えは素晴らしかったが、パテと呼ばれる隙間を埋める材料をふんだんに使用したため、機体重量が増していたのである。

一通り眺めた太ッチョたちは、納得したようにうなずき、メッサに戻って行った。

信彦も牛米から機体を渡されて、じっくりと眺めた。

「へえー、自分で作ってもこんなに綺麗に作れるんだなあー」

「まあー、ちょっと完成品よりは、落ちるけどな」

「なかなか格好いいなこれ」

「へへへ…」

メッサは再びブロブロとエンジン始動を始めるが、エンジンがかからないときは、徹底してかからないものなのである。その度に、キャブレターから数滴燃料を送ってみたり、プラグを外して発熱状態を確認したりするのである。

「なあー、バッテリー弱くないか。もう一段上げろよ」

そう言って太ッチョは、バッテリーに取り付けてあるニクロム線のようなコイルの抵抗を挟むクリップの位置を一つバッテリー側へと、レベルアップさせた。そのことにより、プラグは赤身をさらに増した。

「あちち！ふーふー…おお、これでいいわ」

そうして、再びプラグを取り付けた。

ブロロン…

「おっ！今度はいいみたいだ」

しかしその少しの始動音もそれっきりで、再びエンジンが回転することはなかったのである。

「全然だめだよー、かからんわ」

そこへ牛米がやってきた。

「だめかあー？じゃあさあー、りょうのカーチス一発行ってみるか！」

「おおそうだな。じゃあー、ワイヤー外すぞ」

メッサのエンジン始動は、諦めたようでワイヤーには、カーチスがくくり付けられた。牛米がエンジン始動の助手を勤め、中浦が固定されたエンジン始動にかかるのだがカーチスのエンジンは、倒立タイプということでエンジンを上下逆さに取り付けてある。それで始動には、機体を手で持ち上げて、ひっくり返して始動をしなければならなかった。

「倒立ってのも、結構大変だな」

牛米はガッチリと押さえたカーチスを見て、中浦の顔も覗いた。

「ちょっとな、へへへ…」

外されたメッサも、円周の外でエンジンの試しがけが続けられていた。倒立エンジンのカーチスは、数度プロペラを回しただけで、ブロロン…と心地よいエンヤの響きを轟かせた。エンジン出力を最大にニードルバルブで調整すると、裏返していた機体を起こして、車輪を火山灰の地面に接地させた。

「さすが、りょうのエンジン慣らしは上手いわ…一発だな」

「へへへ…」

燃料タンクへ始動時に減った分を追加すると、いよいよ離陸の準備が行われた。中浦は、ハンドルの置いてある場所へと駆け出し、信彦は円周上の位置から下がって行った。

「よーし！いいぞ」

中浦が左手を振り降ろすと、機体の両サイドに刻まれた鯨のような歯と鋭い目がキラリと輝き、出動を待ちわびていた茶色がかった機体が滑走を始めたのである。やがて、数度バウンドを繰り返して、カーチスは上空へと上がって行った。

その時だった。太ッチョのメッサシュミットがエンジン音を高らかに上げた。牛米はその音に気が付き、太ッチョの方を見たのである。

「おーい！かかったじゃないか…そ・そうだメッサも上げれよ。コンバットだ」

コンバットとは、同周円内でUコン機を二機飛ばして、闘うというもので本来はストリーマーと呼ばれる紙テープを尾翼にくくり付けて、それをお互いのプロペラで切り合うというものだった。いわゆる空中戦をシミュレートするものである。

「メッサも？」

太ッチョは驚いた表情を見せたが、すぐに笑顔になり親指を立てて拳を作った。

「よーし！分かった」

メッサの機体は太ッチョが押さえて、もう一人がワイヤーを巻き付けてあるハンドルから、それを伸ばし始めた。ハンドルは半円型となっているが、もう片方の半円をカチャリとはめると円形になり、その周りがワイヤーを巻き取るリールの役割をしているのである。ワイヤー自体もかなり細いもので、○・五ミリ程である。

「りょう！」

牛米が中浦の立っている円周の中心へ向かって駆け出した。その慌ただしい光景を見ていた信彦は、これからいったい何が始まるのか、どうなるのか分からないまま、ただただキョロキョロを辺りを見回していた。

「りょう！メッサのエンジンがかかったから、コンバットにしようぜ」

「えっ！…いきなりか？…うん、いいよ。望むところだ」

「よし！」

円の中心に伝令に行った牛米は、要件を伝達すると再び駆け足で、円周の外に出たのである。上空では、カーチスが心地よくブロロローンとエンジン音を立てて旋回を繰り返していた。

太ッチョのメッサは既に、ワイヤーが張られて円周の外で待機していた。牛米が今度は、メッサの方へ向かって走り出した。

「おい！OKだ。…やるぞー！」

メッサにたどり着いた牛米は、太ッチョと交代して機体を押さえた。メッサは黒とグレーとの迷彩塗装が施されていた。牛米はメッサを上に向けたり下に向けたりして、上下する環境にしてもエンジンの回転が変わらないことを確認していた。やがて太ッチョがハンドルにたどり着くと、牛米が大きな声を上げた。

「りょう！行くぞ」

「太ッチョ！りょうの方へ行け」

太ッチョと呼ばれた井股はうなずき、中浦のいる方へと上空のカーチスを気にしながら、駆け寄って行った。そのようすを見ていた中浦も出来るだけカーチスを高い位置で飛行をさせている。

「井股！早く来いよ」

と中浦が左手で手招きした。コンバットのルールのひとつに、闘うパイロットは、お互いに空いている方の手をつなぐという決まりになっていたのである。そうしないと、気が付けば段々と、お互いの中心位置が変わり、どうしようもないことになってしまうからだった。

「OK！」

と太ッチョが叫ぶと牛米は、地面にメッサを置かずに両手で抱えて、そこから手で投げ込む、手投げ式の離陸をする用意をした。頃合を見て太ッチョへ目で合図を送り、思い切ってメッサを円周の外側のやや上向きに離したのであ

る。そのとたんに、メッサは見事に一瞬で上空へ上がって行き、既に旋回を続けているカーチスに挑む事となるのである。

「オーケーオーケー！やりましたよ…ハハハ…これからが、面白いですよ。さあー、カーチス対太ッちょメッサの運命は？」

とニコニコしながら信彦たちの方へと駆け寄ってきた。

「すっすごいなあー、これ？」

信彦は初めてUコンを見たときと同じように、再び目を輝かせてカーチスとメッサとの闘いにくぎ付けになっていた。

「川辺！これがコンバットっていうだよ。…ほんとうはな、尾翼にリボンを付けて切り合いをするんだけど、練習だからな…ハハハ…」

「へえー、そうかあ」

しかしメッサが上空へ上がっても、カーチスに近づくというのはなかなか難しいのである。カーチスもメッサの後ろを取ろうとして、ひたすら上下にグワングワンと激しく飛び回るのであった。

ブロロローン！

ブイイイーン！

と両者は、エンジンを轟かせ四分の一程後から、メッサシュミットがカーチスを追う形となっていた。両者はしっかりと、手を握り合って自分たちの腕の程を披露している。

「井股！早く追い付いて見ろよ」

「そんなこと言ってるのも今のうちじゃい…ハハハ」

ブオオオーン！とエンジン出力の違う両者ではあったが、若干メッサのエンヤの方が出力があった。そこで、ジワリジワリとカーチスに近づきつつあった。

「へへへもう少しじゃんか」

と中浦は笑った。

「ようし！りょう、もう逃げられないぞ」

メッサがカーチスの後ろに極限までに近づいた時であった。

「へへへ…そうは問屋が…」

とカーチスが急に鋭角に上昇した。

グワワーン！

その急回避に太ッチョがカーチスを一瞬見失った。Uコンは円周を回るスピードが速いので、一瞬食い違うと相手の機体を見失ってしまうのであった。

なおもカーチスは、回避を続けて一回転の宙返りを披露し始めた。

「すっげー！りょうもやってくれるわ」

牛米が驚いたようにして、右手を眉の上に添えるようにして、二機の機影を追っていた。

「いやー、すごいなあー」

信彦も初めて見るコンバットに圧倒されてしまったようだった。

不意を付かれた太ッチョのメッサは、周回上を旋回し、カーチスが少し大き目の円を描いて、宙返りを終了すると半周メッサの後に付いた。

「くそー！機体が重くてだめだ」

中浦はそんな独り言を呟いた。その声を聞いていた太ッチョが今度は笑いながら言った。

「ハハハこいつはいいぞ！」

メッサは円周上から斜め四五度の周回コースで距離を詰めたのである。

「しまった！」

中浦は悔しそうにカーチスを上下に揺さぶった。

メッサは既に、カーチスに近づきつつあった。その緊迫した瞬間に今度は、カーチスが急降下を行い、それにメッサがピタリと付く形になったのだ。しかし、中浦も必要以上に機体を落としたため、地面と接触を免れなかったのである。

「危ない！」

と太ッチョが叫び、機体を上昇させたがカーチスは一步出遅れる形で、地面に車輪が接触し、火山灰がボハッ！と舞い上がった。幸い接触したのは車輪だけだったので、墜落には至らなかった。

「ウワッハハハ…すごい！すごい！こんなの滅多に見れないぞ！」

と牛米が飛び跳ねて喜んだ。次の瞬間カーチスは、メッサの後ろにピタリと付いていた。

「あれー？死ななかったの？」

と太ッチョが言い、中浦は相変わらず「へへへ…」と笑ってみせた。

「しつこい奴！」

太ッチョが叫び、

「あー、リボン付けてたら切ってるのに」

と中浦が悔しがる。その時だった。今度は、中浦のエンジンが燃料切れで高度を落としたのである。

「あっ、逃げた」

太ッチョのその言葉に中浦は、頭を掻きながら着陸体勢を取った。

「へへへ…じゃあー、お先に！」

カーチスは静かに、着陸し中浦はハンドルを置いた。

円周の中央から駆け出してくる中浦を、信彦が笑いながら向かえ牛米も拍手を送っていた。

「すごいじゃんか、りょう」

「すごいなあー」

二人の感動の声を受けた中浦であったが、少し不満気だった。そうして、カーチスを振り返るようにして見て、メッサの燃料切れを待った。

「やっぱ、失敗だわ。パテ使いすぎてて小回りが効かないんだよ」

「ちょっと待ってくれ…カーチス、ワイヤーから外してこようよ」

中浦の言葉を聞いて牛米が、カーチスへと走った。

「牛米！メッサが飛んでるから、危ないぞ！」

「だいじょぶ、だいじょぶ！」

そう言うと牛米は、太ッチョに高度を上げろという合図を送った。メッサは高高度を保つ姿勢を見せ、牛米はカーチスをワイヤーから何なく外して、抱えて来た。

「りょう！やっぱ、これ重たいわ…」

「うん」

「それにさー、このヒンジのところに、塗料が入り込み過ぎててエレベーターが良くないよ」

「ああー、少し改良するさ」

中浦は牛米からカーチスを受け取り、少し後ろに曲がった車輪の軸を力を入れて戻した。

やがて、時間とともにメッサの燃料も途切れて、静かに着陸体勢に入った。

「ワンバウンド！ツーバウンド！着地…なかなかだね」

牛米は後ろを振り返って、メッサの着陸を確認した。その後はすぐに、スピットファイヤーへ目がいった。

「川辺！次飛ばすか？」

「牛米は！」

「俺のはいいよ」

「そうか」

信彦は嬉しそうに、スピットファイヤーを持ち上げた。しゃがんでいた中浦も、カーチスから離れると、信彦の補助を行おうとした。

「今度はさあー、離陸から一人でやってみろよ…だって、こないだ一人で飛ばしただろう」

「ええっ！」

そこで中浦が信彦に近づき、ひとこと言った。

「だいじょうぶだって、俺が後ろに付いてやるよ」

信彦は少し考えたが、一回うなづき中浦を見た。

「よし！やってみるわ」

ワイヤーにくくり付けたスピットファイヤーは、信彦がエンジン始動を始めた。信彦は、ポンプを取って数滴キャブレターへ燃料を流し込み、プロペラをゆっくりと回してみた。

「おおっ、来た来た。圧縮が来た」

そうして勢い良く、プロペラを回すとブロロンという反応で応えてくれた。

「川辺、ニードル何回にした」

「三回」

何回というのは、ニードルバルブを手いっぱい閉めた状態から、何回転バルブを開いたかという意味の合い言葉的なものだった。

「もう半分開けて見ろ」

「こうか？」

「ああ」

それで再びプロペラを弾くと、ブローロン…と少し長く回転した。

「おっ？いいぞ」

「そうだろう」

「ようし！」

再びプロペラを弾くと、ブローロン…ブロン、ブロンとなって停止した。

「川辺、あともう少し閉めてみろ」

「ああ」

ブローロン、ブロン、ブロブロブローロロ…

「よしよし！…ニードル、ニードル！」

そこでエンジンは、ゆっくりとかなり不規則に回転を始めた。信彦は慌てて、ニードルバルブに手を掛けたが、調整は結構落ち着いて静かに閉めていった。

「いいじゃないか、いいエンジンだ」

すると、少しずつ低速回転から、心地よいブオオオーという音に変わり、最後には鳴き叫ぶような、かなり高音の金属的な音へと変化した。これがUコンエンジンの出力が最高の時に立てる音だった。

「頼むわ」

「いいぞ、行け！」

信彦と中浦は、ハンドルめがけて掛け出した。

信彦はハンドルを持ち上げると、少したくましく見えた。

「上！」

「上！」

「下！」

「下！」

「OK！」

舵の確認を終えたら、いよいよ離陸の合図だった。

「いいか、ノブ！焦るな、静かにな」

「任せろ」

次の瞬間、信彦の左手が振り降ろされて、それと同時にうなずいた牛米が、スピットファイヤーを見送るようにして手を離した。

ブロロローン…

静かに走り始めたスピットを、信彦が真剣な眼差しで追っかけ、円周の外で見ていた牛米や太ッチョも離陸に神経を集中させた。火山灰の上を数度に渡って細かく弾み、尾翼の辺りがフワリと浮かび上がった時だった。信彦の右手首が心持ち持ち上げられ、十分に滑走速度の付いたスピットファイヤーは、火山灰の滑走路から静かに離れた。さらに、その後も安定して上空へと舞い上がって行ったのである。

観衆は、少し心配そうに口を開けたまま機影を追っかけ、丁度上空に上がってから一周し、無事に皆の前に姿を現した瞬間に、

「やったー！」

という歓声があがった。いつしか、信彦の緊張の表情もほぐれ、笑みに変わっていた。

「やったぞ！」

「いいぞ、ノブ！…その調子、その調子」

と信彦の後ろでは中浦が彼を励ました。

ブイイイーン…

信彦から見たスピットファイヤーは、以前の苦い思いの墜落した時と違って変わって、はっきりと飛んでいる状態を目で確認することができるようになっていた。

「そうか、これがUコンか…いいぞ、Uコン。いいぞ、スピットファイヤー！」

と頭の中で、言い聞かせていた。落ち着いて、スピットファイヤーを観察すると、翼の上にあるスイベルの状態やワイヤーのたわみ具合まで、こと細かく見ることができた。微かに動かす昇降舵に伴って、機体が機敏に上下を繰り返した。

また、時折辺りの景色も見て、回転から来る目回しも防止できるようになっていた。

「ノブ！いいよ。もう一人前だよ」

「……」

信彦は自分の飛行に酔いしれているようだった。

しかし、いつしか上空には黒く厚い雲が急速的に、覆いかぶさりつつあり、先ほどまでの晴天が嘘のように思われてきたのである。

「あれー？なんだか怪しいな、この雲」

牛米は上空を指さして、小さな声で言った。

「ほんとだあー…これは来るかも」

と太ッチヨが合いの手を入れるように言った。

そう言ったとたんだった。

ガガガン、ゴロゴロゴロ…

という雷の叫びが轟いた。

「ほうーら、来た来た」

牛米は眉毛の上に右手を添えて上空を見上げ、他の者はUコン機を片づける準備を始めたのである。

「ノブ！なんか雨が降りそうだよ」

「ああ、参ったなハハハ…おれの飛行を祝してるのか、邪魔してるのか…」

「あっ！一粒当たった」

中浦が額を拭った。といっても信彦も燃料が無くなるまで飛び続けなければならなかったもので、そのままの状態だった。

「ノブ！俺、片づけに行くぞ。着陸したらすぐに帰れるように…」

「ああ、何んとか着陸させてみるよ」

「頑張れよ」

「おお」

信彦はスピットファイヤーを高い位置に上げた。それと同時に中浦が駆け出した。

ガガン、ゴロゴロゴロ…

と再び雷が鳴った。

ポタポタとまばらに落下していた雨が、その音をきっかけにスコールのような強烈な雨を降らせ始めた。

「うわー！おいおい、川辺どうすんのよ」

「仕方ないさ」

牛米に答えた中浦だった。

ブイイイーン…

ガガン、ゴロゴロゴロ…

ザザザ…

「そうか、晴のち雨かあ…」

と信彦が独り言を言った。

中浦は、バッテリーやポンプ、燃料などをカバンの中にしまって、後は一・五用のワイヤーを片づけるだけにしていた。そんな中、雨はさらに激しく降り始めた。

ズザザザ…

「おおーう、これは凄い」

信彦は左手で額の雨を拭いながら飛行を続けていた。その時、ブロロン、ブロン、プスッ！とエンジンが停止したのである。

「おっ、やっと止まってくれた」

再び真剣な表情になった信彦は、静かに機体を下降させた。しかし、あまり緩い角度だったので、ワイヤーがたわみ、円周上から信彦側へと傾いた。こうなったら、ワイヤーをピンと張るために、後ろに向かって走らなくてはならないのである。

雨で濡れた火山灰の上を、ダッダッダッ…と後退し、ワイヤーを合わせて、スピットファイヤーは三回バウンドして、着陸をしたのだった。

「やったぞー！」

信彦は自信を持ったように力瘤を作り、スピットファイヤーへと向かった。

「よし、着陸した。回収だ回収！…りょう、ワイヤーを巻取れ」

「おおー！」

着陸しているスピットファイヤーの周りでは、みんなが慌ただしく行動した。それもこの豪雨のせいだった。

ワイヤーが巻き取られると、牛米は信彦の肩をポン！と軽く叩いた。

「うまくいったな。もう大丈夫だよ…じゃあーな」

「おお、またな！」

みんなは駆け足で、広場から散って行った。

しかし、帰り道の途中では、ほとんど雨も止んでいた。

—好奇心—

その日、信彦は雨の中を帰る途中、家に着くと親父が裏切られた顔で迫ってくるというのが、頭に浮かんた。しかし、そうは考えながらもビシヤビシヤになった服のままでは、耐えられないのでやはり家路に着く事にしたのだった。

「ちえっ、またあの親父が迫ってくるのか…」

中浦と途中で別れて、家に着くと玄関の戸をガラガラ…と音を立てて開けた。

「あらっ！ちょっと随分濡れたじゃない」

と萌子が言ったが、靴を脱ぎ捨てるようにして、スピットを抱えて自分の部屋へと掛け上がって行った。

「ったくーなんだろ？あれ」

萌子は呆れた表情をして、風呂場の方へと歩いて行った。二階からは、信彦のハクション！というくしゃみの音が聞こえた。

ハアーハアー…

「なんとか、部屋まで親父に見つからずに突破したぞ…」

荒い息のまま信彦は、部屋の襖戸を開けた。しかし、そこには既に先客として益男ががっちりと座っていて、雑誌『Uコン技術』を熟読していた。

「あっ！とっ…」

「ハハハ…、ざまぁ一見ろ。とうちゃんを置いて行くから、雨が降ったんじゃ！」

「ちょっと！とうちゃん勝手に人の部屋に入るなよ」

「ノブ！そんなことが言えるのか…」

と強く言いその後

「ずるいよ…ノブ…」

と弱い優しい口調で寂しそうに言った。

信彦は開き直ったようにして、スピットを置き、

「とうちゃん！連れて行くなんて一言も行っていないよ…それに俺着替えるから、出て行ってくれよ」

「いやだ！…じゃあー約束しよう、とうちゃんを連れていくと…」

「勝手にしろよ…早く出て行けよ」

「おお、そうか連れて行くってことだな、約束だぞノブ！ハハハ…」

「ああ、あああ」

と信彦は面倒臭そうにうなずいた。

「ハハハ…よし！行くぞ、行くぞ…かあさん！…」

そう言いながら、信彦の部屋を出て行った。その直後階段を転げ落ちるダダダーンという音が聞こえた。

「あっちゃー！知らない」

と信彦はシャツを脱いだ上半身をタオルで拭きながら呟いた。

それから、一週間が流れ再び日曜日が訪れた。その間、天気が悪くなったのは二日間だけで、その日は信彦もＵコンを飛ばしに行かなくて、この晴れ渡った晴天の日に飛ばしに行くことになったのである。

しっかりと、早起きした益男は縁側で、ラジオ体操を機敏にやっていた。

「いっちにい、さんしいー、にいにい、さんしいー…」

そこへ信彦が降りてきた、

「ありゃりゃ？とうちゃん本当に行く気だ！」

その声に益男がニヤリと歯を見せて、振り返った。

「おう、ノブ！体操、体操まずは準備が必要だからねえー…早く来い来い」

「いいよ俺は」

「いいから来い！」

元気の良い益男に信彦は呆れながら近づいた。そうして、益男の横に並んで、

「いっちにい、さんしいー…」

と体操を始めたのであった。

その光景を見ていたロンが、ひと声吠えた。

「おん！」

ロンが吠えたのを見て萌子がぷふっ！と吹き出し、

「あれじゃー怪しくて、ロンだって吠えるわよ」

と言った。

「にいにい、さんしー…」

「はい！深呼吸ー！」

体操が終わった益男は、ピカピカと輝いた表情をしており、食卓へと着いた。

「さっ！かあさん。ご飯だ！」

しかし、萌子はその腰を折るように言った。

「ちょっと！調子に乗るんじゃないよ」

「あっ、はっ、はい」

と小さくなった。

やがて昼食を終えて、信彦がバッテリーなどの道具が入ったバッグとスピットファイヤーを抱えて階段を降りてきた。その時、寝室の襖が開き益男が出てきた。

「じゃーん！」

「あっ？」

信彦と萌子は益男の登場した姿に、口を開けたままだったのである。

「ハハハ…どうだノブ。うむ？…どうした？」

「どうしたじゃないよ。とうちゃん！…何、その格好」

と信彦と萌子が同時に和音となって言った。益男は、まるでゼロ戦のパイロットのような服装をしていたのである。

「あのねえー、おまえら、すべては格好から入っていくものだよ」

「だははは…格好？冗談じゃないよ、とうちゃん連れて行かないよ」

「うははは…ばかみたい」

「おん！おん！おん！」

益男は二人の馬鹿にした笑いが、もの凄く気に入らなかったようで一瞬怒りの表情をしたが、すっかりと落ち込んでしまった。

「ええー、おうそうかあー？」

「とうちゃん、普通の格好でいいんだから、普通の格好！ははは…」

父益男を連れて、背藻井川の広場へ向かった信彦である。

「しかし、あれだねえーノブ。天気が良いし、今日はとうちゃんも付いているし心強くて、本当に良い日だねえー」

「はあー？」

独り言のように呟く益男に信彦は、軽くあしらうように返事した。広場に着くと、牛米が信彦を見て独り言を言った。

「あれー？何だあー、保護者付きか？」

「よっお！」

信彦が牛米に挨拶をした。それで続けて話した。

「…これ親父！どうしてもって、くつついて来たんだよ」

「ノ・ノッブ…そんな言い方…」

そこで、丁寧に牛米が挨拶をした。

「ああ、どうも牛米といいます」

「ははは…ああ、どうも信彦の父です。よろしくホホホ…」

牛米は信彦の腕を掴んで、益男から離れたところへ引っ張って行った。

「ねえー、どういうのこれ？」

「いやあー、どうもこうも頭がおかしいみたいで、どうしてもUコンを見たいって言うんだよ。ゴメン」

「いやあー別に、謝らなくていいよ。…そんなんじゃないんだけどさ。へえーそうか。面白い親父さんだな。仲間に入れてやれよははは…」

「冗談じゃないよ。すぐに感化されるんだから…」

益男はいろいろな機体が置いてあるのを、腕組しながらうなずいて見渡していた。

「うむー！なるほど、これがUコンか。うむー！」

牛米との会話が終わり、信彦が益男のところへ戻ってきた。

「何話してたんだ？」

「いや！何…これから、あれを飛ばすんだってさぁー」

「ほう、そうか…うーん。で、あれは何て言うんだ」

「あれはねえー、ムスタングっていうんだよ。おじさん」

と牛米が自分の機体を説明した。ワイヤーにくくりつけられて、離陸を待つ銀色の機体がそこにはあった。

「じゃ！ノブ、エンジンかけるわ」

「ああ」

信彦は心配そうに益男の顔をのぞき込んだ。

「あのねえー、とうちゃん。頼むからここではおとなしくしてくれよな。他の人の機体に触ったり、大声だしたりはだめだぞ」

「ああ、分かった、分かった、それよりほら！あれ飛ばすんだろ」

そう言って、さっさとムスタングの方へと歩いていってしまった。その先には太ッチョなどの顔もあり、牛米がヒソヒソと信彦の父の事を告げていた。

「こんにちわ！」

「ああ、どうもこんにちわ」

と太ッチヨたちも挨拶をした。益男は Mustang の真横に座りこみ、しっかりと銀色の Mustang をのぞき込んだ。

「ほほう、こうやってエンジンかけるのか？」

「はい」

「とうちゃん！邪魔してるよ」

その様子に太ッチヨ少し笑った。牛米は笑みを浮かべて言った。

「そんなことはないよ。邪魔じゃないよ。おじさん」

益男は、どうだと言わんばかりに信彦を見て言った。

「ほらー！邪魔でないとったぞ。…ねえー」

「はあー」

と太ッチヨが言った。

牛米はプロペラを指で弾いていた。時折発するブロロンという音が出るとそれに合わせて、益男が目を丸くさせた。

「いやー、これ小さいくせにちゃんとエンジンなんだな」

と感心したように益男が言う。しかし、そんなに簡単にエンジンはかからないのである。またもや、ブロロロンと数回プロペラが回転した。

「おおー、もう少しか？」

「とうちゃん！」

信彦が益男の顔を見て、首を横に振った。しかし益男はうなずくようにしつつも黙ってはいられないようだった。

ブロロロン！

「おお！」

ブロン！

「おっ！」

ブロロロン、ブロロロン、プスン！

「おう、おう、おおー」

とどっちがエンジンが分からないようだった。そこで一旦、手を休めポンプを使い排気口から数滴燃料を送り込んだ。

「うむー？なるほどねー」

再び、ニードルバルブを調整してプロペラを弾くと、ブロボロボロロン…と心地よくエンジンが始動を始めたのである。

「ほほほうー、かかったな」

信彦が益男を後ろに引っ張った。

「とうちゃん、危ないから下がらないと」

「おっ、そうか？」

ニードル調整により、エンジン出力が最大になり、いよいよ離陸の瞬間となった。

益男は、ニコニコ顔になっているのだった。

「ははあー、これは凄いのう、はははあ」

太ッチョがムスタングを押さえて、牛米が走った。丁度その時だった。後ろから中浦がカーチスを抱えてやって来たのである。

「あっ！おじさん、こんにちわ」

中浦が益男の姿に気が付き、挨拶をした。益男は振り返り、一瞬驚いた表情をして挨拶を返した。

「おおーう、りょうか？お前もやるんだなこれー？」

と益男は、Uコンのハンドルを握る仕草をして見せた。

「はい！…これおれの機体」

「ほほう、すごいなあ！その口」

口とはカーチスに張り込まれた、鮫のような口の模様だった。

「とうちゃん、ほら！離陸するよ」

「おっ」

益男は信彦の言葉に再び正面を向き、腕を組んだ。その視線の先には、太ッチヨが手を離そうとしている Mustang の姿があった。

手から離れると、Mustang は綺麗に滑走し、一瞬にして上空へと上がって行った。

「へえー、結構速いもんだなあー」

と益男がうなずいた。

信彦は中浦の方を向いて、カーチスを眺めた。

「ノブ、おれの少し改良したよ…ほら！エレベーターもスムーズに動くようになったし…」

「おお、いいじゃないか。抜群だよこれ！」

と笑った。

一〜二周を旋回した銀色の Mustang は、晴天の中、目いっぱいの陽光を浴びて、キラキラと輝いていた。そうして、少し安定した飛行を続けたあと、アクロバット飛行に入っていたのである。

「始まったぞー！」

太ッチョが叫んだ。

Mustang は先ず、斜め三〇度の位置から、宙返りを始めた。その旋回性能も安定度も大したものだった。

ブイイーン！

そこで一回転を終えると、二周旋回をして今度は、ウイングオーバーという演技に入った。

「おうおうおう！ウイングオーバーだぞ」

と中浦が叫んだ。

「さすがに大介は上手いわ」

信彦も感心して見とれた。益男は、ただ口を開けて Mustang にくぎ付けになっていた。

ウイングオーバーとは、水平飛行から垂直に上昇し、パイロットの頭上…つまり真上を通過して、そのまま真っ直ぐに降下をして、再び水平飛行の周回で、ほぼ直角に軌道上に戻るというもので、これはどれだけ正確に垂直に上がり綺麗に軌道上に戻れるかというのが、技術上の良否を決めた。

牛米の Mustang は、少しフラつきながらも、やや垂直ではなく八〇度ぐらいの位置を通過して、最後は少し緩やかに、軌道上に戻って行った。

「決めたじゃないか！」

中浦が再び叫んだ。

それから、今度は水平飛行から三周ほど旋回を続け、かなり難しい背面飛行というものに突入したのである。これはまさしく、機体が裏側…つまり上下逆さまになり、飛行するというものだった。

「あっ！背面だよ、背面！」

背面というのは、逆さになったことにより、左回転から逆回転の右回転へと急激に変化し、おまけにハンドル操作までが逆になるというもので、慣れないと上下を勘違いして、墜落させてしまう恐れのあるものだった。

「ひゃー！凄いわ」

信彦が首を左右に振って、感心していた。

ブワアアーン！

逆さになったままの Mustang は、三周ほど旋回すると再び元の状態へ戻った。牛米はみんなの方を振り向き、ハンドルを右手から左手へと持ち換えて、右手拳を握りガッツポーズを見せた。それに応えるように、みんなも一斉に

ガッツポーズをした。すっかり気分を良くした牛米は、今度超低空飛行を始めた。火山灰の地面スレスレまで降下して行き、接地寸前を飛んでいた。時折高速で車輪がサッ！と接地し、砂塵が舞った。

「おうおうおう！落ちるぞ！」

中浦が叫んだ。しかし、これも五周を回ると無事上昇した。丁度その時燃料が切れて、滑空を始め綺麗に着陸をしたのである。

「ははあー、大したもんだ！」

益男は、腕組みをしたまま感心しっぱなしだった。

「とうちゃん。あれは牛米だから、ああいう風に出来るんだよ。みんなが簡単に出来るもんじゃないんだよ。分かる？」

「おう、そうなんか。なかなか凄いことなんだな…ノブ。お前はどうかんだ」

「それは酷ってもんだよ。俺なんか始めたばかりだぞ」

牛米がワイヤーからムスタングを外して、歩いてきた。

「おっ、牛米くん凄いじゃないか！」

「えっ！ハハハ…こんなのちょろい！ちょろい！」

得意気になって頭を掻いた。

「でもね、おじさん。もっとすげー奴が、大会ではわんさかと来るんだよ」

「えっ！大会？」

驚いた表情をした益男だったが、雑誌『Uコン技術』に載っていたのを少し見ていたので、すぐに思いだしたように右拳を左の手のひらに打ち付けた。

「ああ、あの全国大会とかいうやつかな」

「おじさんも少しは知ってるんだね。ハハハ…」

そこで信彦が少し目を細めて、睨むようにして言った。

「とうちゃん！また人のUコン技術を見たな」

「いいじゃないか〜、親子ならば〜」

と相良直美の歌に乗せて言った。

「ワハハハ…おじさん、面白い人だね」

牛米も笑いながら言った。

「いつもこうなんだ。この親父は…わが家の恥だね」

「ノブ！親にそんな言い方はないだろう。そんな言い方は…」

「あっ、そんなこと言うんだったら連れて来るんじゃないかな…」

「ず・ずるいぞ！ノブ…」

その様子に呆れた牛米が、

「ノブ！どうでもいいけどさ。次、飛ばすか？」

「えっ！…」

「おっ！いよいよノブのそのスピットを飛ばすのか」

と益男がニコニコとした。

「いいのか？」

「おお、沢山飛ばして早く上手くなれよ」

「よっしゃー！」

と張り切って信彦は、ワイヤーの方へと向かった。

「それからなあー！ワイヤー結構ねじれてるかもしれないから、気をつけろよ！」

「おお、分かった」

信彦は牛米の声を聞いて首だけを振り向かせて、ワイヤーの方へと駆けて行った。

そのあと、益男も信彦の跡を追って走って行った。

「ノブ、とうちゃんが飛行機を押さえてやるよ」

「いいよ。いらないよ」

「いいから、いいから」

牛米と中浦が、お互いに首を傾げて言った。

「変な親子！」

「ほんと！」

信彦が断ったにも関わらず、益男はスピットファイヤーの機体をしっかりと押さえていた。さすがの信彦も呆れて、エンジン始動の準備にかかった。少しずつではあるが、エンジン始動のコツも掴んできている信彦であった。

「ようし！と…あっ！とうちゃん？押さえるのはいいけど、翼を強く掴んだらだめだよ。穴が空くから…」

「おお、こ・こうだな…」

「まあ、いいことにしておこう…頼むよ」

と人差し指を差した。

一旦、プラグを外して、ニクロム線の焼け具合を確認した。

「よしよし、オッケーと」

次に十字レンチでシリンダーヘッドにしっかりとプラグを固定した信彦は、バッテリーからのリード線を、プラグのヘッド部分に接続した。益男はその様子を眉の辺りにしわを作りながら、じっくりとのぞき込んだ。さらに牛米や中浦も信彦たちの横に立って、様子を伺っていたのである。信彦は無言のまま、プロペラを数回回転させて見た。そうしてそのままプロペラを弾いたのである。

ブロン！と細かい爆発音を立てた。再び数回プロペラ弾くとブロン！ブロン！と鳴るがエンジンは始動しない。

「うむー！」

信彦は一旦ニードルバルブをていっばいに閉めて、そこから慎重に二つと半ひねり開いた。さらにキャブレターから二〜三滴の燃料を垂らして、プロペラを回転させるのであった。

太陽は段々と高い位置に登りつつあり、上空では鳶が上昇気流をしっかりとつかんでゆっくりと旋回し、時折ピーヒョロという声を上げていた。

ブロン…ブロン…

「おかしいな？かぶってるのかなあ」

そうして、再び十字レンチでプラグを外した。

「いや、焼けてるなあ…よし、もう少しニードルを開けてみよう」

「ノブ、かかるのか？」

そう益男が心配そうに言うと、

「おじさん。大丈夫だって。Uコンのエンジンなんて元もとそんなに簡単かからないんだから、こんなのいつもさ」

と、微笑みながら牛米が言った。

「おう、そうなのか…ハハハ。がんばれノブ」

「はいはい」

ニードルバルブを少し開いて、再びプロペラを弾き始めた。牛米が中浦の方を向き、

「でもよう、スターターがあれば一発なんだけどなあ」

「ああ、確かにな。…でもあれって、高いからな」

「それにさ。本当に上手い奴は、殆ど一発でかけるって飛鳥の親父が言ってたぞ」

「へえー、じゃあ俺たちはまだまだだな」

「ああ、そんな奴にお目にかかりたいよ」

二人が立ち話をしている時だった。

ブロロロン！ブロン！ブロン！

という音とともにエンジンがかかりそうになった。益男の顔が心配そうな表情から、少し微笑み信彦を見た。さらに信彦が、もう一度プロペラを弾いた時だった。

ブロブロボロローン！ブイイーン…

ついにエンジンが始動したのであった。それと同時に信彦は素早くニードルバルブへ手を回して、最高の出力になるまで絞り込んで行った。

ブイイーン…

益男は強烈な風圧と排気口から飛んでくる燃料カスを顔にまともに浴びて、目を細めていた。さらに風圧で、しっかりと七三に分けていた髪も乱れるのだった。

牛米は益男のところへしゃがみ込み、風とエンジン音に負けないくらいの大きな声で叫んだ。

「おじさん！いいかい！ノブが左手を振り降ろすまで、機体を離しちゃだめだよ…それからー！エレベーターの確認をするから、ノブが手首を上に向けたときに、エレベーター…いいわ、やっぱりこれは俺が見るから…とにかくおじさん。俺が良いって言うまで、絶対に離しちゃだめだよ」

益男は風圧で目を細めながらもニコニコしながら言った。

「おお！任せておけい！」

そうして、左手を離してOKサインを作った。

「あっ！ほら！おじさん」

片手を離したため、スピットファイヤーは走り出しそうになった。

「おっ！いかん！…ハハハ」

そういつて、再びしっかりと押さえた。信彦は既にハンドルまで到達し、ハンドルを構えていた。

「上！」

とエレベーターをのぞき込み、牛米が大きな声で叫んだ。

「下！」

「OK！」

それと、同時に左手が大きく、振り降ろされた。

「よし！オジサン離していいよ」

「おおう、そうか…はい」

益男はスピットファイヤーを手放すと、真後ろにでんぐり返しとなったのであった。

「きゃははは…」

「あははは…」

牛米と中浦は大きな声で笑った。信彦も離陸しながら口元が緩んでいて、首を傾けて呆れた表情をした。

「おじさん！だいじょうぶ！」

益男は、「てへへへ…」と笑いながら起き上がり、円周の外に出た。

ブイイーン…

信彦のスピットファイヤーは安定して周回上を飛行出来るようになった。その自信に満ちた顔が、観衆の方を向き笑っているのが確認できた。中浦も信彦へガッツポーズを見せたのである。先ほど飛んでいた鳶は、スピットよりも高い位置で、さらに旋回を続け、その飛行を観察しているようでもあった。やがて信彦の回転に合わせて、回転し始めるがスピットの速度には到底追いつけなかった。

「あいつ結構早いよな、覚えるの…」

牛米は中浦の顔を見て言った。

「ああ、そうだよな。けど、ちょっと無謀だけどな」

「ハハハ…それは言えてる」

中浦と牛米との会話が続いていたが、益男はしっかりと腕組をして機影を追っていた。

その時だった。信彦の駆るスピットが急激に上げ舵を取った。

「あっ！」

「おっ！」

「ほーう！」

観衆の視線は一斉にスピットに集中した。信彦は突然予告も無しにアクロバットを始めようとしていたのである。

その上げ舵は正宙返りの始まりだった。

ブウオオオーン…

丁度観衆の真ん前でスピットが回転を始めたのである。

「低い！」

牛米が緊張したように言った。

牛米が叫んだのは、宙返りの返し位置が早すぎるという意味であった。

「おおお」

しかし牛米の言葉とは裏腹に、信彦のスピットは安定して宙を一回転した。

「すっげー、やるじゃん」

中浦が驚いたように目を丸くさせた。

「た・確かに！…でも、あれって丸井さんの作りが良いから旋回性能がいいんだよ」

「そんなことないさ」

「いや、確かに上手い」

中浦と牛米は疑いながらも、信彦を一応は認めた。

「ノブのやつ結構やるのう…うん」

と益男は一人で納得していた。

信彦は宙返りを終えた後で、再び観衆に向かってガッツポーズを披露した。嬉しさを表現したのか、スピットは機体を大きく上下に揺さぶって、アピールした。

ブオーン…ブオーン…

「あいつ、すっかりと調子に乗ってるぞ」

「ああ、でもあいつの癖かもしれんから…ここからが危ないんだよ。あいつは…」

益男は機体を大きく揺さぶった信彦へ歓声を飛ばした。

「がんばれー！ノブー！」

その声をわざと耳に手をあてるようにして、大きくうなずいた。

次の瞬間だった。スピットは再び急上昇を始めた。

「うっぷ！はっはははは…」

「あ・あいつ、ウングオーバーをしようと…」

まさしくスピットは、頭上を目指して上昇を始めたのである。しかし、そうは甘くなかった。機体はグラリグラリと大きく揺れて、垂直に上昇することが不可能になった。

グイーン…

失速気味になったスピットは、四五度の傾斜角から急下降を始めたのである。

「うわわ…」

「おおお…」

観衆全員が一斉に目を手で押さえた。

しかし、スピットは途中で体勢を立て直した。みんなは目の上に伏せた手の隙間から、その瞬間を捉えて手を外した。

「ふうー！」

「危ない！危ない！」

信彦は苦笑いをして、観衆の方を見た。

グイーン…と再び周回を繰り返し、安定を保った。

「ノーブ！あんま無理すんなー！」

と中浦が叫んだ。その声に信彦は大声で言った。

「何だってー！聞こえないぞー！」

グイイーン…と信彦のスピットは周回を繰り返し、斜角二〇度の位置から再び急上昇を始めたのである。

「だめだって！あれじゃ低い…間に合わないぞ」

と牛米が叫んだ。

スピットファイヤーは、宙返りを始めた。グイイーン…グググーン、ググググイーン…

「ほら！」

上昇を始めると時折エンジン出力が落ちることがあり、信彦のスピットはまさに牛米の言った通りになったのである。

「ああ、だ・だめだ！」

信彦は顔を引きつらせて、独り言を言った。

スピットファイヤーは大きな円を描いて、傾斜角五〇度の位置で反転し降下を始めた。その時、不安定になっていたエンジンが再び回転を上げた。

グイイーン…

「ああ！」

「やっぱ！」

その角度から、さらに加速度がついて大きく描いた円の延長線は地上へ向けられたのである。

ドグワーン！カラッ、カラッ…

「やったー！」

「あっちゃー！」

ついに信彦のスピットファイヤーが墜落してしまった。

「おおっ！」

益男が眼鏡を親指と人差し指で挟んで持ち上げた。

牛米、中浦、太ッチョたちと益男は、墜落現場へ走ったのである。もちろん、信彦も駆け出した。

「あああああー」

集まった観衆からは、声が上がったのである。

「ひゃー、ひどいもんだ。お陀仏か？」

と益男も叫んだ。

一足遅れてたどり着いた信彦を見て、スピットを囲んでいたみんなが道を開けた。

「ありゃー！やっちまった…」

そういうと、信彦は尾翼の辺りを掴んで持ち上げた。

「だって、ノブ！メチャクチャだも…早いよまだあー、アクロバットは…」

牛米がそう言うと中浦が信彦の肩を軽く叩いた。

「凄かったよノブ！なあに、墜落なんて日常茶飯事さ…」

「いいよ、大丈夫！大丈夫！そんなに落ち込んでないよみんな！ハハハ…」

益男はスピットと信彦を交互に見た。

「とうちゃん、これ持ってよ」

「おお、おうこれか？」

と残害の一部を益男に手渡した。

—家内工場—

それから二～三日経った夜だった。信彦が部屋でスピットから外したエンジンを磨いていた。墜落はしても大概の場合はエンジンが壊れるということはないのである。せいぜいニードルバルブがへし折れる程度で済むのである。

「がんばったねえー、エンジンちゃん…ふー！ふー！」

一通り磨いたエンジンを眺めていた。墜落したスピットファイヤーは、殆ど大破し再起不能だったので、記念に翼の一部を壁に飾り、後は捨てたのであった。

「でも、やっぱりスピットだよなー」

と雑誌『Uコン技術』を取ろうとして起きあがろうとした瞬間だった。

「うわっ！」

そこには気配もなく、にっこりとした益男が立っていた。

「へへへー」

「ったくもー！ノックぐらい…あっ！あれー？とうちゃん、それどうしたの？」

後ろから正面に持ってきた手には、しっかりとUコン機が握られていた。

「へへへ、どうしたのって！ゼロ戦じゃないか！」

「ええー、とうちゃん買ってきたの！」

益男は無言で横を向き、顎を上を反らせて細めた横目で信彦を見た。

「信じられないなあー全く」

「へへへ、あげないよー…おれのゼロ戦なんだから」

「いないよー」

床に座っていた信彦は、益男のゼロ戦を見て立ち上がった。

「まさか…」

そう言うと信彦は益男を押し退けて部屋を出た。

「おお、おいおいノブ！」

そうして益男の書斎の部屋の襖を開けた。

「おっ！ノブ！勝手に人の部屋を開けるな！」

「どっちがだい。うわっ！やっぱり…全部揃えたんだ」

その時、萌子が階段を上がってきた。驚いたまま後ずさりした信彦は、丁度階段を上がり終えた萌子に後ろ向きのままぶつかったのである。

「いたっ！…ちょっと、痛いねえー」

「あっ！かあちゃん」

「何だよ？」

「これ！」

そう言って萌子の腕を引っ張ると、益男のUコンの道具の一式を指さした。

「うん？何あれは…」

「Uコンだよ、Uコン」

「Uコン？」

と眉間にしわを寄せる萌子だった。

「飛行機。飛行機の道具だよ。とうちゃん買ったんだって…」

益男は信彦の部屋の戸口にまたがった状態で、困った表情を浮かべた。

「あっ、ノ・ノブの奴！まずい…」

「何、ちょっと、とうちゃん飛行機えっ」

そう言いながら萌子は益男に近づいた。

「いや、あの、そのハハハ…」

「何なのその手持ってるのは」

そう言って手を引っ張った。

「やっ、やめろよ、かあちゃん。おれのゼロ戦…」

「あっ！」

ドテッ！と下に落とした。慌てて益男はかがんだ。

「おれのゼロ戦」

「ちょっと、とうちゃん大丈夫かしら…」

そう言って萌子は、益男の額に手のひらを当てた。

「かあちゃん、おりゃー大丈夫だよー」

「何やってんのー馬鹿じゃないのムハハハ…馬鹿みたいムハハハ…」

そう言って大笑いして、階段を降りて言った。

数日後、月をまたいだため信彦も小遣いを貰い、貯金の残りとを合わせて飛鳥模型店へと向かっていた。大きな出費となったスピットファイヤーの大破でこりた信彦は、決心をしたのだった。

「おう、いらっしゃい！…どうだい、調子は？」

「まあ、そこそこってところかな…へへへ」

「でっ、今日は？」

飛鳥模型店の店主がニコリとしながらそう言うと、言いずらそうに信彦が棚の上を指さした。

「あれー、見せて貰えるかなあー」

「あれ？」

と店主は信彦の人差し指からの延長線上の一点を見た。そこはUコンのキットモデルの棚だった。

「えっ？…キット？」

「そう」

「…ふははは…、落としたの？」

「まあね」

そこへ外から丸井が入ってきた。

「いらっしゃい」

信彦は照れくさそうに頭を掻いていた。店主が棚の方へ近づいた。

「どれ？」

「スピット」

その会話に丸井が立ち止まった。

「えっ、あれ落としちゃったの？」

「へへえー」

そう言うてうなずいた。

「まあ、最初は結構落とすからねえー…いや、上手くなっても結構落とすかな。それで、今度はキットから作ってみるのかい？」

「そうそう」

「ふーん」

その時、信彦は思いだしたように言った。

「そういえばさあー、最近変なおじさんがゼロ戦の完成品買いに来なかった」

店主は右手を唇に当てて、少し考え込みパッと目を見開いた。

「あーあー、来た来た。そうあのおじさん、これから始めるんだって、一式買って行ったよ。結構質問攻めにあったあの…」

「ああー、あのおじさんちょっと変わってて面白かったよハハハ…」

と丸井も思い出して言った。

「やっぱり…ここで買ったのかあー」

信彦は少し下を見るようにして、独り言を言った。

「そのおじさんがどうした…あっ！ひょっとして、お父さん？」

「……」

信彦は無言でうなづいた。

「あっ！これは失礼なこと言っちゃったかな。いやー、ごめん、ごめん」

「いや、いいんだ。本当に変なんだから…」

今度は店主が頭を掻きながら言った。

「そうか、お父さんだったのかあー、お父さんもUコン始めるのかあー、息子に影響されたなハハハ…でっ、一・五で良いのかい？」

「うん！」

立ち止まっていた丸井も、

「まあ、がんばってや」

と奥へ入って行った。

棚からスピットファイヤーの箱を引っ張り出すと、ショーケースの上に置いた。

「しかし、スピット好きだねえー」

「やっぱり、これに限るよ」

「ははは…そうかあー」

濃い目の青い細長い箱を開けると、その中にはバルサ材やピアノ線などが所狭しと入っていた。店主は箱の中から青焼きされている設計図を取り出して、そこに広げた。

「これが、設計図だよ」

「へえー？」

信彦は自分で作るという新たな期待と不安が入り乱れ、少し不安な表情を浮かべた。その様子を察した店主は急に笑いながら言った。

「まっ、大丈夫だよ。みんな作ってんだから…それにほら！友だちがいっぱいやってるだろう。ははは…だから大丈夫！…それにね、この中には作り方も書いてあるし…」

「う～ん」

「とにかく、一機作ってしまえば次からは何機でも作れるようになるさ。そうするとまたUコンの楽しみが増えるってものだよ。何せ自分で作った機体が飛ぶんだからねえー…」

「そうか！まあやってみるよ」

「そのいき！そのいき！ははは…」

その晩にスピットファイヤーを買った信彦は、早速キットの箱を開けていた。部屋の中には、青焼きの設計図にバルサ材が散乱し、すでに小さな飛行機工場が操業され始めた訳である。

「えーと、まずはこれかあ～」

信彦はエンジンを乗せるためのコの字型の木材と胴体の側面にあたるベニヤ板を見比べていた。そこへ益男の声が襖の向こうから聞こえてきた。

「のーぶー！入るよー！」

「どうぞ」

ススーと開けられた戸口には、目を丸くした益男が立っていた。

「ほほほうー、やっとる、やっとる…どらどら…」

「とうちゃん、どうでもいいけど、邪魔はしないでよ」

「またそんなこと言ってー、とうちゃんが何時邪魔をしたって言うんだい。とうちゃんはいつでも協力をしているじゃないかー」

「そうかなあー…あっ！ほらー、あぶない！」

益男の足元には、広げてあった部品の一部のバルサ材があり、もう少しで踏みつけるところだった。

「おっ！とっとっと…」

材料を持った、信彦は益男を睨むように見上げた。

「いま言ったばかりじゃないー…」

「おお、すまん…もう大丈夫だ」

益男は一段落気を取り直して、そこに腰を降ろした。

バキッ！

「あっ？」

「あれ？」

益男の尻の下からは鈍い音がした。

「はあああー…」

信彦は頭を抱えて、大きくため息のように深く長く息を吐き、頭を下に降ろしていった。

「あっ、あれー？あ！…」

益男は尻の下に手をやった。

「あれー？さ・さっきはこんなのなかったぞ！」

益男が手にしていたのはバルサ材の一部だった。

「さっきはなかったって…とうちゃんとおれ以外は誰も居ないんだよ。まったく、いいよー、それ貸して！」

「ほっ！」

そう言って、益男はバルサ材を信彦へ手渡した。バルサ材は途中からボキリを折れていた。信彦は折れたバルサ材と設計図を照らし合わせていた。幸いそのバルサ材は自分で切って使うことになっていたもので、折れてもそんなに差し支えはなかったのである。

「まっ、いいや！なんとかなるだろう。やめてよ！とうちゃん。もうだめだよ」

「分かった！分かった！」

そう言って益男は、両手を付き半分土下座スタイルで謝った。

折れたバルサ材は、自分の側の床に置いた。再び先ほどの材料を取り、合わさった形だけを想像して取り付けてみた。

「うーむ、やってみるか」

そういうと、信彦は道具箱を取るために立ち上がった。益男はその間、静かにして眉間にしわを寄せて、眼鏡を持ち上げて設計図をながめていた。道具箱を机の下から引っ張り出すと、少し小さ目なトンカチを引っ張り出した。

「まずは、これを取り付けるんだなー」

コの字型のエンジンマウントにビニール製の瓶に入った木工ボンドを塗り付けて、側面の板にくっつけた。そうして、付属のビニール袋に入った、小さな釘を側面に指で押さえ込み、釘を打ち付けた。

トントントン…

「よっし！」

「ふーん」

と再び益男は眼鏡を親指と人差し指で挟んで持ち上げたのである。

信彦はコの字型の反対側にもボンドを塗布した。そうしてもう片方の側面を静かに乗せて、位置を確認した。

「よし！」

トントントン…

「オッケー、オッケーっと」

両側面を取り付けた機体を信彦は持ち上げて、ニコリと笑った。益男の視線もそこへ注がれた。

「うーん、なかなか良い眺めだなあー」

「こりゃーだいぶかかりそうだなーノブ！」

嬉しそうに眺めている信彦へ益男が言った。

「ああ、まあねえー」

次に機体を置くと垂直尾翼を胴体側面に挟んで固定していくのだった。この辺は機体づくりの最初の段階となり、これから翼や胴体の上面などの曲面の難しい部分に入っていくのである。しかしこれらの作業も木工ボンドの乾きが遅いため、一日乾燥させては次の作業。さらには、別な部分の作成作業と手間のかかるものであった。

垂直尾翼を固定させた信彦は「ふうーっ！」というため息をついて一段落させた。その視線は、壁に掛けられているスピットファイヤーの翼へと向けられていた。

「まあ、しかし災難だったなあいつも…」

益男はそう言ってスピットファイヤーを指さした。

「いや、災難なんかじゃないよ。あれは単純におれがミスっただけだからね。…ところで、とうちゃんこそ災難に合わないように気をつけた方がいいよ。ゼロ戦をね…」

そこで思いだしたように益男が言った。

「そうそう、そのことでな…」

「あっ、ほら！来た…知らないよ、とうちゃん」

信彦は益男が言いかけた言葉の腰を折った。

「ちょっと待ってよ。…とうちゃんまだ何も言ってないよ」

「そんなこと言わなくても察しはつくよ」

「察し？」

益男は眼鏡をいつものように持ち上げて、信彦を良く見た。

「だから、ゼロ戦と一緒に飛ばしてくれないか…」

益男は「ゼロ戦と一緒に飛ばしてくれないか」というところをハモッて口にした。

「分かっているじゃないか？」

「そう、だから知らないよ。ゼロ戦なんて…」

そう言って冷たくあしらった信彦だった。

「それはないよ、それは…」

益男はかなり困った表情をした。

「ヒヒヒ…ヒヒヒ…」

信彦は得意になって笑って見せたのだが、益男もそのまま笑われたままではいなかったのである。

「ああーそう、分かったよノブ」

「おっ？開き直りかな」

今度は益男が不気味な笑いをみせた。

「フヒヒヒ…ヒヒヒ…いいよ、ノブ。ノブがだめというなら、あっしはりょう君にお願いをいたしやしょう」

信彦は一瞬目を丸く見開き、続けて顔中にしわを寄せて困った表情を見せた。

「えっ！りょうに！…あああー、やめろよとうちゃん！汚たねえ一手を使うなあ全く。あああー」

信彦は右手を額に不連続に当てて、頭を下に傾けていった。

「フヒヒヒ…ヒヒヒ…」

と得意になって笑っている益男であった。が、その時、

ガサッ！

と、音がして益男が、

「うわっ！」

と、飛び上がった。

それは、壁に張り付けてあったスピットの翼が外れて落ちた音であった。

「な・なんだよあいつは、脅かしやがって！」

「ハハハ…」

今度は信彦が大笑いをした。

ー益男のフライトー

かなり積極的にUコンに神経を注いでいる益男に、信彦も断念して益男のゼロ戦を飛ばしに行くという約束をさせられ、それからというもの、その日が来るまで毎日のように益男は信彦の部屋を尋ねた。

そうして、飛ばしに行くという当日がやって来たのである。

「どうだいノブ、この晴天は、ハハハ…まるでとうちゃんのために天が味方したかのようじゃないか。ええー」

上空を見上げて、笑みを飛ばしていた益男に信彦は呆れた表情を見せた。

「どうせすぐに墜落するよ…」

「えっ？今なんか言ったか」

「うん？い・いや一別にハハハ…」

一度、信彦に視線を向けて再び空を見上げた益男は、視線を前方に向けて、胸に拳をドンとぶつけて得意になって、堂々と歩きだした。

「あっ！おじさん…まさか？」

広場に着くと、牛米が益男のゼロ戦を見て驚いた表情で言った。

益男は得意な顔になり、

「フヒヒヒ…牛米君！良く見破ったね…実はこれ、わたしの…」

「やっぱ…」

堂々と歩いてくる益男の姿は、それだけで滑稽であった。

「見るか？おじさんのゼロ戦」

「えっ？はっああ、ええ」

牛米は益男が差しだしたゼロ戦を受け取った。

「あのうー、これ、おじさん飛ばすの」

「もちろん」

「おじさんが？」

「おっ？だめか」

「いや、そんなことはないよハハハ…」

信彦は益男の後ろから、牛米を見て困ったという表情をぶつけた。

「じゃあー、おじさん丁度今開いてるからやってみたら…ノブもついてるし…」

「ええっ？」

信彦は困ったように言った。

「ええってなんだよノブ」

益男が信彦の方を振り返り言った。信彦はしぶしぶ益男のゼロ戦をワイヤーにくくり付けて、エンジン始動の準備を急いだ。

「とうちゃん自分でエンジンかけろよ」

そのきつい言葉に、中浦が言った。

「ノブ…やってやれよ。いいじゃないか」

「うむー、まったく」

「ほほう、りょう君もなかなかいいことじゃないかハハハ…」

信彦はゼロ戦の前にしゃがみ込み、横目で益男を見た。彼らの周りには太ッチョなどの姿もあった。

その時だった。遠くから、飛鳥模型の店主と丸井がゆっくりと歩いて来た。

「よおー！こんにちは…やっとなるね」

「あれ？飛鳥のオヤジだ…」

「丸井さんもいるぞ…」

「ああ、こんにちは」

「こんにちは」

店主は益男の姿に気が付き、軽く会釈をした。

「ああ、どうも」

「いやー、どうもどうも、今日が初フライトでして…」

「ほほう、そうですか？頑張ってください」

「店の方は？」

「なに、今日は店も休みなので、こうして丸井と二人してやってきたわけですよ」

「ほーう、そうですか…」

そういう会話をしている中、下から上を見上げるようにして、信彦が店主たちを見た。

「あっ、やっ取るね」

店主が再び挨拶をすると、信彦も軽く挨拶をしてプロペラを回し始めた。機体はしっかりと中浦が支えていて、益男は立ったまま腕組をして見ていた。

「どうですか、初めて飛ばすという心境は…」

店主がそういうと、益男は結構得意な表情になり丸井と店主の二人の顔を交互に見て言った。

「いや、なに、息子のをじっくりと見ましたからねえー、何とかなるでしょう」　ブロロン、ブロロン…

信彦は、プロペラを弾いていた。

「そうですか？…そうだ、今日はうちの丸井が来ているから、初フライトの指導をしましょうか？」

「えっ？そ・そいつはいい…お願いしますよ何分息子も初心者ですし、その方がハハハ…」

店主は丸井の方を向いて、

「丸井君頼むよ」

「はい、いいですよ」

プロペラを弾いていた信彦は、益男の言葉に再び上を向いて独り言を言った。

「ちえっ！現金な親父だよ、まったく」

ブロン、ブロン、ブロン…

「このUコンっていうのは、私ぐらいな歳の人でもやってる人いますかねえー」

「えっ、もちろんですよ…大勢いますよ。それに大会もあるし、結構華やかですよ」

「へえー、大会ねえ…雑誌では見たことありますが、この辺りでも？」

「そうですね。年に二回はありますよ…大きいのがねえー」

店主と益男が会話をしている中、丸井が信彦の横にしゃがみ込んだ。

「どうだい？…かかりづらいかい？」

「うむー？なんとも言えないな」

丸井はエンジンのかけかたについて指導を始めていた。

店主と益男も相変わらず会話が弾んでいた。周りで聞いていた少年たちも、言葉の節目ごとに、一緒にうなずいていた。

「おじさん！大会に出れば…」

牛米が唐突に言った。

「大会か？いや…そんな大それたものには…」

「そんなことはないですよ。初心者から部門別になっていますから結構楽しめますって…君らも」

牛米は笑いながら言った。

「そろそろ、大会に出ても面白いかもな」

そこで店主が思いだしたように言った。

「そうそう、そういえば次の大会も一ヶ月後だし、それにねえー、今大会を狙って練習をしている…そうそう貴方ぐらいのお歳の方が、休日に練習をしていますよ…」

「私ぐらい？」

「ええー、まああの方はUコン歴も長いですから、ベテランクラスになるでしょうがね…それにしても、君たちの参考にもなるんじゃないかなハハハ…よかったら、やっている場所教えてくださいか？」

牛米も思いだしたように言った。

「俺も聞いたことあるよ。そのおっさん…只見川の堤防だろオヤジ」

「ピンポン！当たり…週末に行くと必ずやってるよ。行ってみよう…」

と、その時ゼロ戦のエンジンがかかった。

「おっ！かかったぞ！」

益男はエンジンの音を聞いて、たじろいた。

「川辺さん！行きますよ…」

丸井が信彦の脇から立ち上がり、益男の腕を引っ張ったのである。

「ええっ？おおう、そうか」

うろたえた益男を後目に見ながらも丸井は、少し白い歯を見せ、ハンドルの方へと駆け出した。益男もその後から足が絡みながらも、丸井のあとをついて行ったのである。ハンドルを持ち上げると、丸井は昇降舵の上下の確認を急いだ。

「いいですか川辺さん…最初は私が離陸をさせますから、離陸して水平飛行に移ったら少しずつ教えて行きます」

「はあー、やはり最初は離陸は無理ですか…」

「そんなことはないとも思いますが、普通のフライトから覚えた方が楽だと思いますよ」

「じゃあーお願いします」

「分かりました」

離陸準備の整ったゼロ戦は、中浦が機体を離すことによって、静かに滑走を始めた。ある程度の滑走速度がつくとゼロ戦は緩やかなカーブを描いて、上空へと上がって行った。

ブロロン…

「へえー、なかなかいいなあ、これ」

益男はさも自分が飛ばしたかのように、ゼロ戦を眺めてうなずいていた。

「やっぱ上手いは、丸井さんは…」

円周の外で見ていた牛米が呟いた。ゼロ戦はピタリと安定して、水平飛行に移った。

「まあ、あれは彼が作った機体だから、よけい特性も分かっているさ」

店主が腕組しながら言った。

「いいですか？川辺さん。…目を回さないようにね。あのう、目が回りそうになったら、いつでも言って下さい。補助しますから…」

「はあー、分かりました」

丸井は見事な手さばきで益男へハンドルを持たせようとしていた。

「川辺さんいいですか。急ハンドルはだめですよ。静かに動かすんですよ。でも、最初は、握るだけです…はい、静かに握って…」

益男は上空のゼロ戦を見たまま、目を丸くしてハンドルすら見ないで握ろうとした。そのためハンドルではなく、丸井の手を握ってしまった。

「うん？…川辺さん。それは私の手です。ハンドルを…」

「おう！すまん…」

握った手を素早く離した益男は顔を赤らめながら、今度ゼロ戦ではなく、ハンドルの部分を見て握り直した。

「おっ、こうかな」

「はい、いいですよ」

ハンドルを握ると、再びゼロ戦を見た。普段はそんなに高速に回転運動をすることのない初心者にとって、Uコンの回転運動というのは、なかなか大変なことだった。その為、丸井は常に川辺の様子を伺っていた。

「いいですか、今ハンドルを少し上に向けます…」

ゼロ戦は傾斜角二〇度の位置から傾斜角四五度の位置まで上昇した。

「ほうー」

「次に、少しハンドルを下げますよ…」

今度はゼロ戦が再び傾斜角二〇度の位置に戻ってきた。

「これだけの操作で上下しますから、静かに操作してあげないと途端に墜落です」

「なるほど、これにノブの奴やられたんだな」

「じゃー私は手を離しますから、ご自分でやってみてください」

「えっ！僕が…」

「そうです…離しますよ」

丸井はハンドルから静かに手を離した。

「うおーい！ちょっと待ってくれよ。おわわ…」

益男は緊張しながらハンドルを持ち、段々と拳に力が入ってきた。少し下げ舵になっていたらしく、高度が下がってきた。

「うわっ！いかん！」

そう言うと、益男は上げ舵を取った。しかし、やはり上げ幅を把握していなくゼロ戦は、急激に上昇した。その反動で今度は、極度な下げ舵を取り、上へ下へと上下動を繰り返した。

「ははは…やっぱりなあー、最初はあるんだよなあーははは…」

信彦が笑った。そうして、自分が初フライトした時のことを思いだした。

「川辺さん、落ち着いて！静かに優しく…」

「うわおー！落ちる」

「しかし、初フライトにしては、おやっさんなかなか筋がいいじゃないか！」

店主が信彦に言った。

「いやほんとだよ。オジサン頑張ってる、頑張ってる。頑張れー！オジサ〜ン！」

ゼロ戦は段々と、上下動を激しくしていった。そこで丸井が後ろからハンドルを固定して、機体を安定させた。それと同時に、ゼロ戦はピタリと安定飛行へと移ったのである。

「さすが、丸井さん！」

中浦が言った。

「いいですか、川辺さん！もう少し静かにハンドルを動かすんですよ…あれ？川辺さん」

「えっ？」

「ああ、目を回したんですね。じゃーしゃがんで下さい」

「は・はい…あー、地球が回る。気分が悪い」

丸井は、しゃがみ込んでいる益男を上手く避けながら燃料が切れるまで飛び続けた。

燃料が切れると、ゼロ戦は結構な下降ラインを取って、うまく着陸した。観衆からは、拍手が湧いた。燃料が切れてからは、ある程度接地面ギリギリまで急角度で浸入しないと失速する恐れがあるのだ。

「やったね。オジサン！みんなが駆け寄った」

益男は苦笑いをして、ヨタヨタと立ち上がった。

「そ・そうか、よかったか…おっやや」

「あぶない」

そう言うと信彦が千鳥足になっている益男を支えた。少し経つと安定を取り戻した。

－只見川の飛行風景－

信彦のスピットファイヤーも、一番難しい機体上面の曲面部分の作成に入っていた。上面はキャノピーと呼ばれる風防の後ろ側から尾翼までの間を、細く切ったバルサ材で一本一本貼っていく作業になる。それは、機体側面のベニヤに挟まれた、胴体型のベニヤ板の湾曲に合わせて、木工ボンドを使って貼り付けていき、浮き上がった部分があれば、虫ピンを使って固定したり、輪ゴムで固定したりするのである。

「うーむ、かなりなめらかになってきたなあー」

「ノブ、とうちゃんのゼロ戦もなかなかいいだろう…」

「うん？ ああ…そうだねえーえーとこいつを刺してみるか」

信彦は、益男が話しかけても上の空だった。細いバルサを貼った後は、隙間があちこちに出来るので、さらに細くしたバルサ材やクズバルサを間に詰めては木工ボンドで固定していくのである。結構手間がかかるのである。この部分の作成には、もう一つの作成方法があり、熱いお湯や蒸気などでバルサを柔らかくして置いて、型となる曲面に貼

り付けて乾燥させ、バルサ一枚で形を形成するというものだった。しかし、この手段は結構な熟練をようするので、信彦はこの方法を取ったのである。

「ノブ、今度の日曜日は只見川に行くのか？」

「うん？そうそうゼロ戦もなかなかいいよねえー」

その言葉を聞いて益男が、眼鏡を持ち上げて首を伸ばして信彦をのぞき込んだ。

「あのね？ノブ、やっぱり人の話しは聞いた方がいいんじゃないかな。ははは…」

信彦はキョトンとした顔をした。

「えっ！なんだっけ？」

「だから、只見川へ行くのかって、聞いたんだけどなあ」

「ああ、只見川ねえー。どうしようかなあー」

信彦は、木工ボンドの蓋を閉めて、逆さにして置いた。ボンドは濃いめのゲル状なので、逆さにして置かないと使いたいときに、すぐに出てこないというのを中浦から聞いていたためである。確かに使っていて半分ぐらいまでになり、そのまま置いておくと、いざ使おうとすると、ボンドが出てくるまでには時間が掛かるのだった。出ないときは、空気がプハッ！と音を立てて出てくるだけで、数度に渡って、ボンドの入れ物を振らなければならないのである。

「やっぱりさ、見といた方がいいと思うよ」

「あれっ？何だかとうちゃん、すっかりとベテランみたいなこと言ってる」

「そうかなあー」

益男は頭を掻いた。

次の日曜日がやってきた。中浦や牛米と待ち合わせをして、その日は只見川へUコンを観察しに行こうということになったのである。そのメンバーの中には、益男の姿もあった。

「今日もやってるかな。そのオジサン」

「飛鳥のオヤジの話したと、大会を控えているから毎週練習してるって」

「とにかく、行ってみようよ」

「おお」

只見川までは、益男の車で行くことになった。益男の横に信彦、後ろには中浦と牛米が乗っていた。

「やっぱり、オジサンを仲間に入れると便利だわ」

「おいおい、オジサンは便利のために、Uコンを始めたんじゃないぞ」

「いっけねえー」

「ははは…」

「どははは…」

四人は、黒のトヨペットに乗って移動している。益男は、機嫌よさそうに鼻歌を歌いながら、プラスチック製の大きめなハンドルを握っていた。ギヤチェンジはハンドルの横に付いていて、加速する度にギヤチェンジを繰り返していった。益男は、フロントガラスから上空を見上げて、太陽光の光に目を細めて、そのあとおもむろにラジオのスイッチを入れた。ラジオからは、南佐織の『一七才』という曲が流れてきた。

「おっ、佐織ちゃんだな」

と独り言を言って、そのあとアクセルをさらに踏み込んだのである。

「今日は井股たち来なかったんだな」

「ああ、何だか面倒臭いってさ。昼から飛ばしに来るって言ってたけどな」

「ふーん」

信彦たちの会話が進む中で、黒のトヨペットは鴨々橋を通り過ぎて行った。

只見川は、結構大きな川で、中江川と合流しているのである。丁度その合流点の二股には大きな三角形の広場があり、そこでは野球などが行われたりもする場所でもあった。周りに緑の草があり、所々にたんぽぽの黄色い花と、もうすでに綿帽子になってしまっているたんぽぽが、互い違いにあった。広場の中央には、白髪混じりで、髭を蓄えた紳士がカーキー色のジャンパーを着てUコン機を飛ばしていた。

ブイイーン…

その外周には、十四～十五才程の娘がその飛行を見守っていたのである。

堤防には、土煙の帯が見え始め、黒のトヨペットが走ってくる姿が見えた。

「うむ？」

紳士はUコンを飛ばしながら、車の姿を気にした。娘も父の姿に後ろを振り向き、トヨペットの姿を見たのである。それは堤防から広場へ降りる傾斜した砂利道を下っていた。

「やってる、やってる！」

「あれかー、飛鳥のオヤジが言っていたのは…」

牛米が言った。

「さあ着いたぞ！」

堤防を降りきって、広場の脇の草原に車を止めた益男は、ハンドブレーキをギギギーと鈍い音を立てて引っ張り、エンジンを止めた。

ガチャリ！ガチャリ！ドン！ドン！

ドアを開けて信彦たちが、車から降りてきた。車のエンジン音とラジオの音が消えた広場では、Uコン機の甲高いエンジン音が、響きわたっていた。それに混じってカンカンと照りつける太陽と、高い位置から聞こえてくる雲雀の声がピロピロピロ…と耳に残った。

「やあー、こんにちわ！」

「こんにちわ」

益男が娘に笑顔で軽く挨拶をすると、娘も笑顔で挨拶を返してきた。信彦たちも棒立ちになって、Uコン機と娘を交互に見た。Uコン機は、安定して飛行を続けていて、ハンドルを操作している紳士が、見に来た信彦たちの方を見て、軽く頭を下げた。

「あの人が有名なオジサンなんだ」

信彦がそう独り言を言うと娘が笑いながら言った。

「えっ、なに？その有名なオジサンって？ハハハ…」

信彦は自分の言った独り言が聞こえた事で、照れ隠しのように言い返した。

「ああ、いや何でもない、何でもない」

「あなたたちも、Ｕコンをするんですか？」

娘はアポロと記した、野球帽を被り帽子の後ろからは束ねた髪が、少し褐色に輝いていた。

「えっ？まあ…」

牛米が照れくさそうに言った。そうして、中浦の方に近づき小声で言った。

「なあー、あの子かわいいじゃないか？」

「ああ、俺も思った」

「同じぐらいかな…」

「うん、たぶん」

そのときＵコンのエンジンが止まり、機体が滑空をして、綺麗に着陸をした。紳士は首を数度傾げて肩をコンコンと叩き、ゆっくりと歩いてきた。益男は自分と同じぐらいの年令の人が、Ｕコンをやっているということに感動し、ニコニコ顔であった。

「ああ、どうもどうも、こんにちわ」

「ああ、こんにちわ。見に来たんですか飛行機を…」

「ええー」

紳士は益男の方へ近づいた。そうして、一旦、娘の方を見た。

「美加！つぎ飛ばせ」

「うん」

そうして、再び益男の方を見た。

「そうですか？…なかなかおもちゃとはいえ、面白いものでよ。どうです？貴方も始めては…」

「ええー、実は私もやってまして、えー」

「ほほう、これは失礼！そうでしたか」

そこで、眉間にしわを寄せて信彦が言った。

「とうちゃん！とうちゃんなんか始めたばかりじゃないか！」

「えっ！」

益男はキョトンとした表情をした。

「うむ？ひょっとして、息子さん？」

「あのう、川辺といいます。これ、とうちゃんハハハ…」

信彦がしゃしゃり出た。

「ハハハ…元気の良い坊ちゃんだ。では、皆さんUコンを？」

「そうでーす！」

と一斉に声を揃えた。

「それは良い。どうです川辺さん。今度皆さんと一緒にここで飛ばしませんか？」

「それは良いですねえー…私もベテランの方が居ると聞いてここに見学に来たんですが」

「うむ、うわっはっはっは…ベテランは良かった。誰がそんなこと言ったんです。そうそう、挨拶が遅れましたな。

私はこういう者です」

紳士は胸ポケットから皮製の名刺入れを取り出して、益男に渡した。その名刺には〔日本エンジン模型機振興会支部長〕と肩書きがあった。

「はあー」

「柳田といいます」

そこで今度は、益男が胸ポケットの辺りを手繰って名刺入れを探したが、この日に限って名刺入れを忘れてきた。

「あっ、忘れてきた。す・済みません名刺を忘れてきたもので…」

「いえ、名刺なんていいですよ。仕事じゃないんだから、ふふふ…」

柳田は輝いた目で、益男を見た。信彦たちは大人の行動を黙って見ているだけだった。

「パパ！準備できたわ」

そこで、娘の美加が太陽光線で逆光になっている父を見上げて、プロペラを握っていたのだった。それに柳田俊雄が笑いながらうなずいた。

「うむ、そうか」

柳田の機体は、パピリオという名前のもので、スタント専用である。エンジンも一・五より一回り大きい一・九というタイプを使っていた。機体の色は、かなりカラフルに赤・青・オレンジと塗れ分けられていて、戦闘機タイプのものとは違っていた。

「次は娘が飛ばしますので…」

「はい、見学させてもらいます」

柳田は美加の方を向き、パピリオを支えた。パピリオはベニヤ材よりもバルサ材の方が多く使われていて、極限まで軽量に仕上げられていた。

「あれー？何ていうんだ」

信彦が牛米に聞いた。

「うむー、スタント機だからなー」

「パピリオよ！」

笑顔で振り向き、元気良く美加が言った。

美加は華奢な手でプロペラを数回回し、プロペラを二回弾いたところでエンジンが始動した。

「すげー！一発だ」

さすがの牛米も目を丸くした。パピリオは軽量ボディーなため、エンジンの振動が機体全体に伝わり、ガサガサと大きな振動音を立てていた。

「美加！いいぞ」

「はい」

柳田は頷き、美加は立ち上がりハンドルへ向かって走りだした。離陸の手順も手慣れたもので、スムーズな滑空が始まったのである。そうして、一・五の機体よりは二回り程大きめの機影が上空へと上がったと思った瞬間だった。まだ一周もしていないのに、そのままウイングオーバーへと持っていったのである。

「ひゃー！すげー！」

牛米が叫んだ。柳田は薄ら笑いを浮かべて、益男の方へ近づいてきた。

「娘は大会でスタント部門に出るもので、こうして練習をしているんです」

「はあー」

そこで信彦が言った。

「でも、オジサンも出るんでしょう？」

柳田は信彦の方を向いて、言った。

「うーん、私は主催者側になるから、一応デモフライトをさせてもらうつもりだけど…」

「へえー、主催者？」

そこで、美加の駆るパピリオはどんどんと連続スタントに入っていった。ウイングオーバーの後は正宙返り、これは絶妙に安定している。さらには、上昇をして逆宙返り。

ブイイーン！

そこで、柳田は美加の方を向き、手で合図をした。美加は、その指示にうなずき、機体をウイングオーバーのように上昇させた。

ブウオオオーン…

「なんだろう？今度は！」

パピリオは、頭上近くにまで上昇すると、これもまた安定した状態で、空に四葉のクローバーを描いた。

「ええー、あればクローバーですよ。ははは…。一応競技規定の中に入っていますからなあー」

益男と少年たちは、まるで魔法にでも掛かったようにして、上空のパピリオにくぎ付けになっていた。

「いや！すごい！」

「ほんと！凄すぎる！…今まで俺たちがやってたのは、なんだろう？」

牛米は機影を見たまま言った。

「なに、練習ですよ。これも決まったスタイルがありますから、練習すれば必ずできますよ。…問題は出来だ！…美加！もっと滑らかに！」

柳田が叫んだ。

そのレベルの違いをまざまざと見せつけられた信彦たちは、もう言葉すら出なかった。その後も連続技が披露されて、飛行が終了した。

「君たちも、大会を目指すといいよ。また、違った面白味を味わうことができるよ」

「はい」

牛米が得意になって大きな声で言った。

「なにも、競技はスタントだけじゃないんだしねえーははは…」

「他にどんなのがありますか？」

益男が眼鏡をつり上げて、柳田を見た。

「そうですね。コンバット戦に、スタントだってクラス分けがあるし、それに風船割りや着艦ゲームなどもありますよ」

「へえー、随分と種類があるんですね」

そこで、牛米が一步前に出て、目を輝かせて言った。

「おれーっ、スタントに出ようかな」

柳田は牛米の目を見て、優しそうな表情で言った。

「そうそう、そのいき！頑張って…競技規定なんかも教えてあげるよ」

「はい！」

その後ろから、信彦が前に出た。

「ぼくは、コンバット戦に出たいなあー」

益男が驚いた顔をして、信彦を見た。

「そう、コンバット戦もクラス分けがあってね。特に上の方のクラスのコンバット専用機を使うのは、なかなか見応えもあるんだよ」

柳田が説明をした。そうして、中浦の顔をのぞき込んだ。

「君は！」

中浦は頭を掻きながら、言った。

「ぼくは、今回見学させてもらおうよ」

「えー、りょう！一緒に出ようよ」

信彦が中浦の肩をゆすった。柳田はその光景を見て言った。

「なに、そんなに慌てなくても、いいんだよ。気が向いたら君も参加すればいいよ。まだ一ヶ月もあるしねえー」

「ええー」

最後に柳田は、益男に向かって言った。

「どうです。川辺さん！あなたも…」

益男は、少し困った表情から、頬を痙攣させながら言った。

「…ええー、参加しますよ。私も」

「えっ、とうちゃん出る気？」

「おじさん、何に出るの」

そこで、少し沈黙して益男が、力を込めて言った。

「コ・コンバットさ」

「えーえー！」

一斉にみんなの声が上がったが、柳田はうなづき、

「そうですか、頑張ってください。…そうだ、それだったら練習を一緒にやりませんか？」

信彦や牛米は互いに顔を見合わせて、頷いた。

「そうそう、そりゃーいいや。やりましょうよ」

「そうだな。それがいい」

と益男も言った。しかし、中浦は完全には納得していないような表情をしていた。

「井股とかにも言わないとなあー」

と一言言うと。牛米が振り向き、

「ああ、もちろんさ」

と大きな声で言った。

そこで、美加が笑いながら、

「じゃあー、今度の休みにでも…一緒にね」

と握手を求めた。

みんなは、それぞれに握手をして、大会への練習を重ねる事にしたのだった。

ースピット再びー

あれからというもの、家内工場においてスピットファイヤーの製作が順調に行われていた。機体上面のパテ付け作業やサフェーサー後の磨きも終えて、いよいよ塗装行程に入るところまで出来ていた。しかし、サフェーサーという目止めのスプレーを使ったときに、萌子からきつく叱られたので、塗装は表にある物置で行うことにしたのだった。なにせ、スプレーは有機溶剤入り（シンナー）なので使った後は部屋中に、ミスト（霧状の塗料の粉）が漂い臭気以外にも、あちこちにその粉が付着していたのである。

「ふうー、出来た。後は塗装だけだ」

信彦はバルサの木の肌とサフェーサーでネズミ色に斑に染まった機体を持ち上げて、ため息をついた。そうして、目を針のように厳しくして曲面を眺めて、少しでもゴミなどが付着していると、息を吹きかけたり、手でほろったりしていた。

サササー…と襖戸が開いた。

「ノブ！…いいぞ、物置」

「うん！今行くよ」

「電灯もぼっちり付けたからな。ナイターでもいいけるぞ。ははは…とうちゃんもなかなかやるよ」

「自分で言うってどうするの」

スピットとラッカー Sprey の入った箱を同時に持って信彦が立ち上がった。その光景に、益男は小走りに階段を降りて行った。階下に降りると、萌子が漫才のテレビ番組を見て、一人で笑っていた。

「ふははは…ふひひひ…」

益男はその横を、スタスタとさらに小走りに駆け抜けて行った。

「かあちゃんも幸せな人だ。あんなんでテレビに飲まれて…」

その言葉に萌子が振り向き言った。

「ちょっと！なんか言った」

「いや！な・なんにもブルブルブル…」

小走りの状態でそう言いながら、唇をだぶつかせて首を細かく左右に振り、玄関へと走った。

「ふへー！地獄耳だ」

そう言って後ろを振り向いた時だった。床に置いてあったバケツに足を取られた。

ガチャン！

「いってー！」

しゃがみ込んだ益男は、足の指先をぶつけたらしく、ふうー、ふうーと息を吹き付けた。

「あっちゃー、地獄耳だけかと思ったら、のろいまで掛けてきた。おー恐」

階段からは、信彦がスピットを持って降りてきた。再びテレビを見て爆笑し、沢庵をかじって、番茶を啜る萌子は信彦が通っても、お構い無しだった。

物置の中では、ひよこ電気をつけたり消したりして、にやけている益男の姿があり、床には新聞紙が敷いてあった。

「どうだ、これ？」

「おう、なかなか良いじゃない。とうちゃん」

「おっ！そうか」

目を丸くする益男だった。信彦はスピットファイヤーを新聞紙の上に置くと、頷いてラッカースプレーの黄土色を取り出して、カラカラ…と激しく振ったのである。これは、スプレー缶の中に入っているビー玉が、缶の中で上下に動き回り、中の溶剤を混ぜる効果があった。

「ようし！裏から塗るぞ」

「ふうーむ」

一度置いたスピットだったが、ジュースの空き缶を置き、その上に裏返しにして置き直された。塗料が塗らさってはいけない部分には、マスキングといって紙やテープを使い、保護をしてあった。

「とうちゃん。小屋から出た方がいいよ」

「いや、なに。少し見てるよ」

「じゃあー、こっち側へ来てよ」

「おおー、そうか」

奥に居た益男は、信彦の言葉で彼の後ろ側へと回った。

カラカラカラ…

缶を振りながらスプレーの出口をスピットファイヤーへ向けて、ボタンを押した。

ジュバッー！

「あっ！」

「ど・どうした」

スプレーからは、塗料が大量に吐き出された。益男はいつもの癖の眼鏡を持ち上げて、良く見た。

「そうだ。そうなんだよ。気をつけなきゃ」

「だから、どうしたんだ？」

「だからね、りょうが言ってたんだけど、最初は必ず新聞紙に試し出しをすれって…。最初は、ドバッと塗料が出るからってさ。ほらー！あれ」

その指さす方向には、塗料が少し流れたようになっていた。

「まあーいいか？初めてだもな」

「そうだ。そうだ。失敗は成功の元である」

カラカラカラ…

今度はさすがに信彦も新聞紙に向けて、試し出しをした。

シュブブブボッ！

一度、固まりのように大量に出た塗料だったが、その後滑らかにシューと音を立てて新聞紙が、黄土色へと変化した。

「よしよし、これでいいぞ」

そうして、黄土色の塗料が、スピットの裏側へと塗り込まれて行った。

「ふーむ、そうか。そうかー」

益男はうなずき、鼻を摘み段々と無意識に後ろへ下がって行った。気がつくと、五歩ほど後ろにさがった所で、スピットの状態を見守っていたのである。

信彦は裏側の塗装を終了すると、スプレーにキャップをして小屋を出た。

「とうちゃん、取りあえず裏が終わったからさあー、乾かすよ。戻ろう！」

「おう」

Uコン機の機体サフェーサーと呼ばれる下地塗装の後、本塗りが始まり、一色毎に乾燥させていかなければならないのである。その度に塗装が掛かってはならない部分にマスキングと呼ばれる保護の紙やテープが施される。

家の中に戻ると、相変わらず漫才のテレビが掛かっていたが、萌子の姿はテレビの前にはなかった。

「はい、いやどうもいつもお世話になっております。はい、ちょっと待ってください…あっ、ちょっと、とうちゃん！ 関田さんから電話」

「おっ、分かった」

萌子は町内会長の関田からの電話を受けていた最中だったのである。信彦はテレビの前に座り駄菓子をつついて、萌子は台所へと消えて行った。

「あーどうも、どうしました」

益男は頭を掻きながら、電話機の向こうにむかってお辞儀をした。

「えっ、そんなにでかいの上げたんですか。やるな一会長も…えーえー、ははは…いや、最近ですか私もいろいろと、えっ、ぜんぜーん。はい！あっ、会長それは良いや、どうです。家に来て一杯、祝いということで、ええーはあー、じゃー待ってます…はあー、では」

ガチャリと受話器の置く音が聞こえて、それと同時に萌子が台所から戻ってきた。萌子の表情は、少し厳しいものへと変わっていた。

「ちょっと、とうちゃん！会長来るって！」

益男は萌子の、厳しい視線を何度かに渡って外らすようにして言った。

「ああーははは…なんだか、黒鯛のでかいの上げたっていうから、一杯やろうってさ。会長の奥さんは、魚ざらいだろー。せっかく上げてても、楽しみがないってもんだもな」

「ふうーん。…でも私が全部用意しなきゃならんのよ。少しは考えて受け答えしてよね。ったくー」

信彦は耳だけが発達して、漫才と二人の会話を同時に聞き、駄菓子を口に放り込んで、漫才のギャグで笑っていた。しかし、時折横目で二人の様子を伺ってもいた。

「まあまあー、そう言わないで、年寄りの話しもたまには聞いてやらないとなあー…」

「だって、会長と呑むと結構長くなるからねえー」

「大丈夫だって、かあちゃん。俺に任せろって…ほらー、この湯呑み茶碗を見て見ろ…」

そう言って、近所の寿司屋から貰った湯呑みを萌子に差しだし、

「〔俺に任せろ心配するな〕 って書いてあるじゃないか。これだよ、これ！」

「ばか！」

萌子はそう言うと、振り返って再び台所へ消えて行った。

少し休憩した後、信彦は再び小屋へと向かったのである。益男は関田が来るというので、居間で待ちかまえていた。丁度信彦が玄関から歩いて小屋に入ろうとしたとき、関田が歩いてきた。

「おう！邪魔するよ、ボン」

「あっ、こんばんわ」

関田は、白髪頭の短い髪でチャキチャキの江戸っ子風の人で、いつも信彦のことを「ボン」と呼んでいた。

「居るかい？」

「あのうー中に居ます」

「おう、そうけえー。ありがとよ」

そう言われた信彦は、軽く頭を下げて小屋へと入って行った。関田の手には大振りの鯛がぶら下がっていた。

益男が座ってテレビを見ていると、ドアチャイムが鳴った。

ピンポン！

「あらー、会長いらっしゃい」

「おう、邪魔するよ」

その声で、益男もソファから立ち上がった。

「いやー、会長上がって、上がって、おおそれですか。でかいなあー」

「なに、まだまだ腕は衰えちゃーいねえーさ…萌ちゃん、台所借りるよ」

関田は黒鯛を持ち上げて、台所へ行こうとした。

「いや、会長かけて、私やるから…」

「いいー、これは俺がさばくよ。ほら、萌ちゃんどいたどいた」

「そうですか。いつも済みませんねえー」

「なに、自分の口にへえーるもんだ。このぐらいやらんとな、かっかっか…」

益男は萌子の顔を見て無言でうなずいた。萌子は、出刃包丁と柳刃を用意した。

まな板の上には、生きのよさそうな鯛が横たわり、関田が腕捲くりをしたのである。

ザッザッザザー

とエラの後ろから包丁が入れられた。

「相変わらず、会長は上手いねえー」

「なに、こんなもの」

益男は後ろから、首を伸ばしてのぞき込むようにしていた。

「はあー？」

関田の包丁さばきも大したもの、見ている前であっという間に刺身にされていくのだった。

「川辺さんよ。なんだか最近随分と忙しいんだな」

「いや、この人道楽始めたから」

「ば・ばか！」

益男は萌子の言葉を濁そうとした。それで鯛をさばきながら関田は言った。

「道楽？なんでえーそりゃー」

益男は困った表情を浮かべた。

「いやー、へへっまあー」

「川辺さんよ！へへっじゃ分からんよ、へへっじゃ」

気が付くと、関田は包丁を握って益男の方を振り向いていた。

「あああのう、会長そ・それ！」

益男が包丁を指さした。

「おお、かっかっか…いけねえー」

「いやねえー、この人息子とおんなじ飛行機で遊んでるんですよ。子どもみたいに…」

「飛行機…？」

益男は関田に手で、まな板側へと手招きした。関田はそれに気が付き、再び鯛をさばき出した。

「ああー、萌ちゃん皿をな！」

「ああそうね。はい」

萌子は茶ダンスから大きめの皿を用意した。関田は思いだしたように言った。

「おうそういえばな、さっき表で、ボンに会ったぞ」

「ああ、あいつ飛行機を作ってて…」

関田は下ろした鯛の骨と頭で形づくりと身の部分を刺身用に細かく切り皿に盛った。

「よし、出来た！」

「ああ、ごくろうさん」

萌子は手を洗っている関田に手ぬぐいを差し出した。

「おう」

そうして、大皿を抱えて食卓テーブルへと運んだ。

「会長どうぞ、どうぞ。美味しいとこついてますよ」

益男が手招きして、とっくりを持ち上げた。

「おう」

関田は猪口を差しだし酒を受けた。そのとき、玄関から信彦が戻ってきた。

信彦はゆっくりと、関田の横を軽い会釈をしながら通り過ぎようとしていたのである。

「ボン！なんだってお前、飛行機を作ってたって！」

信彦はそれを聞いて立ち止まった。

「えっ？はあー」

「それって、なによ飛ぶんか。おれも昔なあー、ヒゴ使って良く作ったよ、かっかっかっ…」

「はあー」

信彦は少し困った表情を浮かべた。関田は、それにも動ぜず手招きをした。

「おう、ボン。喰えや！俺が釣った鯛だ。…こっち来い」

信彦は鯛の造りを見て、うなずいた。関田の後ろを回るようにして益男の反対側へと座った。

「会長頂きます」

「おう、遠慮するな！」

益男が箸をつけ、口に運ぶと目を丸くさせた。

「う・うめー！…会長これはうめーわ」

関田もその言葉に上半身を前かがみにして、身を乗りだして刺身を口に含んだ。

「これはうめー！やっぱりなあー、こいつ引きが違ったからなー、荒海で揉まれてるんよかっかっかっ…、ほら！萌ちゃん、喰え！ボンも！」

そこで益男が信彦の方を向き言った。

「ノブどうだ、表側を塗ったのか？」

「うん、表は迷彩になるから一色目をね」

そこで萌子が刺身を一口含んで言った。

「いや、この人がたの飛行機は、臭くてねえー。だから小屋でやってもらってんですよ」

関田は眉間にしわを寄せた。

「随分やっかいな、やっちゃんそりゃー…そうか、それで最近川辺さんは釣りに行かんのだな」

「い・いえー！そんなことないですって…」

益男が言い訳のようなことを言った。

「そうだよ」

信彦は、けろっとしてそう言った。益男としてはそこまで言われると、次の言葉を完全に失ってしまった。

「かっかっかっか…やっぱりな。最近なんか変だと思ったよ。どっかで何かやらかしてと思った。かっかっかっか…」

「いや、あの、その。ははは…」

益男も一緒になって笑った。しかし、そのあと関田が笑いを止めたとき、一瞬の沈黙が続いた。

「ボン、よっぽど面白えーんだな。その飛行機遊びは」

信彦は笑顔で応えた。

「Uコンていうんだけどね。面白いよ…ちょっと待ってて」

すかさず立ち上がり、階段を掛け上がって行った。

ドタタタ…

「たいしたことないんですよ。会長！この人が幼稚なだけで」

萌子が笑い飛ばした。

ドタタタ…

再び信彦が階段を降りてきた。手には雑誌『Uコン技術』を持っていた。階段を降りた信彦は、関田の隣に立ち雑誌を広げて見せた。

「これだよ、これこれ…」

「うむー？」

関田は広げられた雑誌を見て、眉間にしわを寄せてじっくりと沈黙した。やがて、顔を上げた。

「ひえー、なんだ大きいんだな。何メートル飛ぶんだ。ゴムか？」

笑いながら信彦は首を横に振った。

「ち・違うよ会長！ちゃんとエンジンで飛ぶんだよ」

関田は驚いた表情で目を丸くさせ、再び雑誌をのぞき込んだ。

「エンジン！…じゃーかなり飛ぶな。ひえー凄いもんだなー」

今度は、益男が階段を上がって行った。

ドタタタ…

「なんでえー、親子して！階段はもっと静かに上がり降りしろい！」

そんな言葉の後だった。

ドタタタ…ドテングンガラララ…

「あっ！」

「やったー！」

慌てた益男が階段を踏み外したのである。

「あっちゃー、言ってる先からやりおった」

「痛てー！…ははは…ふーふー」

益男は擦りむいた肘に息を吹きかけながら、ゼロ戦を持ち上げて立ち上がった。

「か・会長これですよ、これ」

「川辺さんよ、これはいいけど。階段はなあー、走るとこじゃないですぞ」

「はあー」

そうして、益男はゼロ戦を関田に手渡した。

「とうちゃん、それ汚いんじゃないのかい」

萌子がそう言って、渋い表情をした。

関田は手に取ったゼロ戦をじっくりと見た。

「ほうー、ゼロ戦か？うむー、良くてとる。これが、ボンの言ってたエンジンか。おっ？おっ？ちゃんと昇降舵が動くな…でも方向舵は動かないんだな…」

「へへー、会長それは知らないんだよ」

「いらんとか？」

「だからね、これ！…ここにも載っているけど、ワイヤで操縦するんだけど。円心力で回転するから、左右には行かないんだよ」

信彦はニコニコ顔だった。

「ふーうむ、そうか、ゴムよりは凄そうだな」

「会長、ぜんぜん！ゴムと比較されちゃー困りますよ。ゴムとじゃーねえーははは…」

調子に乗った益男が言った。

「とうちゃん！」

それを押さえるかのように、萌子が言ったが遅かった。

「川辺さんよ。それだもなあー、釣りを忘れるはずだ」

「あっ、いや！ぜんぜんそんなんじゃないですよ。ははは…」

萌子は益男を睨んだ。つづいて信彦も横目で益男を睨んだ。

「おっ、おっ、おおーい、そりゃーないよ。みんな！」

「かっかっかっか…」

「ははは…」

「どうわははは…」

関田の笑いをきっかけとして、全員が一斉に笑いだした。

「いやあー、これは滑稽だ。かっかっか…川辺さん、俺にもその飛ばしている所を見せてくれ。なっ、ボン！」

「はい！」

元気の良い信彦の声に、益男は一本取られた気分で、弱々しく、

「はあー」

と答えた。

それから、スピットファイヤーの仕上げも順調に進み、土曜の晩となった。翌日は、柳田との合同練習をする約束になっていた。信彦の部屋には見事に迷彩塗装が施されて、ピカピカなスピットファイヤーの姿がある。それは以前、中浦が作ったカーチスの出来を遥かに、上回っていた。スピットは信彦が手で持ち上げて、布で埃を落としていた。

「ふーふー、はーはー、ははは…なかなかいいぞこいつ」

そうして、前回墜落させたスピットの残害の一部の壁に掲げられている翼を見た。そうしてスピットを床に置いた時である。

サササー…

襖戸が開いて益男が入ってきた。

「どうだ信彦。出来は…」

「うん？まあまあだね。これから、エンジンを取り付けるよ」

「やっと、復活したな」

「まあーね」

信彦は綺麗に整備されたエンジンを持ち上げた。益男はにこりと笑うと、腕組をして、その光景を見たのである。

「やっと、とうちゃんのゼロ戦と競える訳だな、ははは…」

益男がそう言うと、吹き出し気味に信彦が答えた。

「とうちゃんと？ぶはは…」

「おい、なんだよその笑いは？」

「だって、おかしいからさ」

「今のうちだけだよ、そうやってとうちゃんのこと馬鹿にしているのは…」

「いやー、馬鹿にはしていないよ。けど、想像したらおかしくてさ」

笑いが止まると、手に持っていたエンジンをスピットのエンジンマウントに置いた。続けて、燃料パイプをエンジンマウントの後方の狭い隙間へ差し込む。この作業は結構大変で、堅いパイプを使うとなかなか刺さらないので、信彦はシリコンパイプを使っていた。これも中浦から教えてもらったことである。

「おおー、大丈夫か。何か手伝おうか」

益男が眼鏡を持ち上げて首を伸ばし、上からのぞき込んだ。

「と・とうちゃん。ちょっと暗いんだけどな」

「おっ、おうそうか、悪い悪い」

エンジンとエンジンマウントを支える四本のボルトを差し込むと裏側から、ナットを掛けた。

「じゃ、とうちゃん。ここを押さえててくれよ」

「おっう、任しとけ」

二人はスピットの最後の仕上げを急いでいた。狭い隙間でのエンジン取り付けを終えると、ほっとため息をついた。

「出来たー！」

「どら！よく見せてくれ」

信彦は益男にスピットを渡した。

「うむー、なるほど、よく出来てる」

益男は頷いた。

翌日、広場には既に柳田と美加が来ていた。堤防から降りた黒いトヨペットからは益男、信彦、牛米、中浦が降り、益男がトランクを開けた。

「やあー、どうも」

「あー、こんにちわ」

「こんちわ」

開けられたトランクの中には、ムスタング、ゼロ戦、そしてスピットファイヤーの三機が所狭しと押し込められていた。それぞれに、機体を持ち上げて外に出したのである。

「今日もすっかりと天気になりましたなあー」

「ええ、まるで今日の日を祝しているかのようですね」

益男は柳田に、名刺を差し出した。

「へえー、川辺さん銀行にお務めで、…そういえば、なんとなくそんな感じがしますねえー」

「そうですかねえー、ははは…」

下に置いた機体の側に、美加が駆け寄って来た。

「わー、凄いわね。たくさん並べると」

美加はしゃがみ込み、機体を順番に見て行った。柳田が信彦たちの方へと近づき言った。

「今日は貴方たちから飛ばしてくださいよ。私も他の人のフライトを見てみたいので…」

「えっ！」

「ええー！」

信彦たちは、互いに顔を見合わせた。

「さあー、どうぞ！…まずは、どなたから行きますか？」

柳田の厳しい目が彼らに向けられた。それで、いよいよ困った表情の信彦たちの中から提案が出た。

「ノブ！やっぱり、初フライトはスピットだよ」

「ええー？」

牛米の言葉に、信彦が目をキョロキョロとさせた。

「そうだよノブ！飛ばせよ」

彼らの様子に、柳田と美加が笑って頷いたのである。

「ほほうー、スピットファイヤーですか？」

信彦は態度を変えて積極的にスピットへと向かったのである。そうして、一段と輝きを増した機体を持ち上げて、

「よし！」

と意気込みを見せた。

「実はあいつのスピット、今日が初フライトなんですよ」

牛米がそう言うと柳田が、さらに目を輝かせたのである。

「それは良い！楽しみだ」

「スピットファイヤーは私も好きよ」

美加がこぼれんばかりの笑顔で、そう言った。

「あいつは、スピットばかりなんですよ」

牛米がそう言うと、つけ加えるように中浦が、

「スピットの鬼だな。あいつは、ははは…」

と笑った。

柳田の厳しい視線と美加の笑顔に見つめられて、心持ち緊張した信彦であったが、ハンドルを握ると目が変わった。

「いくぞ！」

ブイイイーン…

気合いを入れた信彦が左手を振り下ろし、絶好調のエンジン音とともにスピットファイヤーが快晴の空へと上がった。一周、二周と安定した周回を繰り返し、それと同時に全員の首も右から左、左から右へと機影を追っていた。機体は心地よいエンジン音とひまし油の匂いがして、正面に差し掛かると強い太陽光で、キラリと輝いた。

信彦は安定した飛行の後、宙返りを始めた。それは前にも増して腕が上がっているようにも見えた。

「あいつ、最初から宙返りを始めた」

牛米は中浦を見て言った。

ブイイイーン…

続けて、ウイングオーバーに入って行った。

「うおっ、やるやる」

中浦は口を開けてスピットを見ている。

スピットは、傾斜角四〇度の控えめな位置から垂直に上がり始めた。しかしそれは完全に垂直ではなく八二度ぐらいの傾斜角になっていて、機体も少しぶれていた。

「やっぱなー、ウイングオーバーは難しいからな」

「それに度胸もいるし…」

牛米と中浦の会話に、益男が頷いた。

「ふーむ、そうか」

しかし、柳田の目は厳しいままだった。

「うむー、なかなかできるな…もっと、力を抜いて…」

機体はウイングオーバーを緩い角度で終えて、周回に入った。

「美加！行ってやれ」

柳田は突然信彦の方を指さして言った。

「はい！」

そういうと美加は、大きなアクションで機体を上に上げるように合図して、信彦の方へ走って行った。

「はあーはあーはあー」

「ど・どうしたの？」

驚いた表情の信彦ではあったが、笑顔で美加を向かえた。

「ちょっと、見学に来たのよ」

「見学？」

「ええ」

「ふうーん」

スピットは再び低い位置に降りてきた。

「ねえー、もう一度ウイングオーバーに入ってみて…」

「えっ？…そ・そうか？教えに来てくれたの？」

そこで美加が歯を見せた。

「んー、教えるってほどのものじゃないけど、私の知っている範囲で…」

「そうか」

信彦もUコン歴の長い美加には素直に従ったし、前回彼女の飛行を見ているので教わりたい気分にもなっていた。

「じゃ、いいかい。ウイングに入るよ」

「どうぞ…、あっ、もっと脇を閉めて安定させた方がいいわよ」

「ああ、こうかな」

「そうそう」

円周の外で見ている牛米と中浦はうらやましそうに、その光景を見た。

「次は俺飛ばそうっと！へへへ…りょうは競技にでないんだろ」

「あっ、ずるいぞ！」

嫌みに言った牛米に中浦が残念そうに言った。

「なんだったら、機体貸そうか？」

「うーん？やっぱ俺も出るわ」

「へっ、現金な奴」

「へへへ…」

「ぶははは…」

信彦は脇を閉めてウイングオーバーに突入した。機体は、さきほどよりも鋭角に吸い付くように安定して垂直上昇していった。

「あれ？なんか安定してる」

「そうよ、ほんのちょっとしたことなのよ…あらら、だめよ。男でしょ？もっと度胸を出して自分の真上を目指して…上げて！上げて！」

「……………」

信彦は真剣な表情になり、ハンドルをさらに上に上げた。そうすると、さっきより遥かに垂直に上がって頂上付近を通過できた。

「あいつ…」

柳田は独り言を言った。

益男はそれを聞いて、柳田を少し後ろから何度も眼鏡を持ち上げて見た。

「すごいじゃないか。今のウイングオーバー」

牛米が綺麗に決まったウイングオーバーを見て叫んだ。

「みなさんも、出来ますよ…基本ですよ、基本！それをしっかりとやれば、大丈夫です」

牛米たちの方を振り返って柳田が、先ほどとは打って変わって優しい表情になり言った。

「はあー」

益男が情けなく頭を掻いた。

「うまくできたー」

信彦はハンドルを持つ手が少し震えたようだったが、感激して美加を見た。美加もそれには笑顔を返してきた。

が、その笑顔の中には父と同じ厳しい目が見え隠れしているのだった。

「やればできるじゃない。ふふん…次は宙返りよ！基本はね…」

美加が説明を始めた。周りで見ている者は、真剣な眼差しでスピットを見ている。

ブイイイーン…

やがて、宙返りが始まるが、これも今までとは違いコンパスで描いたかのように綺麗な円を作りながら、飛行して行った。

周りからは、いつしか拍手が沸き上がっていたのである。

「川辺さん。基本ができていれば、スタントでも、コンバットでも、着艦でもできますよ。上手くね」

「はあー、勉強になります」

「どうです。次飛ばしてみても、…」

「いえ！いえ！いえ！…私は後で結構ですよ。ねえー」

益男は牛米たちの顔を見た。しかし、牛米は軽い笑みを浮かべて行った。

「オジサン飛ばしてごらんよ。…だって、コンバットに出るんだろ！何事も練習、練習。基本が大事ですよ。基本が！」

「えっ？」

「ぶっわっはっはっ…」

そこで柳田が大きな笑いを見せた。

「こりゃー、一本取られましたなー川辺さん」

「えっ、はあー」

益男は頭を掻いた。

尚も信彦の機体は、正宙返り、逆宙返り、ウイングオーバーとフライトを続けていた。牛米は笑いながら、益男のゼロ戦を持ち上げて彼に渡した。

「さあー、オジサン次だよ」

「そ・そうかー、ははは…そんなに、言うんだったら仕方ないなあー」

やがて、スピットの燃料が切れて綺麗に地上に着陸した。

「凄いよ！」

「うーん、凄い！」

全員は、一斉に信彦の方へ掛け出し、再び拍手が沸き上がった。

「ありがとう」

信彦は美加にそういうと、

「いえいえ、どういたしまして、ふふん」

と笑った。

柳田は信彦の方へ近づき、握手を求めてきた。

「頑張り次第では、優勝だって夢じゃないですよ…」

「はい！頑張ります」

「すげーよ、ノブ…なんだか急に上手くなったような気がする」

牛米はノブの肩を叩いた。

「そんなことないよ。…それに、美加ちゃんのおかげさ」

「いや、飛ばしていたのは君だからね。川辺さんの坊ちゃん」

頷きながら、柳田が重みのある音程で言った。

そこで益男が後ろの方から頭を掻きながら、ゼロ戦を持って前に出てきた。

「あのうー？次、私ですよ」

その声に全員が益男を見た。

「えっ！次とうちゃんやるの？」

「へへへっ…」

驚いたままの表情で、一度一通りの面々を見て信彦が言った。

「あの、うちのとうちゃんは、まだ始めた…いや、ぼくもそうだけど、とうちゃんは墜落らせるかもしれないから…」

益男が何かを言おうと思って、口を開けた時だった。

「いや、次は私が川辺さんに指導いたしましょう」

信彦、牛米、中浦が顔を見合わせて、美加は力瘤を作りその後、笑った。益男は頷き、

「そうですか？」

と言って眼鏡を持ち上げた。

そこで、牛米が大きめの声で言った。

「あっ、オジサン。美加ちゃんじゃないから、がっかりしてる」

「そ・そんなことないよ。そんなこと」

益男の頬が赤くなった。

「おっ、これは失礼！美加にやらせますか？」

「いえー、柳田さんお願いしますよ。光栄です。ははは…牛米くん、大人をからかうもんじゃないよ」

美加は少し下向き加減で笑っていた。

「そうですか。じゃー飛ばしましょう」

「はい！」

そうして、すぐに準備に入って行った。

益男は緊張した気持ちで、ハンドル握っていた。どうも後ろに立っている柳田の厳しい視線が気になったのである。すでにゼロ戦の離陸準備が整い、今まさに離陸を開始するところだった。

ブオオオオ…

「川辺さん。どうぞ！」

「はい！」

益男は素早い手付きで左手を振り下ろし、信彦が二回頷いてゼロ戦を手から離した。滑走を始めたゼロ戦は、離陸を無事に果たしたのである。

「川辺さん。いいですか。基本はいかに機体を安定させるかです。冷静に操縦すれば大丈夫ですよ」

「は・はい！」

ゼロ戦は数周の旋回の後、上へ下への移動を始めたのである。入門者が手始めに行う上下の移動で、これすら入門者にとっては難しいものである。

「オジサン緊張してるんじゃないか？」

牛米は笑いながら言った。

「やっぱりねえー最初は緊張してもらわないと、ははは…」

信彦は牛米と中浦を見て言った。美加は機影を追っていた。

「ねえー、美加ちゃん。大会には何回も出てるの？」

中浦が少し顔を赤らめて質問したのである。

「うん？大会？…そうね、今度出たら三回目ということになるわ」

「へえー、凄いじゃない」

牛米が感心したように言った。

「なんも、なんも…」

と美加は笑いながら手を左右に振って否定したのである。

「で、何か賞でも…」

「うーん、去年スタントのジュニア・クラスで準優勝したけど…」

「すげえー！準優勝！」

信彦が大きな声を上げた。

「でもね、悔しかったわ。だって、優勝した人との技術の差が、あまりにもありすぎてね。…それに全国大会は、さらに凄いて言うしね」

「ふーうん、上には上か…」

腕組をした牛米が独り言を言った。

－懇親の川辺家－

合同練習を終えた信彦たちは、柳田や美加を含めて川辺家へ集まっていた。知り合った、柳田たちといろいろな情報交換をするためのものだった。

「あーどうぞ。柳田さんここへ座ってください」

「あっ、どうも」

突然の多人数の来客で萌子は、大いそがしだった。しかし普段から益男は、仕事から突然の来客ということもよくあり、その点では慣れていた。

「ちょっと！ノブ！…このお皿を並べて頂戴」

「おお分かった」

そこへ美加が立ち上がり、信彦の横に来て言った。

「あのう、手伝いましょうか？…これ並べるのね」

「あっ、いいよ、いいよ。お客さんなんだから…」

美加はそれを聞くととりあえず席に戻った。しかし、テーブルの上にあった割り箸などを配ったりしていた。

「さあーいいですか？じゃーとりあえず、乾杯しましょうよ」

益男の言葉に、それぞれの手にジュースを持った。

「じゃーUコンを通して、これからも親睦が深まりますよう。…乾杯！」

「乾杯！」

「いいぞ！ゼロ戦の鬼！」

「うわっはは…」

「きゃははは…」

パチパチパチ…

乾杯のあと、みんなは笑いながら拍手を送った。

「こんなもたまには、いいですな」

柳田がにこやかに言った。

「そうですね。どうです？定期的にやっては？」

「うん、それは良い」

益男と柳田がお互いにそう言い合うと、周りで見っていた信彦や牛米も頷いた。

その時だった。玄関の方から声が聞こえたのである。

「おう！邪魔するよ」

それは町内会長の関田の声だった。

「あらっ？会長！」

「今日は仰山、客がいるなあー」

萌子は玄関に立って、関田に言った。

「どうぞ、どうぞ。会長上がってくださいな」

「うん、何。こんだぁー生きの良い、平目を上げたもんでな。でかいからこんだけ居るんだったら丁度いいってえーもんだ。かっかっかっ…」

そう言ってかなり大振りの平目を持ち上げて見せた。奥からは益男が駆けて来た。

「会長！いやー凄いな。この平目…どうぞ、上がって上がって」

「今日は何の集まりでえー」

玄関から居間の方へと案内されていった関田であった。

「ええー今日は、ほらーっ！こないだ信彦と言ってたUコンの集まりで…」

「あの飛行機けえー？」

「ええー」

居間に入った関田は、みんなの顔を見てニコッと笑って挨拶をした。

「どうも、どうもにぎやかでいいねえー…萌ちゃん、また台所借りるよ」

「はい！どうぞ」

関田はいつもながらの包丁さばきで、大きな平目をさばいた。

信彦たちはUコンの話で盛り上がっていた。

「…だからさあー、りょうのカーチスは、重いからね…」

「…そうそう、美加ちゃんの手ほどきがいいからさ…」

「きゃははは…」

萌子にはどうして、模型飛行機でこれほどまでに騒ぐのかは分からなかった。 やがて、関田も話しの中に、加わっていた。

「いやー戦時中はな、グラマンの奇襲によくあったもんだ」

柳田も練習中の厳しい表情はなく、にこやかに笑っている。

「どうです。関田さん、見にいらっしゃいよ。ははは…」

「おうー、ボンにも見せてもらう約束はしているんだがな…」

柳田は関田にUコンのことを説明をしていた。

牛米は、するめをくわえて右手を飛行機に見立てて、降下する手振りを見せて言った。

「だからさ、こういった急な角度で入ってさ…」

「うーん難しいんだよね。そこが…」

そこで益男は、大会の話しを始めた。

「やっぱり大会に出るというのは、レベルアップもできるし、楽しみも増えますねえー」

柳田は黙って頷いた。

「大会？…大会まであるのけえー」

関田は驚いた表情をして、益男と柳田の顔を見た。

「ええ一年に数回ありましてね…」

柳田の説明に耳を傾ける関田だった。

「それで川辺さんよ、その大会に出ようって一のけえー」

「はい！そうなんですよ。…ここにいるみんなが」

益男はニコニコ顔で言った。

「川辺さん！そいつはてえーへんだ。町内としてもな、名乗りを上げて応援をせんといかん！」

笑顔になっていた益男が、驚いた表情に急変して言った。

「い・いや！会長、そんなものじゃないんですよ。…そんな町内で応援するような…」

関田は前のめりになって、益男を見た。

「川辺さんよ。とにかく一度見せてくれねえーか。三ちゃんや、助六さんも連れて行くからよ。話しはそれからだ」

「はあー」

勢いのある関田に益男も返事をしてしまった。

休日の合同練習とは別に平日はいつもの背藻井川の堤防で飛ばすことにした。信彦は久しぶりに太ッチョたちに会ったのである。

「しばらく」

「おう」

広場には牛米や中浦も集まってきたが、それと同時に町内会長の関田や三ちゃんと会長が呼んでいる玉川三郎、それに大江助六などの町内の者が集まってきた。

「なんか今日は、随分と観衆が来たんだね。これも大会の関係かい？」

不思議そうな表情をして、太ッチヨが言った。

牛米やら中浦は太ッチヨの周りに集まった。

「いや町内の人なんだけど、見たらしいんだよ。それによく分かんないんだけど、大会の応援をするとかでさあー…」

信彦が右手で関田たちの方を指して言った。

「ふーん」

「ところで、井股たちは出ないのか？」

「俺も出ることにしたよ」

中浦が頭を掻いた。太ッチヨは苦笑いをしていた。

「いいんだけどさ。…なんか面倒くさくてさ」

「ええーっ！ただ面倒臭いだけなのかよ」

「まあーね」

そこへ複雑な表情をした関田たちが近づいてきた。関田が連れてきた玉川と大江は置いてあるUコン機や信彦が手に下げているスピットファイヤーをキョロキョロと見回していた。

「ボン！やるんけえー…はえーとこ見してくれえや」

「あーそうですね」

関田は信彦たちをせき立てた。信彦は太ッチヨの顔を見て、

「なあー井股、模擬戦をやらないかー…俺たちさあー、コンバット競技に出るから、練習をしたいんだよ」

と言って牛米と中浦を見た。

「待てよ！俺はコンバットには出ないよ」

中浦が少し大きめな声で言ったのである。

「えっ！コンバットじゃないの？」

信彦と牛米が驚いた表情をしたのである。

「へへへ…俺はスタントに出るよ」

それを聞いた、牛米と信彦が吹き出した。

「ぷっはっはっはっ…」

「かかか…なるほど！」

牛米は笑いながらもそう言った。

「でもさ、模擬戦やってもいいよ」

話しが飲み込めない太ッチョが、困ったような顔をして言った。それを聞いて牛米がポケットから紙テープを引っ張り出した。

「こいつもあるしね」

「おう！用意がいいねえー」

「よし！やろう！」

「おーけー」

紙テープはコンバット戦の時に尾翼に長く尾を引くように縛りつけられて、空中で互いに切り会うのである。

関田たちの見守る中、太ッチョのメッサシュミットとスピットファイヤーのエンジンが順次かけられた。

「か・会長！す・すごいですね」

「うーん！」

関田は初めて見るUコンのエンジンの音に驚いていた。

両者の準備が完全に整ったところで、牛米が右手を高く上げて、大きく回した。それと同時に太ッチョのメッサと信彦のスピットが半周の位置から一斉に離陸を開始したのである。

ブオオオーン…

ブイイイーン…

「いよいよですね。会長」

「うーん！」

関田の口からは、唸り声しか出なかった。

円周上ではメッサの方が少し鋭角に、先に飛び立ったのである。

「今日こそはテープも付けてるし、完全にやってやる」

太ッチョが言った。手を繋いでいた信彦が、それを聞いて笑った。

「ふふふ…」

緩やかな曲線で上昇したスピットだったが、そのラインは練習した成果が出ていて、安定していた。しかし、エンジンはメッサの方が高回転だったのである。メッサは、斜角四五度の位置まで急激に上り詰めて、一気にスピットのテープを狙うつもりだった。

「ははは…けっこうたやすいな、ノブ」

「そうか？」

ブロローン…

「ああー、切ってやるよ」

円周の外では牛米や中浦がじっと機影を追っていた。外から見ると、もの凄い速さで二機がドーム型の円周を入り乱れて飛んでいるのである。

「うーん、これは凄いな。確かに、ゴム動力とは違う！」

「か・会長。なんすか、そのゴム動力というのは？」

「うん？何でもねえーや、黙って見てやれ！ボンが闘かっとなる…」

「はい！」

後ろを振り向いた関田ではあったが、再び正面を向いて、腕組をした。

メッサは確かにスピットの後ろを取ろうとしていた。前回の戦術と同じである。そうして、メッサが紙テープのギリギリまで後ろに付いた時だった。

「さっ切るぞ！ノブ」

「どうぞ！」

「あっ！」

ブイイイー…

スピットはその位置から垂直に上昇して、ウイングオーバーに入ったのである。「くそー！」

しかし太ッチョもある程度の急回避は予想していたので、遅れながらも信彦のスピットの後を追って、ウイングオーバーへと入っていった。

「おおー！ついてくるのか？」

「あたり前だい！」

ブウウーン…

円周上の頂点まで上がっていたスピットと八〇度ぐらいの斜角に居たメッサは、高度が高いため、少し小さくなって見えた。

「ノブも太ッチョも結構やるわ。これは面白い」

牛米が手のひらを眉に添えて言った。

「ほほーう！これは凄いな！一騎打ちだ。かっかっかっ…」

関田も始めてみるコンバット戦に目を凝らしていた。

頂点近くになるとエンジンの性能が、特に両機の駆け引きを変えた。若干出力の大きかった太ッチョのメッサが完全に、スピットの後ろに喰らいついたのである。

「ほらほら！」

スピットから尾を引いたように流れている紙テープがメッサのプロペラによって、少し切り取られた。

「あっ！」

信彦は焦りを浮かべたが、自分を落ちつかせ、ひたすら上下に機体を振って逃げたのである。

ブイイイー…

ウイングオーバーも下降線をたどったとき、勢いがついたメッサがスピットの紙テープを完全に切る体勢になったのだが、信彦が下降途中に宙返りを挟んだのである。

「おお！」

その旋回によって、今度はメッサが先に行くことになった。

「ははは…ざまみろ！今度はやってやる」

両者のつながれた片手は汗ばんでいたもので、時折離してスポンで拭き取った。

「甘いぞ、ノブ！メッサには追いつけないさ」

スピットより早いメッサを自慢するように、太ッチョが笑った。

「そういうときは、一撃離脱戦法だ」

信彦のハンドルが強く握られた。

「うむ？」

スピットは周回上に一旦戻り、先に飛んでいるメッサを連続ウイングオーバーで、上から急降下を使って一気に攻めたてた。

ブイイーン…

「おお！ヤバイ！」

上からもの凄い加速度の付いたスピットはメッサの比ではなかった。

ズバッ！

一気にメッサの紙テープを引きちぎり、慌てた太ッチョが急ハンドルを上げ舵で取った。

「うわー！だっだめ…」

その急上昇のため、メッサは速度を断たれて失速してしまった。尾翼から地上めがけて落下して行ったのである。

「井股！」

信彦が叫んだ。

落下したメッサはエンジンの力で、再び上昇を始めかけたがその勢いが逆に反動となって、前進方向にバランスを失い、ほぼ直線的に地面へ叩き付けられた。

バゴーン！ガサッガサッ…

「あっ！」

「やった！」

観衆は一斉に叫んだ。腕組をしていた関田は、

「うーん？同盟軍がエゲレスにやられたか？かっかっかっ…」

と笑って、首を傾げた。

燃料が切れて、みんなの所に戻ってきた信彦だが、真っ先に太ッチョの方へと行った。

「井股。すまん」

太ッチョは大破したメッサを持ち上げながら笑った。

「いやーあ、ノブ上手くなったよ。やっぱりスピットの鬼だな。ははは…」

「でも、メッサが…」

「いや、いいのさ。どうせそろそろ変え時と思っていたからな…実はもう作り始めていたんだ」

太ッチョは頭を掻いた。

「えっ！何を作ってるんだ」

牛米が興味深そうに尋ねた。

「へへへー、実はスピットなんだ」

そこで信彦や中浦が顔を見合わせて大笑いした。

「そ・それはいい！ははは…」

「そいつはいいよ」

それを見ていた町内の玉川と大江が顔を見合わせて言ったのである。

「なんで墜落したのに、笑ってんだろう」

「かしーな？」

関田は二人の会話を聞いて、振り向いた。

「あんなー、お前ら。男粹つつーのが分からんのか。男粹」

「男粹ですかねえー？」

二人は首をひねったあとに、数回細かく頷いた。

ーりょうのジャンクー

数日後、信彦は中浦の家に来ていた。とくに中浦とは一番話しが合うので、親しくしていたのである。

「ノブ。今日はさー俺のUコン工場を見せてやるよ」

中浦の家には何度も足を運んでいた信彦ではあったが、彼の言う工場とやらを見学するのは初めてのことだった。

「工場だって？」

「へへっ…まあー工場といっても、ほとんどジャンク屋の状態だけだな…こっちだよ」

家の玄関を出るとその右横に物置があり、中浦がその前で立ち止まり、信彦の方を振り向いて笑いを見せた。

ガラガラガラ…と戸を開けた。

物置は結構大きめで、中は二階建てになっていた。二階建てと言っても中二階という感じではあるのだが、

「やけに広いなあーこの物置！」

信彦は小屋の中をぐるりと見渡した。

「ここは親父と共有にしてるんだ。うちの親父、日曜大工が趣味でさ、上が俺の工場さ。…来いよ」

左手で手招きをすると、きしむ木製の階段をゆっくりと上がって行った。

「ちょっと待って…電気を点けるから…」

「あー」

先に階段の一番上まで上がり詰めた中浦が、電灯のスイッチを入れると、小屋の中がほのかに明るくなった。丁度、信彦が階段の上まで上がり、再びそこら辺りを見渡すと、壁にはプロペラやら写真、雑誌の切り抜き、作りかけのUコン機などのさまざまなものが、輝いていた。

「うわーあー、りょう！凄くないか、ここ」

「そうか」

「あー凄いのよ。りょうは本当に飛行機が好きなんだな」

「うん！俺さー、将来は本当にパイロットになろうと思ってるんだ」

「こ・これは？」

信彦は見慣れない大きなゴムタイヤを見つけて、コンコンと軽く叩いて中浦を見た。

「それは親父の知り合いの人からもらったんだ。セスナのタイヤらしいんだけど…」

「へえー…なあってりょう？また、次の機体を作っているのか？」

机の上に骨組みだけが仕上がっている機体を見つけた。

「うん？そうそう、これはスタントに使おうと思って、買ったんだよ」

「変わった機体だな」

「うん。イカルスっていうんだ」

胴体の後方が、二つになっている機体だった。中浦は大きめの昇降舵を軽く上下に動かして見せた。

「あっ！…これっスピット」

イカルスが置いてある所の壁には中浦がスピットファイヤーを手にとって笑っている写真が虫ピンで貼ってあった。

「そうさ。誰もが一度はスピットを買うのさ」

「この機体は？」

「今は墜落してもう無いけど…あれ」

そう言って中浦は反対側の壁を指さした。そこには、信彦の部屋にあるそれと同じように機体の一部が壁に貼り付けられていた。

「はははっ…そうか。そうだったのかあー」

そう言って信彦は、両手を腰にあてた。

－猛練習－

大会の日も近づいていた。平日の背藻井川の練習に加えて、休日には決まって只見川へ足を運ぶ信彦たちであった。さすがに、大会が近付くと太ッチョたちも練習場に来ていたのである。また、只見川の練習場はかなりの広さがあるで、飛行する円周を二箇所設けて同時に飛ばしていた。

「次はイカルスを飛ばせよ」

牛米が言った。美加のパピリオが着陸した後にすぐに、中浦のイカルスを飛ばすということになったのである。イカルスは茶と白と赤のカラーリングで、やはり形状が変わっていた。

「川辺くん！なかなか良くなったよ。でも大会では、まだまだ上手い人が大勢くるから、練習には練習をね。なにせ、コンバットはスタントと違って、相手と直接競うことになるから、少しでも気を抜いた方が負けることになるよ。分かってるね」

柳田は信彦のことを「川辺くん」と呼ぶようになっていた。

「ええー、頑張りますよ」

「うん」

柳田が頷いた。上空では益男のゼロ戦が飛行していた。

ブイイーン…

「川辺さーん！頑張って！」

柳田が真剣に飛ばしている益男に大声で激励をして、手を振った。

「あーどうも！」

益男は柳田の声が聞こえたようで、こちらを向いて手を振った後に、頭を掻いた。

ブイイーン…

益男も練習の成果があって、飛行にも余裕が出てきたのである。

次に柳田は、大きく円を描くようにして、益男に合図した。

「はい！」

益男は大げさに頷くと、綺麗な宙返りを見せてくれたのである。

「川辺くん、おとうさんもなかなか腕を上げましたね。ふふふ…」

柳田はゼロ戦の機影を目で追いながら、信彦に言ったのである。

「ええー、なんだかすっきりと…それに、良い先生がついてますから…」

「良い先生？ うーん？ やっぱり本人の実力ですよ。川辺くん」

美加はパピリオからワイヤーを外すと、中浦の手のひらに笑いながらタッチをした。

「頑張ってね」

「うん」

相変わらず。美加の飛行は洗練されていた。

やがてイカルスが飛行を始め、同じスタントに出場する美加はガッツポーズを中浦に見せたのである。

「おー！」

中浦はその姿を見て、同じようにガッツポーズを見せて、垂直に上昇し、そこで八の字飛行を披露した。

「すごい！すごい！すごい！」

そう言って喜ぶように美加は拍手を送り、その場で数回飛び跳ねたのである。辺りで、補助的役をしていた牛米がムスタングに紙テープをくくり付けた。そうして、信彦に近付いたのである。

「ノブ、模擬戦をやろうぜ…ほら！」

そう言うと、紙テープを信彦に投げた。それを受け取った信彦は、無言で頷いたのである。そうして、大会へ向けての本格的な練習が続いていったのである。

信彦も急速に腕を上げて、今では牛米と同格な飛行技術をものにしていた。

益男のゼロ戦が燃料切れで着陸し、その後すぐに牛米と信彦は、模擬戦の準備を始めた。

「美加！補助してくれー」

柳田が叫んだ。イカルスの飛行を見ていた美加は、元気に駆け込んできた。

「うん！」

美加はいつでも元気がよく、機嫌の悪い顔を見せたことがなかったのである。駆けて来た美加は、信彦のスピットを支えたのである。柳田は牛米の Mustang を支えていた。さらに、それらのワイヤーなどの細かい準備に太ッチョらなどが手伝いをしていた。

益男は一人で、ゼロ戦の機体に付着した排気口からの燃料を拭き取っていた。「みんな凄いわね」

「うん？」

「上手くなったわ」

「うん」

プロペラを弾きながら、信彦が美加の言葉に相づちを打った。

その時、半周反対側の位置で牛米のエンジンがかかったのである。

「焦るなあー、早くかけなきゃ」

「だいじょうぶよ。すぐにかかるわ」

信彦は一瞬額の汗を右腕で拭ってから、再びプロペラを弾いた。

ブロロン！ブロブロ…

彼らもエンジン始動のコツを掴み、数回のプロペラ回転でエンジンを始動できるようになっていた。

「よーし、かかった」

そう言いながら、エンジンの出力を最大にしていた。

「後は任せて！」

張りのある声でそう言うと、美加は人差し指でハンドルの方を指さした。指さしたハンドルの方には、既に牛米が信彦の準備の終わるのを待っていた。

「おー、待たせた！」

「早くしろよ。ははは…いまテープを切ってやるから…」

牛米は駆けてくる信彦にそう告げると、左手を伸ばして手をつなぐスタイルを見せたのである。

「上！…下！…」

昇降舵の確認を済ませた信彦は、牛米の手に一度、パチン！と音を立てて叩いてから再び手を握った。

「ノブ！いいか」

「おおー！」

そういうと、両者は柳田に向かって頷いた。とたんに真剣な表情になり、スピットファイヤーとムスタングは滑走して行ったのである。

ブオンブオンブオオン…

互いにほぼ五分五分なレベルの闘いだけあって、美加も太ッチヨも他の者も見入ってしまった。

「ノブ！遠慮しないからな」

「こっちだって！」

二機のUコン機は上昇すると同時に、派手な飛行となった。まずは信彦の得意なウイングオーバーから追撃に入って行き、それを牛米は大きな宙返りで交わしていった。

「やるな」

牛米が叫んだ。

「当たり前だ」

信彦も負けてはいなかった。

「パパなんだか凄いわね」

「うーん、まるで大会を見ているようだ」

円周の外の美加たちも、じっくりと見ている。隣で飛ばしていた中浦もその闘いに目が行ってしまって、スタントどころではなかった。

「おい！早く燃料無くなれよ」

中浦は独り言を言いながら、ほとんどわき見飛行を続けていた。

スピットとムスタングは、ダブルで宙返りを繰り返して、お互いにテープを切るために後ろを狙っているのである。

「へへへ…」

そこで、牛米が一瞬不気味な笑いを浮かべて、宙返りから背面飛行に入った。背面飛行に入ると、互いに逆転するので追突の心配もあった。

ブオオオー…ブイイーン…

「あ・あぶない！」

「うわー！」

円周を一周するのが強烈に早く感じられた。何度も何度も互いにスレスレで交差を繰り返したのである。

「すげー！」

太ッチョが叫んで、目を大きく見開いて高速に交差する様子を見ていたのである。

「くそー！なら、俺も！」

信彦もついに背面飛行に入ってしまった。

ブロローン…

スピットと Mustang は両者ともに背面のままの闘いとなったのである。背面飛行は特に、飛行技術を要した。しかし、背面飛行は牛米の得意中の得意の部類だった。

「へへへ…来たな…」

再び牛米は怪しい笑みを浮かべた途端に高度を極限まで落とした。

「大介も凄いなー、あいつ」

再び、太ッチョが叫び腕を組んだ。その時、中浦のイカルスの燃料が切れて、着陸をしたのだった。

「こうしては、いられない！」

中浦は、着陸すると機体をそのまま放置して、二人の闘いの場に駆けてきたのである。

さらに Mustang とスピットは地上すれすれに高度を落とし、どちらが地面に接触してもおかしくないという状態だった。

「……………」

「……………」

二人は声も出せない緊迫した体勢で、ハンドルを握っていたのである。

「あっ！」

次の瞬間だった。地面から火山灰の土煙が舞い上がったのである。

「ふうー」

牛米はため息をついた。というのも、一瞬ではあるが、プロペラの先端が地面に接触したのである。それでも二機の距離が詰まらないまま背面状態だった二人は、ついに牛米が上昇することに作戦を変えるのだった。

ブオオオーン…

Mustangは、そこからハンドルを一瞬、手いっぱい下に下げた。すると垂直に上昇したのである。

「おっ？」

その隙をついて、信彦がMustangの尾翼めがけて飛び込んだのである。

「だー！」

「うわっ！」

その立ち上がりで、Mustangのテープが半分にちぎられたのである。

「くそー！やられた」

そのまま二機は上昇していった。ムスタングは蛇行を繰り返しながら、さらにテープが切られることを、拒んだ。

切り取られてテープの切れ端は、空中からヒラヒラと地上に向けて落ちてきたのである。

「やるな。ノブ！」

「まだまだ！」

そこでイカルスを放置して、駆けてきている中浦が言った。

「たいしたもんだ。二人とも…」

今度はほとんど傾斜角の高い位置で、連続宙返り合戦となった。信彦が逆宙返りをするのに対して、牛米は8の字飛行でスピットを狙ったのである。

「うむっ！…やられるぞ」

柳田が言った。

上空では、見事に8の字飛行を使って、牛米がスピットの後ろに機首を割りこませた。

「あー！」

「ど・どうだー！かかか…」

今度はスピットのテープが半分切り取られた。本来ならテープを全部切り取られるところであったが、信彦の回避が上手く、半分で済んだのである。

ブロローン…ブロン…プスン！

ここで Mustang の燃料が切れて、かなり高い位置から滑空で、地上を目指したのである。信彦は牛米の手を離し、緩やかに水平飛行へと移った。

「五分だな」

「ふふふ…」

信彦が笑った。Mustang は地上へと無事に、着陸を決めた。牛米はハンドルを地上に置いて、信彦の後ろに立ったのである。そのとたんにスピットの燃料も切れたのである。

今度は太ッチョが模擬戦の相手をして、益男が練習することになった。太ッチョは完成したばかりのスピットファイヤーを持ってきた。実は彼もコンバット戦に参加することに決めたのである。太ッチョのスピットは信彦のとは少し塗装の色が異なり茶色が多かった。

「オジサンお手柔らかにね」

「ははは…それはこっちのセリフだよ」

益男は頭を掻いた。そうして、エンジン始動をする前に、二人は強く握手をするのだった。

やがて、エンジンが互いにかけて、離陸が始まったのである。二機のUコン機はほぼ同時に地上から離れた。

ブロロローン…

益男は真剣な表情で、ゼロ戦とスピットファイヤーを交互に見た。

「川辺さんも、あれから随分と腕を上げて、これからがたのしみですなあー」

柳田がそう言って、信彦の顔をのぞき込んだ。同時に美加ものぞき込んだ。

「はっきりいって、ぼくも驚いてはいるんですけど…」

「はっはっは…そうでしょう。やはり練習ですよ…」

柳田が笑った。

太ッチョのエンジンは、以前メッサシュミットに付けられていた物で、他の人の同じエンヤの一・五よりも高回転が得られた。そのため、益男のゼロ戦にジリジリと近付いて行った。

「オジサン！本当に遠慮しませんよ」

「うん？おおーそ・そうか…かかっていらっしゃい」

益男は笑っている太ッチョを見て、再びゼロ戦を見て急上昇した。

「おおおー、オジサンやるじゃない」

「うーん、まあーなあー…ゼロ戦を見くびるもんじゃないよ」

上昇したゼロ戦は、斜角四五度の位置へと素早く、高度を上げたのである。

「ああっ！だめだ。追い越しちゃった」

太ッチョは高回転のエンジンのためゼロ戦を追い抜いてしまい、もう一周距離を詰めなければならなかった。互いに後ろ向きになった二人は、一旦つないでいる手を離して、持ち変えるようにして、再び手をつないだ。

「へへへー」

益男が、手を持ち変える瞬間に眼鏡を持ち上げて、いやらしく笑った。

「ささぁー、今度はオジサンの番だぞー。オジサンだってな…」

益男はさらに高い位置からの攻撃に出ようとして、ハンドルを上に向けたのである。

ブオオオーン…

ゼロ戦はなかなかの旋回性能で敏速に上昇した。と、その時だった。上昇した筈の機体が一気に下降ラインを取ったのである。慌てた益男が、繋いでいた手を離した。

「おうー！おうー！おうー！…あぁーだめだ！」

「オジサン！」

降下ラインを取ったゼロ戦は、一気に地上に激突したのである。

ドグワーン！

「ああー！」

「どうした？」

太ッチョや、周りの観衆は慌てたのであった。

「きゅ・急に！」

「ワイヤーだな…ワイヤーが切れたんだ」

柳田が低い声で言った。ゼロ戦は見る影もなく、大破してしまったのである。

ブイイーン…

太ッチョのスピットは闘わずして、上空より大破したゼロ戦を見守るだけであった。

「キンクか？」

牛米が言った。『キンク』とはワイヤーが輪状にからみ、その時にできるダマのようなもので、注意しないと力がかかったときに、ワイヤーが切れてしまうというものであった。

「うん、そうだ」

柳田が頷いた。太ッチョは高度を保ち、益男が円周から外へと駆けて行った。

「いやー参りましたよ。あーあーあー、私のゼロ戦が！」

益男はがっかりとして、柳田たちの方に掛けよった。

「切れたんですね。ワイヤー」

「あっ？あー、そうなんですか？だから…」

「キンクですよ。キンク」

「はあー、キンク？ですか」

益男は頭を掻いた。太ッチョは気を効かせてスピットを回転させながら。ゆっくりと、隣の円周へと移動して行った。

「さっ、行きましょう！」

柳田が言うと、みんなが墜落した場所へと駆けつけた。そこには、日の丸の目立つ主翼の破片があり、無残に砕けたゼロ戦が転がっていた。

－萌子の協力－

川辺家では、夕食を取っていた。益男はいつもより元気がなく、テレビからは歌番組が流れている。犬のロンは、みんなの食事にわがままに、おこぼれを貰おうとしきりにおねだりをしていた。

「うるさいよロン！」

信彦がロンを叱ったのである。味噌汁をズズッとすすったところで、益男が思い出したように言って、席を立った。

「ああー、そう言えば今朝朝刊を読まなかったなあー」

「とうちゃん。また食事しながら新聞を読むの？」

と聞こえてきそうだと信彦が思ったが、今日に限って萌子はテレビに集中していた。そう言われれば、母も食事中にテレビを見ているのだと、信彦は再び考えたのである。

「うーん」

唸りながら箸を持ったまま、益男は新聞を広げた。

「いやだねー。また交通事故か？」

信彦はロンに惣菜の一部を与え、待ての指示をしていた。

「うーん？…えっ、あっ！Uコン親子？…かあちゃん！…」

益男は箸を投げるようにしてテーブルの上に置き、新聞の上から顔を出して叫んだ。信彦も突然の大声に体を振動させた。

「とうちゃん、びっくりするじゃない！」

萌子が叫んだ。

「な・なななんと…ノブ！これ見てみろ、これ！」

「うん？」

益男は萌子を見つつ信彦に、新聞を開いた状態で渡して、一部の記事を指さした。

「おおー！あれー？」

「なっ！」

「うん」

新聞のコラム欄には、『Uコン親子』と掲載された記事があり、投稿者名が川辺萌子となっていた。

＜うちの家庭では、親子総出で模型飛行機のUコンを楽しんでいます。何がこれ程までにわが家の親子の情熱をかき立てたのかは分かりませんが、小型なエンジンの唸り声とともに、いつも父と子とで同じ趣味を満喫できるのは素晴らしいこととوراやましく思う次第で…＞

そこには、無関心だったように思われていた母、萌子の心情を現す投稿文が一段と輝いて見えたのである。

「なんだい、あんたがた。うんとかあーとかうるさいわね」

そう言った後に萌子は二人の方を見て笑った。

そうして、その顔に信彦と益男が顔を見合わせて、大笑いをした。

「がっははは…」

「うわっははは…」

「かあちゃん、いつ出したんだよ。これー」

信彦が笑いながら言った。益男はその質問に同時に頷いた。

「いつだって、いいじゃない」

「どうして?…」

益男が言うと、

「とうちゃんも野暮な人だねえー全く。ああー毎日Uコン、Uコンって夢中になれば、私だっていったい何だろうと思うじゃないの?…それに大会に出るんでしょ二人とも?」

三人はにこやかな表情で笑い、萌子はテレビの電源を切った。

「そうかー、かあちゃんが味方なら、心強いや!ねえーとうちゃん!」

「うん？あ・あーははは…もちろんだよ」

「ちょっと、とうちゃん！何だか気乗りしないようだね私じゃ！」

「えっ？いえいえ！そんなことはございません。はい」

「だっははは…」

「がははは…」

とその時だった、玄関からは、

「魔するよ！」

という威勢の良い、関田の声が聞こえた。

－益男のゼロ戦後継機－

益男は会社の帰り道に飛鳥模型店へと足を運んでいた。

「いらっしゃい！」

「こんにちわ」

「あらー、川辺さん。しばらく」

「ええー」

益男はそう言うと辺りを見渡した。

「おや？今日は何をお探して？」

店主は同時に益男の視線を追った。奥の戸口から丸井が顔を出し、軽く挨拶をした。それを見た益男も頭を軽く下げた。

「実はねえー、機体を…」

「あら？川辺さんもついに落としましたか」

「ええーやっちゃいました。へへへ…」

頭を掻く益男だった。

「そうですか。じゃあー…」

そう言うと店主は棚の上から、機体の箱を降ろしたのである。

「…やっぱり、ゼロ戦ですかねえー。飛燕（ひえん）なんてのもありますがねえー。もちろん今度はキットから作るんでしょ？」

棚から降ろしたUコンの箱を並べていった。

「え・えー、やはり息子も作りましたから、私もチャレンジしてみますよ。えーと…」

益男は眼鏡を持ち上げると、ゼロ戦と飛燕の両方の箱を開けた。

「飛燕もなかなか美しいデザインですよ」

青焼きの設計図を広げて、各部所を見ながら益男は数度に渡って、笑いを浮かべて、店主を見た。

「どうですか？」

店主も笑って、益男を見たのである。とその時、店の戸を開ける音がした。

ガラガラガラ…

「こんちわー！」

「おーう、いらっしゃい！」

入って来たのは牛米だった。

「ああー、牛米くんじゃないか」

「オジサン、あっ！そうかあー、作るんだね新しいの？」

「へへっ、まあーね」

そういうと頭を掻いた。牛米は棚から勝手に燃料を取り、ぶらぶらとさせて店主に見せた。

「オヤジ！これなー」

「うん、毎どーう！」

牛米は燃料をガラスケースの上に放置したまま、益男の脇に寄ってきた。

「どれどれ、オジサン何買うの？…ああーそうか、オジサンはゼロ戦が好きなんだもな。でも飛燕もいいよ飛燕も…」

そういつて箱の蓋をひっくり返して見る牛米だった。

「よーうし、じゃあーこれ作ってみるか！」

益男は店主に、飛燕の箱を指さした。店主は頷いて言った。

「ありがとうございます。…川辺さん！塗料とかボンドとかがいるでしょう。あっボンドはまだあったかな？」

気が付いたように、益男は頷き言った。

「そうそう、いや！一通り下さいよ。私は私なりにやってみますから…」

「そうですか。じゃーこっちで適当に揃えてもいいですかねえー」

「ええーお願いしますよ」

「はい」

そういうと、店主は塗料の棚へと歩いて行った。

「じゃーオジサン！頑張ってね」

「おおー」

牛米は再び燃料の缶を手にとると、店から出て行った。

川辺家には関田が来ていて、晩酌をしていた。豆を口に運んだ関田は、

「どうだい川辺さんよ。最近これの方は…」と言った。

益男はキョトンとした表情を浮かべて答えた。

「これって？これですか？」

釣りの仕草をして見せる益男だった。

「ばーかいてんじゃねえーよ川辺さん。これだよ。これ！」

関田はUコンのハンドルを持つ仕草を見せた。

「えっ？はあー、あっ、これですねえー、これ！」

「あたぼうよ」

益男はほっとため息をつく。

「新しいの作ってますよ。今ねえー飛燕を…」

「飛燕ですかい。ありゃーいい。川辺さん…ありゃー確かドイツのメッサシュミットのエンジン使ってたなー」

「いえー、エンヤですよ」

「うん？」

「いやー、なんでもははは…」

「そうけえー、そうけえーうーん、まあ一杯」

「はあー」

益男は照れながら酌を受けた。

「ところであれだねえー、萌ちゃんよー、新聞見たけどよー、あの記事はなかなかよかったねえー、だんだんと萌ちゃんも男粹っつーのが分かるようになってきたんだねえー、なっ！川辺さん」

「えっ！は・はい！」

「あー、かっかっかっ…」

関田は大声を上げて笑った。

「ふふふ…」

萌子も益男も少しかしこまったようにして、小さめに笑った。丁度その時、信彦が階段から降りてきたのである。そうして、冷蔵庫をおもむろに開けた。冷蔵庫からは牛乳を取り出して、コップに注ぐとゴクリゴクリと音を立てて飲んだのである。

「ボン！ どうだい。えー！、随分と理解のあるとうちゃん、かあちゃんであんなに良かったなー…それに町内会長まで付いてりゃーいうことなかるーかっかっかっ…」

信彦は唇に白い牛乳の筋を残して、無言で笑った。

いよいよ大会が近付いてきて、信彦たちの練習も連日行われていた。そんな中、益男の飛燕は、信彦の助けを得て予定よりも早く完成したのである。機体の塗装は銀色がベースとなって、緑色のぼかしの斑点が入っているというデザインになっていた。

練習場は背藻井川と只見川で交互に行われた。この日は柳田の姿はなかったが美加が背藻井川の広場へと来ていたのである。大会が迫ってくると執行委員の仕事もあるので、柳田もまばらにしか来れなくなっていたのである。

「美加ちゃん！次はパピリオの芸を見せてよ」

「…じゃー私飛ばすね」

「うん」

練習では美加も、平日までしっかりと合同で練習をするようになっていたのである。

「おれー、後ろで見せてもらおうよ」

同じスタントに出場する中浦が美加に言った。

「ひゅーひゅー」

それに対して、牛米が少しひやかした。

「やめろよー、そんなんじゃないんだからなー」

中浦はむきになって、少し顔を赤らめた。

「じょ・冗談だよ、冗談」

その時、パピリオのエンジンがかかり、美加はハンドルの方へと駆け出した。

「あっ」

そういうと、慌てて中浦が美加と同じ方へと向かった。

ブイイイイー…

バルサ材に振動した音が大きなパピリオは、太ッチョの手によって離された。そんな中、益男は飛燕を地面に置いて、初フライトの準備をしていたのである。

円周上では相変わらず美加の安定した、スタントが始まった。

「だけど、上手いよね美加ちゃん」

「そう？でも、りょうくんと大した変わらないのよ。少し始めたのが、早かっただけよ」

「いや、ぼくはこんなに上手く飛ばせれるようになる自身はないなー…」

「大丈夫よ！…あっ、ごめん」

「いやーあ大丈夫」

美加は誤って、中浦の足を踏んでしまった。その瞬間少しだけ、パピリオの機体がグワリと不安定な状態になったが、すぐに安定飛行へとつないでいく美加であった。

「オジサン！とうとう、出来たんだね」

「あーあー」

牛米がパピリオの飛行から目を離して、益男の側へと寄ってきた。その後ろからは、笑みを浮かべて太ッチョも寄ってきた。

「これー？オジサン一人で作ったの？」

太ッチョが質問した。

益男は困ったように、頭を掻いたが、

「まっ、ちょっとだけ、こいつにな…」

と信彦を指さした。しかし指を示された信彦は、ぷふっ！と吹き出して頷いた。その様子を見ていた、牛米と太ッチョは納得したように同時に頷いたのである。

「今こいつがね。ババババーンと井股くんのスピットファイヤーを打ち落とすのさ、へへへ…」

「ひえー驚いた。ははは…」

益男の突拍子もない言葉に、太ッチョと牛米が笑ったが、信彦だけは呆れた顔をした。

「あっ！うおう、うおう…す・すごいなーあれ！」

益男は目を丸くさせてパピリオの方を見た。他の者も一斉に振り返り上空を見た。そこにはパピリオが、ほぼ頂上付近でクローバーという芸を披露していた。クローバーとは、宙返りを四つ組み合わせたもので、通過した岐路がクローバーの形になるので、そのように言われる由縁であった。

「美加ちゃんは、今回優勝するよ…きっと」

信彦が数度首を縦に振ってから、そう言った。

「うん…そうかもな」

牛米がつけ加えるように言うと、益男も納得したように首を振っていたが、その口は開いたままだった。

ブオオオーン…ブオーン、ブオーン…

パピリオの音は高度が高い位置だったので、少し小さく聞こえたのである。

「はあーあー…」

中浦はほぼ口を開けた状態で、真上を向いている。やがて、クローバーが終わると真っ直ぐに降下し、その直後に今度は真横で横8の字をした。これも綺麗に決まると、美加はほっとした表情を見せたのである。これは前回の競技規定に従ったものだった。

「ねえー、りょう君。やってみない？パピリオで…」

ブロロローン…

美加は笑顔で、中浦の顔を見た。

「えっ！いやー、いいよ。落としたら困るもの」

「ふふふ…落としたら落とした時よ。そんなこと気にしてたら上達しないわよ」

「……………」

中浦は美加とパピリオを交互に見て考えていた。

「ほらー、やっpegらんないよ」

美加の握っているハンドルを中浦の前に差し出し、左手で中浦の右手を引っ張った。

「あっ？」

中浦の顔がほのかに赤らみながら、引っ張られた手はハンドルを掴んでいたのである。

「さあー頑張っpeg！」

ハンドルを手渡した美加の表情は、変わることもなく笑顔のまま中浦を見ているのだった。

「う・うん！…ようし、やるかー」

円周の外では、益男や牛米が二人の交代劇を見守っていた。真っ先に声を上げたのが牛米である。

「ははー！りょうの奴、照れてるぞ」

「ぷふふ…あれじゃーまともにフライト出来ないと思うよー」

太ッチョもこぼした。

「大会まであと二週間だからなあー」

信彦は自分のスピットファイヤーを左手に持ち機影を追っていた。そうして、自分の機体にも目をやっpeg、拳に力を入れて頷くのだった。

パピリオは次の瞬間には、大きく正宙返りを行い水平飛行へと移ろうとしていた。

「すごい操縦しやすいね、これ」

「だって、スタント用ですもの…」

「うん…あんなに大きい機体なのに、軽くて安定しているんだよ」

感激した中浦は、首を傾げながらも納得したようであった。

「おおー、ウイングオーバーもし易いなあー」

すでにパピリオは垂直に上昇していた。

円周上の外では、取りあえず安定した飛行を行っている中浦を確認すると、益男が信彦の肩を叩いた。

「ノブ！次飛ばしてみるかな。こいつを、へへへっ…」

益男は眼鏡を持ち上げたあとに、飛燕を指さした。

「とうちゃん、大丈夫か？その機体？…途中で空中分解するんじゃないのかー」「ばか言ってんじゃないよ。そうしたら、ノブも同罪だよ」

少し大きめの声で言った益男は、はっとして口を押さえた。なぜならそこには、牛米と太ッチョが頷きながら益男を見ていたからであった。

「ふーうん、ははは…やっぱり」

「へへへーばれたかー」

益男は飛燕を作るときに半分以上を信彦に作らせたというのが、ばれて赤面していた。しかし、そんなことはみんな分かっている事でもあったのだ。

「とうちゃん。今度機体を作るときは、翼にノブとサインを入れさせてもらうよ」

「えっ？」

益男は眼鏡を下げ裸眼で信彦を見た。

「だっははは…」

「うわっははは…」

牛米たちは一瞬の沈黙の後、大笑いをした。

上空からは、燃料が切れたパピリオがゆっくりと着陸への岐路をたどっていた。

益男は信彦に機体を支えられて、エンジンを始動していた。銀色に緑の斑点が、一瞬太陽に覆いかぶさった雲の影を写し、光が揺れた。初フライトの飛燕は取りあえず、模擬戦の形ではなく単独飛行をすることにしていたのである。

「さあーさあー、かかるんだよ。エンジンくん。飛燕を思いっきり引っ張って行ってくれー」

ブロン、ブロン、ブロン…プスン！

キャブレターから二滴燃料を注ぎ、益男は再び強くプロペラを弾いた。

ブロブロブロロロ…

「かかった！へへへ…」

もうエンジン始動にもすっかりと手慣れていた。益男は素早くニードルの調整を済ませて、ハンドルへと向かって
いた。

「ようし、ゼロ戦を偲んで思いっきり飛ばすぞ！」

益男の左手が振り降ろされて、少し西に傾きかけていた太陽の中に、飛燕の機影が重なって行った。

－大会前日－

あれら二週間ほど経ち、いよいよ大会のを明日に控える川辺家の夜だった。信彦は自分の部屋に入り、入念な機体のチェックを行っていた。益男も信彦の部屋に飛燕を持ち込み、同時に機体のチェックを行っていた。

「いよいよだな！ノブ」

「うん、だいじょうぶかい？」

「なっ・何が？」

「とうちゃん緊張して、今日は眠れないんじゃないの？」

「ふん！そ・そんなことないぞ。ノブお前こそ…」

そのときだった。襖戸が開き萌子が入ってきた。

「頑張ってるのね。コーヒーとケーキを持ってきたわよ」

「ええー！」

「おおー！…かつて、このようなことがあったでしょうか？」

益男が眼鏡を持ち上げた。

「あら？いないの。あっ、そうーそれならいいのよ…ロン！行きましょう」

「ワン！」

萌子は足元についてきた犬のロンに、そう呼びかけると振り向こうとした。

「ああ・いやかあちゃん…悪い悪い、俺が悪かった…」

「あら？とうちゃん何か悪いことでもしたの？さっ、ロン！行きましょう」

信彦はその光景を見て一人で笑っていた。

「かあちゃん、この通りでござる」

益男は深々と頭を下げて、土下座をするのだった。

「よろしー！」

そう言うと萌子は振り向き、コーヒーとケーキの乗った盆を、畳の上に置いた。益男は土下座した頭を少し上げて、盆をのぞき込んだ。そこには、萌子の足とロンがケーキに鼻を近づけてクンクンと匂いを嗅いでいる姿が見えて慌てたのである。

「うわーお、ロン！だめだよ。貴重な差し入れなのだから…」

素早く盆を引っ張ると、ロンも驚いたように後ろに引き下がった。萌子は「ふふん」と鼻で笑って、襖戸から去って行くのであった。

「さささ、同士よ。差し入れでござる」

益男はふざけた口調でお盆を信彦の方へと、持っていった。

「ふふ…何言ってんだか？でも、明日雨でも降らなければいいけどねえー」

コーヒーに砂糖を入れながら、信彦は益男の顔を見た。

「うん？馬鹿だね。天気予報は最近当たるんだよ。快晴さあー」

益男は、コーヒーの取っ手を持ってブラックのまますすった。

「うん。まあー明日になれば分かるか？」

「そうそう、そういうこと」

コーヒーを置きケーキを口に運んだ益男の鼻に生クリームが入った。

「うむ？クショッ！」

「汚いよーとうちゃん」

「ぶほ、ぶほ！すまん」

「んとに一、とうちゃんはそういうの苦手なんだからー」

「へへへっ…だけど、旨いぞ。これは…」

そう言ってティッシュで口と鼻を拭った後に、再びケーキを頬ばった。

ーにぎやかな会場ー

いよいよ大会当日の朝がやってきた。天気予報は当たり、快晴だった。川辺家の三人は早くから目が覚めている。

益男と信彦は縁側に立ち、ラジオ体操をしていた。

「いち、にい、さん、しーいitto…ノブ！ど・どうだ。眠れたか？」

信彦は後ろに仰け反りながら、益男を見た。

「うん？もちろんさー、…なんて言いたいけど、あまり眠れなかったかなあー」

「へへへ、とうちゃんもだ。しかし、年は取りたくないねえー、さすがに堪えるよ」

今度は屈伸をしている二人であった。

「若くたって同じさ、とうちゃん。…ちょっと、眠いよ」

「はい！深呼吸ー！…ふうー…そうか。やっぱり堪えるか？」

「うん」

食卓テーブルには、朝食の準備がすっかりと出来ていた。陽光が朝食のテーブルを照らし、きらびやかに輝く頃、家族三人は食卓に付いていた。

大会会場では、まるで縁日のような人影がうごめき、色とりどりのUコン機が置いてあった。グラウンドを三つ合わせた程の広い敷地の正面には、運営事務局のテントがあり、せわしなく受付業務を行っているようであった。

駐車場への入り口には、黒いトヨペットが姿を現した。益男たちの車である。車中には信彦、町内会長の関田、それから萌子の姿も見受けられた。

「すごい人だなあー」

「ボン、随分と大々的だなー」

「うん、話しには聞いていたけど、すごいね」

萌子はただただ感心して、周りを見渡した。トヨペットの後ろには、町内の人の車が二台付いてきていた。それには、町内の玉川や大江たちが便乗していたのである。

車から降りると会場を一通り見渡して、益男が言った。

「いやおい、これじゃーりよう君たちを探すのもたいへんだぞ。ノブ！」

しかし、笑顔で信彦は言った。

「いやいや、あれをご覧よ」

「ノブー！」

そこには、駆けて来る中浦と太ッチヨの姿があった。

「おはよう、オジサン」

「おおーおはよ！」

玉川たちも関田の側に寄ってきた。

「会長。これは良いビール日よりですわ」

「お前ら、それが目的なのか？ばーろー」

「いや失礼ははは…」

信彦は二人の周りを見渡して首を傾げた。

「あれ！大介は？」

「あー、今まだ受付に行ってるよ」

「そうか」

「うん、ノブも早く済ませて来いよ。…ほー、ゼッケンなんかもらっちゃたよ。うーんと、これ！おれは六三番」

太ッチョがゼッケンを上に掲げて見せた。中浦もそれにつられて、ゼッケンを広げた。

「俺は一三番…スタントは人数が少ないのかなあー」

そこで益男が腕を組んで言った。

「何だか、運動会みたいだなあー」

「運動会みたいなもんさー、川辺さんよ。かっかっかっ…」

関田が笑った。

「じゃあー、行こうよ、とうちゃん」

「おっ」

二人は受付に向かって歩きだした。受付は種目別に別れている。信彦たちはジュニアクラスの受付をすることになっていた。運営事務局のテントの上には太マジックで『コンバット』と記されているプラカードがあったので、その列に並んだ。ジュニアジュニアクラス、このクラスは初心者だけではなく、かなりのベテランも参加するので、入賞するのは難しいのである。

「結構Uコンやってる人いるんだね」

信彦が益男の顔を見上げて言った。

「うん、みんなどこで練習しているんだろうなー、これだけの数」

「本当、本当」

列の先頭からは、受付の終わったものが、こちらを振り向いてやってきた。それは牛米であった。彼はだんだんと信彦たちのいる辺りに近付いて来たが、信彦たちには気づかなかった。

「大介！」

「うん？…おおーノブ！…これから受付するのか」

「そうだよ」

「じゃーあっちで待ってるぞ」

牛米はそう言うと、中浦たちが来た方向を指さした。

「それと、美加ちゃんがそのテントの中にいるよ」

信彦は頷きそちらを見た。

「じゃ後でなっ！」

「うん」

信彦はさらにテントの中をじっくりと見回した。

「ああ、あそこにいるよ。とうちゃん」

「うん。柳田さんもいるね」

しかし、美加や柳田は信彦たちに気が付く様子もなく、受付を行っていた。美加もその手伝いをしていたのだった。二人は野球帽に何かUコン関連のワッペンが貼られたものを被っていた。

長い受け付けの列が、どんどんと進み、丁度先頭が信彦たちの所までやってきたのである。

「あらー、おはよう！」

その時、信彦たちに気がついた美加が笑顔で挨拶をしてきた。やっと、気がついてくれた美加に信彦も頭を軽く下げた。

「おはよう。…さっきから、ずっと見てたんだよー」

「やあー」

益男も信彦に続けて、挨拶をした。

「おはようございます。やって来ましたな」

柳田が笑った。美加は信彦に言われたことで、少し目を丸くして答えた。

「あらー？言ってくればいいのにー」

「いやー、ははは…」

「ここに、名前を書くの。はい」

美加は受付用紙を差し出した。信彦は頷きながら鉛筆を取った。

「えーと、…これでよし！っと」

そこで低い声で柳田が、ゼッケンを渡した。

「ささっ、川辺さんどうぞ」

柳田は受け付け用紙と鉛筆を益男に渡すと、知人が益男たちの後ろに居たらしく、頭を下げていた。

「今日は絶好のUコン日よりで良かったですなあー。川辺さん頑張ってくださいよ」

「はあー、頑張りますよ。…もちろん」

「信彦くんも頑張ってるね」

美加は、右手を強く握り拳を作って信彦を励ました。

受け付けをしっかりと済ませた二人は、牛米や中浦たちと合流して、開会式が開かれるまで、辺りを見学することにした。太陽はますますきらめき、赤や青の機体がより輝いて見えた。会場で目を引くのは、やはり『スケール機』と呼ばれるもので、より本物に近づけた極めの細かい機体だった。

「なあなあなあー、あれ見れよ、あれ！」

中浦が指差した方には、スピットファイヤーのスケール機があり、それは見事にまで本機に忠実に再現されていた。

「スピットだ！行こう、行こう！」

信彦は慌てて駆け出した。実はこの機体は、アメリカから特別に招待したもので、そのスピットの横には、西洋人がワイヤーの点検をしているのだった。

「コンニチハ？」

西洋人はニコリと笑って、信彦たちに片言の日本語で挨拶をした。

「こんにちわー」

「あの…？近くで見てもいいですか？」

「ばーか！日本語はきっと通じないよ」

「ドウゾ チカク ミル OKネ！」

そんな彼らの会話を聞いていた西洋人は、手招きをした。

「やったー！ははは…」

「どれどれ」

信彦たちはスピットファイヤーの回りを囲むようにしてしゃがんだ。

「へへえー、すごいや」

「なぁー、これって？ワイヤーが二本じゃないよ」

信彦の言葉に、益男はただただ、眼鏡を持ち上げて見るだけだった。

西洋人は、信彦たちの指差したワイヤーの方向を見て、笑って説明を始めた。「オー！ コレネ！」

一本のワイヤーを引っ張ると、車輪が翼の中に収納された。

「えー？しゃ・車輪が引っ込んだ！」

「なんか凄いな、スケール機は…」

Uコン機の場合、基本的には二本のワイヤーを操るものであるが、エンジンのスロットルを操作する、エンコンなどというものが取り付けられている場合もある。この場合はワイヤーが三本になったり、それ以上になったりすることもある。

「どうもね。オジサン」

「ドイタシマシテ」

西洋人は再び陽気な表情で手を振った。

－開会式－

さらに信彦たちは、会場内を回って見学を続けていた。その先には、コンバット戦の常連グループがいたが、そのメンバーはクラスが違う上級者の人たちであった。機体も完全にコンバット専用機のもので、形状は翼がメインとなっており、ほとんど胴体がないのである。だから、エンジンの直後は主翼で、その翼からは高さの持たない垂直尾翼が二本伸びて、さらにその先に大きなエレベーターと呼ばれる昇降舵が戦いはまだかと、輝いていた。

「あれはさー、シャークだよ」

牛米が得意になって言った。その機体は、他のコンバット機に比べて幾分か飛行機らしい形で、胴体の前方には中浦のカーチスのように、鮫のような口のマークが貼り付けられていた。

「へえー、あの尾翼すごいなー…形さ」

信彦が言った。

「あーでかいよなー」

シャークの昇降舵はまるで鯨の尻尾のように大きく湾曲している。

「なあー、コンバット機は全部手投げか？」

車輪の付いていないコンバット機を見て、信彦が首を傾げた。

「あー、余計なものは付いてないのさ」

「ふうーん」

その時だった。突然ドーンという音とともに花火が鳴り響き、少しひび割れたスピーカーからの声が鳴り響いた。

「皆さんおはようございます。第十二回Uコン競技会地区予選の開会式を行います…」

「始まったぞ！」

牛米たちは、放送を聴きながら関田たちの方へ駆け出した。大勢の選手と観衆は、一斉に移動を始め騒々しい状態となったのである。さらに、その直後、河原の奥からエンジンの音が聞こえた。上空には赤・白・青の煙を吐きながら三機のラジコン飛行機が編隊を組んで、信彦たちの走っている上空で渦を巻きながら、通過していった。

「おうー！すげー、すげーラジコンだ」

ブイイーン…

一度通り過ぎると、今度はゆっくりと上昇し、高い位置で開花するように開いて、降下をして再び編隊飛行に移り、会場の上空を通り過ぎて行った。

「会長！なかなか凄いじゃないですか」

目を丸くして玉川が言った。

「おう！あんなちっこいもんがのうー、かっかっかっ…てえーしたもんだ」

そこへ息を荒くして、信彦たちが駆けてきた。

「いやー、始まったよ」

「ボン！いよいよ出番だなあー」

「…各競技の選手の方は事務局の前にクラス毎に整列してください」

「あっ！美加ちゃん」

そこには、笑顔の美加が益男と話をしていたらしかった。

「さあー、行きましょ…オジサンもよ」

「うん」

「川辺さんしっかりとな！」

関田が益男の肩を叩いた。

「はあー」

選手となっている信彦たちは、事務局の前に整列していった。

集合して競技委員長の挨拶があり、柳田が壇上に立って競技の説明を行った。

「ええー、今日は皆さん遠い所から来ている方もおり、大変ご苦労さまです。今大会も十二回を迎えました。日頃より操縦の腕を磨いていらっしゃる皆さんは全国大会目指して、精いっぱい頑張ってもらいたいと思います。えー、なお会場は大きく分けて、左手がコンバット競技、右手がスタント…」

信彦と牛米は顔、見合わせて互いにニコリと微笑んだ。中浦はスタント競技に参加するので、並ぶ列が美加の方に近かった。上級クラスに立っている美加を中浦は遠くから見つめていた。

最後に係員が壇上に上がり、スケジュールを発表した。それでこの日の最初の予定は、デモフライトでアメリカからの参加である。さきほどのスピットファイヤーの飛行である。この機体は、二週間後に控える全国大会に、参加する予定で先当たってこの大会に機体を披露させるために来ていたのである。

「…では紹介致します。アメリカから来日しましたスコット・カーネルさんです」

壇上には野球帽をかぶったスコットが上がった。そのとたんに拍手が沸き上がった。彼は、帽子を脱ぐと上へ高く手を上げて、みんなに手を振った。

大会の挨拶が終わると、早速スコットのスピットファイヤーのデモフライトが始まろうとしていた。列になって並んでいた選手たちは、それぞれに散らばって、固唾を飲んだ。

「ノブ！お前の大好きな、スピットが見れて良かったな」

中浦が微笑んで言った。

「りょうだって好きだろ」

「まあーな」

信彦も微笑んだ。その時、割れた音のスピーカーから映画の「空軍大戦略」の中で流れてくる戦闘シーンの曲が響いた。

「おおっ空軍大戦略じゃないか。これは…」

信彦は嬉しそうな表情を浮かべた。スコットは最初からハンドルを構えて、助手がスターターを使ってエンジンを始動するのであった。この機体には二・九と呼ばれる大きめなエンジンが使われていて、一・五よりは幾分か低めの音程でエンジン音が会場にこだまするのだった。

「いよいよだよ」

「さぁー、これからスコットが駆るスピットファイヤーの演技が始まります…」 スピーカーからは、係りの人が解説を始めた。

ニードルの調節が終わったようで、いよいよ離陸の合図を待っている。スピットとは手から離されたが、エンジンコントロールが装着されているようで、まだ滑走はしなかった。助手がある程度後退したときだった。スピットファイヤーのエンジンが一気に高回転となり、滑走を始めたのである。

「うおお、何か迫力ある」

「おー、俺らのとは違う」

滑走速度が上がり、地表の起伏に合わせて数度バウンドした後、ゆっくりと車輪が地面から離れた。次の瞬間、車輪が翼の中に収容されていったのである。

「あれー、格好いいな…」

「うん？」

「車輪よ、車輪」

「うん」

ブロロロ…

良く晴れ渡ったコバルトブルーの空に下面のクリーム色とイギリスの略章が映えた。

「いいぞ！いいぞ！」

上昇した機体は数度旋回を繰り返した後に、さらに上昇をした。その後大きく円を描くように、宙返りをしたが、スケール機の場合はセミスケールやスタント機よりも旋回性能は良くないので、極度な飛行は行わなかった。

信彦は腰に手を当てて張り切ったように機影を追っていた。

「とにかく、これって本物みたいだよ。いやあー、よかった。こんなの見れて」

「ほうー、ここまで来るとおもちゃとはいえねえーな」

関田も目を白黒させて見ている。

それから、数度旋回した後にスピットファイヤーはエンジンの回転を落とした。翼からはフラップと呼ばれる補助翼が出てきて低速にも関わらず、安定して着陸に向けた。

ボロロロ…

スコットも相当にUコンのキャリアがあるらしく、着地もなめらかに行われた。もっとも、エンジンコントロールが付いているので、信彦たちの燃料切れからの滑空とは随分と違うのではあるが。

地上を滑走してピタリと停止すると同時に、会場からは一斉に大きな拍手が湧いたのである。

「どうもありがとうございました。アメリカからやってきたスコットさんでした」

－予選のOS野郎－

会場ではその他二機種のデモフライトが行われた。そうして、いよいよトーナメント方式による。予選が始まったのである。これはコンバット競技の規定ではあるが、スタント部門は各選手が飛ばして、ポイント制となっていた。中浦と美加はスタント会場に行っていた。

信彦たちは益男共々コンバット会場で、トーナメント表が発表されるのを待っていた。

「相手どんな奴かなあー」

信彦は不安気に言った。

「まあーとうちゃんにはどんな相手であろうが。飛燕がついているからなフハハハ…」

その言葉の後、トーナメント表が発表された。周りに居た選手たちからは、一斉にワーという歓声が上がったのである。そこで、牛米が叫んだ。

「お・オジサン一番手だ！」

「えっ」

益男が一瞬自身のない表情と疑いの目で発表されたトーナメント表を覗いたのである。

「本当だ、とうちゃんハハハ…」

「あーあ、参ったなあー」

益男は両手で頭を抱えた。

「オジサン大丈夫。ガンバガンバ」

中浦が励ました。

それから、予選第一回戦が始まったのは、十分程経ってからだった。相手は、グラマンという機種でネイビーブルーの機体色をしていた。パイロットは最初からハンドルを握らされて、エンジン始動には係員が、モーター式のスターターを使ってかけた。

「がんばーれ！」

「オジサン、がんばーれ！」

信彦たちは、声援を送った。そこへ町内の人たちが町内会の大きな旗をひるがえして、関田を先頭に頭には鉢巻きを付けて大きな声援を送った。

「がんばれー！か・わ・べ・さ〜ん！エイエイオー！」

周りに居た選手や観衆たちは、一斉にその集団を見たのであるが、信彦たちはその位置から少し外れた。

「ちょっと、恥ずかしいな」

信彦たちは、口々にそんなことを言った。

「ああー、ちょっとね」

「あんたたちも、ほら一応援するのよ」

その時、萌子が叫んだ。

「はあー」

益男は少し照れ隠しに頭を掻いていた。そうして、相手の少年に申し訳なさそうに軽く頭を下げた。その相手の少年もそれに合わせて、ニコリと笑い軽く頭を下げるのだった。スタント会場では、コンバットよりも先にエンジンの音が鳴り、上空へは先頭の選手の機体が上がって行った。

「それでは、予選第一組を始めます。飛燕を駆るのは、川辺さん…えーこの方は親子での参加ということで、どんなフライトを見せてくれるか楽しみです。対するグラマンを駆るのは、森竹くんです。それでは、初めて下さい…」

スピーカーから簡単な紹介があり、益男は少し緊張した表情になった。

「よろしくお願いします」

森竹と呼ばれた相手が言った。

「あー、こちらこそよろしく！」

そうして、二人は握手をした。

スタント競技の出番まで、まだ時間があるのか、中浦と美加が応援に駆けつけた。

「オジサン飛ばすのね」

「うん」

美加の言葉に信彦は返事をした。その時だった。両者のスターターが回り、エンジンが始動したのである。

ブロロロ…

ブオオオーン…

それに合わせて、町内の旗も左右に振られた。

「がんばれー！」

すでに益男には、そんな声も聞こえない状態になっていた。係員の合図で、両者の機体は、放たれて滑走を始める。すでに、取り付けられている尾翼のストリーマーと呼ばれるテープが風圧で直線状になり、起伏に合わせてバウンドを繰り返した。ほぼ両者同時に地面を離れていったのである。

「さあー、両者決戦の火蓋が切られました。どちらが最初に後ろを取るのでしょうか…」

スピーカーからは解説の声が流れてきた。

ブオオオーン…

練習でも模擬戦を繰り返してきたが、いざ本番となると真剣度もかなり違うようで、離陸した状態からすぐに、両者は複雑なコースを取り始めたのである。

周りで見えていた観衆も初戦だけあって、さすがに開いた口からは一言も言葉が発せられなかった。

まず両者の機体はダブルでウイングオーバーのように垂直に昇り詰めた。どちらが、後ろを取ってもおかしくない状態だった。回避をすればそのラインに合わせて、ストリーマーも尾を引いた。

「なかなか、いいじゃない。オジサン」

そこで、やっと美加が口を開いた。

「うむー！川辺さんもてえーしたもんだ。ほら！三ちゃん、助さん応援、応援！」

「はいはい、がんばれー！」

「川辺さんがんばれー！」

益男は歯を食いしばっていた。

「オジサン、なかなかやるじゃない」

森竹が言った。

「うむ？甘く見ちゃいかんよ。おっ…とと、オ・ジサンだってねえー…うおりゃー」

「ぼくだって、負けないよ！」

ブイイーン…

今度は益男が大きな宙返りで回避しようと思った。その切り返しに、森竹のグラマンはすぐに反応しストリーマーを追って、宙返りに入って行った。

「あっ！まずいよ、まずい。オジサンやられるよ」

牛米が叫んだ。

追いかける形になったグラマンは、飛燕の後ろを捕らえたのである。

「おー、ついに川辺さんの後ろにグラマンが入りました。飛燕危うし、ストリーマーが切られるのか、逃げきるのか…」

少し興奮したような口調で、解説が入った。

そこで町内の人たちが一斉に声を出した。

「がんばれー！やっつけろー！」

「とうちゃん、がんばれー！」

いつの間にか、萌子までが鉢巻きを付けているのだった。

「いや、オジサンちゃんと考えてるのよ…」

美加が独り言を言った次の瞬間だった。

「おっ！」

「失速だ！」

益男の駆る飛燕は、水平飛行から一気に舵を上を取ったため、失速した。

「いただきだ！」

グラマンの森竹が叫び、飛燕のストリーマーを狙うのである。

「フッフ…」

しかし益男は、そこで不気味な笑いを浮かべた。

「うわっ！」

森竹が叫んだ。失速した飛燕は、一瞬そのまま下に落ちるように降下し一時的に停止した状態となり、それから機首を下に向けてエンジンの回転に乗って加速した。

ブロロロ…

「なんだー？」

森竹はグラマンと飛燕の両方の機体を交互に見た。飛燕を通り越したグラマンに失速から立ち直った飛燕が猛烈に追ったのである。

「おおー、木の葉返した」

事務局のテントで見っていた柳田が言った。

今や飛燕は完全に、グラマンのストリーマーを十分に狙える位置を取っていた。

「すげーや、オジサン！」

牛米が目を丸くさせて驚くが、美加が解説をした。

「いつのまに、あんな高度な技を身につけたのかしら…あれは、木の葉返しと言って、ゼロ戦が太平洋戦争の時に使った手なのよ…」

そこで信彦が、左手のひらに右手の拳を叩きつけて頷いた。

「そうか！とうちゃん、あれは即席なんだよ。どおりで昨日ゼロ戦の本を見て、一人で笑っていたものなぁー」

中浦もそれを聞いて笑った。

「でもオジサンらしいよ。それに一か八かでもよくやるよ。まったく」

「うん」

グラマンを駆っている森竹も、この変わった技を使うオヤジには、たまったものではない。それに、こんなオヤジには負けられないという面子があるから、強烈な回避を始めた。しかし益男の飛燕のプロペラはほんの少しだけ、グラマンのストリーマーを切っていた。

「これは意外な展開になりました。木の葉返しというハイレベルなテクニックを使うとは素晴らしい、さあ—どうなるかグラマン危うし…」

興奮を押さええない解説員からの声が流れた。また、木の葉返しの後には、観衆から一斉に拍手がわき上がった。

「川辺さんもてえ—したもんだ。うん、やっぱり親子似ているなあ—」

「がんばれ—！」

町内の人々ももの凄い声援を送った。

「けっ！たまらんよ」

森竹の表情が厳しくなる。益男もやっと後ろを取ったので、回避されても、必死に食らいついていた。そこで、森竹は急遽背面飛行に入ろうとした。

「あっ！危ない！」

「だめだよ！」

牛米たちが叫んだ。背面飛行に入ろうとしたのは良かったのだが、そのタイミングがまずかった。

「うわー！」

「あっ！」

グラマンのワイヤーが飛燕のワイヤーに絡んだのである。それと同時にコントロールを失い、飛燕は真っ直ぐ真下へ向かい、グラマンは垂直に上昇した。

ドガーン！

飛燕はそのまま、地面に激突した。上昇したグラマンも飛燕のワイヤーが絡まっているので、途中で引っ張られるようにして、急降下し地面に叩き付けられた。　ズガガーン！

観衆からはわっ！という声が上がった。飛燕は結構低い位置から墜落したので、原型を止めていたが、高い位置から一気にダイブしたグラマンは、跡形もなく大破したのであった。

「…残念です。両者ともまさかの、リタイヤとなりました」

そこで解説の声が止まった。

興奮から覚めて平常心になった森竹は、事態に気が付き言った。

「あっ、済みません」

そうして、頭を下げたのである。益男も一瞬表情が引きつりはしたが、その後ニコリと笑って言った。

「いいよ。楽しかったよ」

益男の右手が森竹の前に出され、握手を求めている。

「本当に、済みません」

軽く頭を下げて、それから森竹も手を握り握手をすると同時に、表情が緩んだ。

「オジサン上手くて驚きました」

「えっ！ぼくがかい？ッハハハ…いやー照れるなあー」

「ふっははは…」

森竹も頭を掻いて益男の後を追うように笑ったのである。

破損した飛燕とともに、信彦や関田のところへ戻ると、彼らは拍手で益男を迎えた。

「川辺さん、あんたてえーしたもんだ。…んまあー、結局のどこ落ちちまったが。それまでのはいいぞ。どこで、そんなに腕上げたねえー…」

「そうだよ。技使うなんて」

信彦が言った後、益男は頭を掻いて照れた。

「だけど、あいつがだめなんだよ。あいつが…」

牛米は大破したグラマンを片づけている森竹の方を睨むようにして言った。

「牛米くん、いいんだ。これが勝負なんだからね。後腐れは無しだよ」

益男は何時になく、真面目な表情で言った。

「…でも、あいつさー…」

牛米は益男の目を見た。

「…うん。分かったよ、オジサン…とにかく、一生懸命やったんだね」

益男が無言で頷いたのを見てから納得したようだった。

「そうさ。だから、牛米くんも負けてもいいから、頑張ろうよ。…いや、ちょっと待てよ。やっぱり牛米くんや井股くんには勝って欲しいな」

そこで信彦が不満な表情で益男をのぞき込んだ。

「とうちゃん、俺はどうなってもいいのかい」

「あっ！…もちろんノブもさ」

その光景を見ていた。関田が大きな声で笑った。

「だっかかかか…、こりゃーいいや。まあーみんながんばれや」

その時だった。こちらに向かってくる人影があった。

「いやー、川辺さん。大したもんですなー、練習の成果が出ましたよ。ははは…」

それは、柳田の姿であった。

「あっ！これは、柳田さん…お恥ずかしい。落としてしまいましたよ」

「何、コンバット…いや、スタントでもそうですが、よくあることですよ。みんな大会となるとやはり、普段とはだいぶ気分も違いますからね。それじゃー頑張ってくださいよ、みなさん。それじゃー次の準備がありますら、私はテントに戻ります」

柳田は軽く頭を下げて戻って行った。

「あー、どうも。…柳田さん？」

川辺が一度呼び止めると、柳田が振り返った。

「デモフライト楽しみにしてますよ」

柳田は軽く微笑むと再び、頭を下げてテントへ向かって行った。

次に出場するのは、太ッチョだった。彼が飛ばすまでは時間が多少あったので、再び他の機体を観察することにした。牛米が先頭になって歩いていると、出場の準備している複数の機体が目に入った。上空では、宙返りやウイングオーバーを駆使して戦っているコンバット機やとなりの会場で繰り広げられるアクロバットの数々が目に飛び込んでくる。

「なあー、あいつじゃないか。太ッチョ」

牛米の視線の先には太ッチョと対戦するはずのゼッケンを付けた選手が機体を脇に置いて上空を見上げていた。

「あいつかー」

太ッチョが小さな声で言った。脇に置かれた機体は黄色いムスタングであった。

「ちょっと行ってみようよ」

中浦がそう言うと、みんなが頷いた。相手の選手に近づくと、その気配で気が付いたのか、男が牛米たちの方を見た。

「やあー、こんにちわ！」

太ッチョが挨拶をした。しかし、男は浮かない表情をして、軽く頭を下げた。

「なんだい？」

出鼻を挫かれた太ッチョであったが、その男のところでしゃがみ込んだのである。

「実は君と競技をするようなんだ」

「ふ〜ん、そう」

太ッチョは無愛想な男だと思ったが、とりあえず話を続けた。

「俺は井股って言うんだけど、君は？」

「俺？…黒田」

太ッチョは名前より機体の方が気になった。

「これっ？君の」

「ああー」

黄色い機体には、小さな撃墜マークと呼ばれる以前の戦いの成果が記されていた。牛米がしゃがみ機体をよく見た。

「これー、OSだね」

「……」

黒田は迷惑そうな表情をした。OSとはエンジンのメーカーである。

「OSってなんか格好いいよ…このシルバーと黒の部分が好きだなあー」

信彦もしゃがみ込んで、機体には触れずに頭を低くして見た。

「あのさー、君たち一回戦だよね」

「うん」

「残念だったね。俺と当たったのが…」

「なにおう！」

太ッチヨが我慢していたのが爆発しそうになっていた。

「やめろよ！太ッチヨ」

それを牛米が止めたのである。

「行こうよ、行こう」

中浦はみんなをその場から離そうとして、歩き始めた。

益男たちのところへ戻った信彦たちは、黒田のいた辺りを見た。かなりの人影があるので、はっきりと黒田の姿を見ることはできなかった。

「何だよ！あのOS野郎！」

太ッチョが叫んだ。

「何かあったんけえー」

関田が心配そうにして太ッチョの顔をのぞき込んだ。

「いや、太ッチョの相手が変な奴なんですよ」

牛米が関田の質問に答えた。両脇にいた玉川と大江も首を傾げるのだった。

「変な奴？」

「ひょっとして、これかい？」

「おっ、三ちゃんそのものじゃないかい」

玉川がおかまの手振りをして、それを見ていた大江がふざけたように言った。

「いや、あいつ何回も入賞してるらしいんだけど、俺たちを馬鹿にしたんですよ」

信彦は関田に言った。益男と萌子も怪訝な表情を浮かべた。

「ふん、そんなことけえー。そんなあー相手にするこたあーねえー。正々堂々と精いっぱいやりゃーいいんだよ。かっかっかっ…」

関田はもの凄い大きな声で笑った。

やがて時間が過ぎて、中浦もスタントの準備をしなくてはならなく、コンバット会場からは姿を消していた。

またコンバット会場では、太ッチョとOS野郎の黒田が、まさに離陸をした直後だった。

「絶対に勝ってやる」

太ッチョが黒田を睨んだ。しかし、黒田は「ふん！」と鼻で笑うだけだった。離陸して間もなく、黒田の黄色いムスタングは、背面飛行に入った。

「すっ、すっげえー！…な・なんだー？」

周りで見ているものは、驚いて声を上げた。

「うっ」

太ッチヨはその瞬間に、無言となりハンドルを握る手に力が入ったのである。

「あ・あいつ、やっぱりすげえ一奴だ」

「何でも優勝候補らしいぞ」

信彦が他で聞いた噂を思い出して牛米を見た。

太ッチヨは黒田の攻撃を避けるために、垂直に上昇した。お互いの機体は、上下反対になって円周上を進んでくる Mustang と、その行動から退避する垂直上昇のスピットファイヤーの姿があった。

「そんな手には…」

太ッチヨがまた独り言を言い操縦に専念する。

しかし、次の瞬間には黒田の Mustang は垂直に上昇していた。

ブイイーン…

「な・なに？」

円周上では、違う位置から垂直上昇した機体が太陽光でキラリと輝いた。太ッチヨの機体はすでに頂点に達しようとしていた。それに対して Mustang は、昇り詰めたところを最上位まで行かずに、背面に向かったようにして、垂

直に降下したのである。それは、井股からはちょうど一八〇度反対側でのことだった。彼は後ろ目で見てたが、機体のコントロールに集中していたので、すべてを把握することはできなかった。

「これは相手が悪いわ。替わってやりたいぐらいだな…やられ役なら…」

益男が言った。

「あっ！」

太ッチョが気が付いたときには、ムスタングがスピットファイヤーの真ん前に来ていた。

「ぶっ、ぶつかる！」

「ふふふ…」

黒田は不気味に笑った。黒田のムスタングは背面のまま、ぎりぎりで太ッチョの下を通り抜けた。それは右手と左手を見事に持ち変えて、ワイヤーが絡まるようなへまもなく完璧な飛行だった。そのすれ違いに警戒した太ッチョが、急ハンドルを取り、失速したのである。

「もらったよ」

黒田は落ちついた表情で太ッチョを見た。そのまま小さな半宙返りをすると、よろよろと失速した太ッチョのストリーマーを垂直尾翼ぎりぎりで切り取って、飛び去って行った。まさに一撃離脱である。

「うおおー」

ちぎれたストリーマーは、ゆらゆらと空中を羽衣のようにして、時折風にあおられながらも降りてきた。

太ッチョのスピットファイヤーは、そのままコントロールを失って地上に激突した。

「かっ！なんて奴だ。あいつ…」

牛米はそう言ったあとに、歯を食いしばり両拳を握りしめた。

「…さすが、優勝候補の黒田くん！技を見せつけてくれます。みなさん拍手！…」

太ッチョや牛米たちの動揺とは裏腹に会場からは、拍手がわき上がった。黒田は燃料がまだ残っていたので、いろいろなアクロバットを勝ち誇ったように披露した。

「ちえっ！あいつ調子に乗ってる」

「ボン！しょうがねえーってもんだ。ありゃーてえーした野郎だ」

関田も腕組みをして、首をひねった。

「それよりも、中浦くんが今演技しているぞ！」

益男が隣の会場を指さした。

ブオオオオ…

少し小さく見える機体は、確かに中浦のイカルスだった。

「行こう！」

「おう、行ってみよう」

信彦たちは、隣の会場へと駆け込んだ。

スタント会場はコンバット会場と雰囲気違っていた。それはどこことなく気品があるような感じがするものだった。

「がんばれー！りょう！」

会場についた信彦たちは、大声で声援を送った。

「中浦くん、なかなか調子いいみたいよ、今の宙返りもポイントが高いわ」

スタント会場にいた美加が、規定表と機体を見比べながら信彦たちに言った。

「ふーん、そうか。やっぱり、あいつはスタントに向いてるんだな」

信彦は美加の顔と規定表をのぞき込むようにして言った。

「さっ、これからが最後のクローバーの演技よ」

「おおお、上がった、上がった」

イカルスは、クローバーという頂上で四つの輪を描く演技に入るために、上昇していた。

「いいわ、その調子よ…」

中浦の表情は、信彦たちの声援が聞こえないのか、真剣なものだった。心地よいエンジン音が上昇するにしたがって小さくなって、聞こえた。

「おお、すげー」

牛米が口を開けて見ていた。クローバーの最初の円が描かれて、次のステップへと向かった。

二つ目の円も綺麗に旋回し、三つ目に差し掛かる。

「ひとつ、ふたつ、みつつ…」

美加が和の数を口にしていた。

「よーつ」

と言いかけたときだった。クローバーなどの場合は長時間円周の頂上で演技しているため、スムーズに操作をしないと、パイロットとワイヤーとの間の張りが失なわれてしまうことがある。

「あっ！」

今まさにその状態であった。四つ目の円を半周したところで、中浦のイカルスはバランスを失った。

「だめだ！」

牛米が叫んだ。

「りょう君！ワイヤーを引いて」

美加が叫ぶが、中浦はすでに美加の叫んだことと同じ動作をしていたのである。バランスを失いかけたイカルスは、再び体勢を立て直して軌道上に戻っていった。円周上の外に立っている審査員が、今の瞬間何かメモを付けたようだった。

「よかったー、でもちょっと減点入っちゃったかな」

上空から視線を信彦に向けて、ニコリと笑みを浮かべた。

その後、無事着陸を果たした中浦は、ほっとした表情を浮かべ、それから冷静になって信彦たちの方を見て、Vサインを送った。

ー勝ち抜けぶち抜け空中戦ー

益男と太ッチヨが初戦で破れて、いよいよ信彦の番がやってきた。

「ノブ、頑張れよ。木の葉返しのとうちゃんが、いつでも応援しているということを忘れるな」

「おおげさなんだよ。とうちゃんは…だいたい、あの木の葉返しってのも偶然じゃないの？」

そこで、益男は厳しい表情で言い返した。

「ぶっわっかー！あれは、ちゃんと考えていたんだ…」

「かっかっかっ…川辺さんよ。…やっぱり親子だねえー」

萌子も笑っていた。

「あんたがた、あんまり恥ずかしいまねは、よしてよ」

「ボン！頑張れよ。町内会ゼーンぶが応援しているんだからな」

「そうだよ。ノブちゃんガッツ！ガッツ！」

「えいえいおー」

町内の玉川と大江も日の丸の鉢巻きを締め直して、拳を強く上に向けた。上空では、信彦の前の試合が繰り広げられていた。

ブローロー…

それはすでに勝負がついていて、燃料が切れるのを待っているだけだった。

やがて出番が来て、信彦は相手のメッサシュミットと共に上空へあがった。陽光は先ほどよりも、昼に近づいているということから、降り注ぐ強さも増していた。メッサを駆るパイロットと信彦はお互いに鋭い視線を飛ばして、水平飛行に移ったとたんに案の定、ストリーマーを大きく振るわせて、空中戦が始まったのである。

「ここではやっぱりノブに勝ってもらわないとなー」

牛米が腕組みをして眺めている中、円周上ではグレー掛かったメッサシュミットと信彦のスピットファイヤーが空軍大戦略の火蓋を切ったといわんばかりに、抜きつ抜かれつの争奪戦を繰り返している。

「やっつけろー！ノブちゃん！」

「がんばれー！」

再び町内の応援団が叫んだ。

どうみてもこの戦いは、信彦の腕の方が上だった。やはり、柳田たちとの練習の成果と、その学習能力の高さが雲泥の差で、結果として現れたのである。相手のメッサは、ただでたらめにジグザク状に逃げるだけであったが、信彦のスピットは的確に相手の動きを捕らえて高高度からの一撃離脱をやったのであった。

ブイイーン…サクリ！

「やったー！」

「おおーう、なかなかー」

メッサから切り落とされたストリーマーは、宙を舞っていた。

「ふふふ…さすがだ。川辺くん」

柳田が野球帽のつばを少し持ち上げながら、たくわえた髭を薄く持ち上げて笑った。

勝負が付いたスピットが燃料切れで着陸し、信彦は相手のパイロットと握手をして、皆のところへ戻ってきた。

「ノブ！よくやったぞー。ふほほ…やっぱりとうちゃんの、木の葉返し念仏が…」

「川辺さんよー、違う！違う！ボンの実力じゃー、かっかっかっ…」

信彦は照れて頭を掻いたが、

「いや、やっぱり柳田さんや、それとほらーこんなベテランの美加ちゃんたちに教わったからだよ」

美加は綺麗な歯で笑みをこぼして言った。

「なにいつてんの！それが信彦くんの実力よー、うんそれじゃーわたし出番だから、あっちに行くねー」

そういうと、美加はスタント会場へと消えていった。こちらの会場では、牛米の出番も迫っていたので、皆は美加に手を振って、遠くから応援することにした。しかし、同じスタントの中浦だけは、スタント会場へ向かったのである。

そうして、戦いは牛米と信彦が勝ち進んでいき、昼になったのである。先ほどまで上空を飛んでいたUコン機の姿が見えなくなり、選手や観衆はザワザワと動き始めた。あちこちに開かれている売店では、弁当の販売が行われていて、それに人の列が並んでいるのであった。

「川辺さんよー、どうだ人数分あるけえー」

町内会長の関田が益男に向かって叫んだ。関田たちが設営した敷物の上に信彦たちが座り、配られた弁当を手にしていた。

「ああー、会長ちゃんとありますよ」

「そうけえー、良かった」

「ささっ、三ちゃんたちもこっちへ…」

「ははあー、どうもどうも、それじゃー…」

町内会の玉川と大江も配膳役を終えると、関田と一緒に敷物の上に上がってきたのである。

「暑いなー」

「まあまああー、助六さん一杯どうぞ」

「あっ！こりゃーすんません」

益男が大江に缶ビールを手渡した。

シュボッ！

「川辺さん、やっぱりこいつに限るわ」

「うん、まったくだ。じゃー取りあえず乾杯とでもしましょうか」

「そうですね」

「乾杯！」

益男や関田たちは手にした缶ビールを高く上げた。信彦たちは、ジュースやコーラの缶を高く上げた。

「いやー、ノブちゃん頑張ったなあー」

大江が上唇の上にビールの泡を付けて言った。

「午後からは、準々決勝があるからね。頑張らなきゃ！」

萌子がお茶の入ったポットの口を緩めて言ったのである。すっかりと、Uコンを理解した萌子も今では協力的であった。

「井股くん！お茶上げようか？」

萌子は少し腰を高くして、ポットを見せた。

「ああーどうも」

信彦が卵焼きを口に頬張りながら美加の方を向いた。

「美加ちゃん、スタントの方はどうだったの？」

「うーん、頑張ってみたけどどうかしらね。午後からどんな選手が出るのか？」

「そうか」

信彦は中浦の方へ目をやった。

「どうだった？ りょう」

そこで中浦は頭を掻いた。

「ちょっとドジっちゃたからな」

「大丈夫よりょう君。ばっちり！」

美加が励ますように言ったのであった。

その時だった、牛米が視線を左側へ向けて沈黙した。

「あっ！ お前…」

それに気が付いた太ッチヨが叫んだ。

それと同時に全員が、牛米と同じ方へ向いたのである。そこには、あのO S 野郎の黒田が立っていたのである。

「ふふふ…」

黒田はその場で立っていて、ただ薄ら笑いを浮かべているだった。その視線は牛米へ注がれていた。

「何だよー、気持ち悪い奴だなー」

怪訝な表情で牛米が言った。

「お前なかなかやるな、けど午後からはそうもいかないぞ」

準々決勝では、牛米と黒田の対決が待っていたのである。

「お前、わざわざそんなこと言いに来たんか？」

少し笑みを浮かべた牛米が指をさして言った。

「……………」

「へんな奴！」

しかし、黒田は無言のままその場を去って行った。彼が居なくなったあと、牛米はゴクリとコーラを飲み干した。

「まったく変な奴だよ」

「そうか。午後からはあいつとやるのか」

信彦が独り言を言うと、美加が口を開いた。

「あの黒田君は有名なのよ。ああいう人なんだけど本当はそんなに悪い人じゃないと思うよ」

それを聞いて太ッチョが憤慨した。

「冗談じゃないよ、美加ちゃん！あんな奴の肩持つなよ」

午後からは、コンバット部門も上のクラスの予選があった。といっても上のクラスは人数が少ないので、すぐに牛米たちの準決勝の番が回ってくるのである。

その上のクラスというのは、機体自体も競技専用の機種で、エンジンが二・九で、ほとんどが翼に覆われていて胴体の部分が少ない特異な形である。主翼の後ろには高さのない二本の垂直尾翼に挟まれて、主翼の半分は占める長さの水平尾翼が主翼からほとんど離れない場所に取り付けてある。

牛米たちの対決の時間は、このコンバット戦が終わってからであるが、その間牛米と太ッチョが機体の点検を入念に行っていた。信彦や益男たちは、上のクラスのコンバット戦をじっくりと見学していた。

やはりエンジンが大きいとワイヤーの長さも伴って長いので、それは迫力があつた。

「やっぱエンジンでかいと違うわ」

「迫力満点！」

益男は腰に両手をあてて、頷いた。

操作技術も一ランクも二ランクも違っていた。

やがて、上のクラスの予選が終わる頃、牛米は戦いの準備をしていた。スピーカーからスタート準備をという声があり、円周の中心である地点に向かった。反対側からは、OS野郎の黒田がゆっくりと歩いてきていた。

「お前になんかに負けねえぞ、OS野郎！」

牛米はそう呟いた。

一方、黒田は薄い笑いを浮かべて近づいた牛米に言った。

「ビギナー相手だけど、手は抜かないぞ。ふふふ…」

「ああー、おれだって手を抜かないさ。あとで、べそかくな」

信彦たちは、みんなふたりの様子を真剣な表情でうかがっていた。

「あんな野郎、ぶつつぶしちまえー」

特に力を入れて言ったのが、太ッチョだった。

ブロロロ…ブイイイーン…

見守る中、二機のエンジンが始動された。牛込と黒田は今一度、鋭い視線を向け合った。

「さあー、前年度優勝者の黒田くんの Mustang と初出場の牛米くんのこれまた Mustang いよいよバトルが開始されました。さあー二つの Mustang はどちらに準決勝に進むのでしょうか！…」

スピーカーからは、解説のひび割れた声が鳴り響き、会場の観衆をさらに盛り立てた。この頃になると、予選を勝ち抜いてきているだけあって、さすがに戦い自体もすざましいものがあった。

ブイイイーン…

「どうした？襲ってこないのか」

牛米が黒田より少し高い位置を飛んでいた。

「慌てるな、じっくりと料理してやるよ」

黒田がにやけた。

周りで見えていた、信彦たちもじっくりと見ている。

「大介！一気にやっちまえー！一撃離脱だ！」

太ッチョが額に汗を浮かべながら、大江の持っていた町内会の旗を奪って振りながら精一杯叫んだ。

「がんばれー！」

信彦も大声で叫んだが、美加は結構冷静に戦いを見ていた。

「あせっちゃだめよ。あせっちゃ」

黒田は牛米の少し後方を飛んでいて、いつでも攻撃ができる状態だったが、向かってこないなので、それを振り切るようにして、垂直に上昇した。

「ふふふ…」

「お前、なんか考えてるな？…」

「別に」

上昇した牛米のムスタングに等間隔を開けたまま、黒田の機体がへばりついていった。

「くそー！振り切ってやる」

「ああー、やってみろよ」

牛米は傾斜角七〇度まで上り詰めた位置で水平飛行に入った。黒田もすぐにその軌道まで、上がってきた。その角度というのは、ほとんど頂上で宙返りを繰り返しているのと同じ状態で二人とも、地上でクルクルと回転を続けたのである。

「あいつら何やってんだ！」

「あのやろう、牛米をおもちゃにしてるんだ」

次の瞬間、牛米は黒田から振り切るために、背面急降下に入っていった。

「ふふふ…きたな！」

一瞬黒田の目が大きく見開かれた。急回避のつもりで、背面急降下をしたつもりの牛米ではあったが、まったく動じない黒田も、その後を追ったのである。

「おおお！…まだ来るのか」

「ふふふ…ははは…」

外周で見ていた美加が叫んだ。

「罨よあれは！…黒田くんは大介くんの行動を読んでいるんだわ」

牛米は、背面急降下で加速度のついたまま、超低空飛行を背面のまま行おうと思った。それは牛米の得意技でもあった。

ブイイーン…

黒田の Mustang も背面急降下で、牛米の機体へ覆い被さるように食い下がった。

「うわっ！」

牛米は思わず叫んでしまったのである。というのも、黒田の Mustang は牛米の機体の真上にピッタリと数センチ残すだけにしてくっついたのである。

「抜けてみろよ、ふふふ…」

黒田が笑った。しかし牛米は黒田に上を取られているので、身動きが全く出来ない状態だった。ここら逃れるとすれば、さらに低空に移動するしかなかったのである。しかしそれは牛米が判断するまでもなく、黒田が強引にそういう方向へと持っていったのである。

「わぁー！や・やめろー」

牛米は上から押さえつけられるようにして、地面に押さえつけられた。機体はいよいよ地面すれすれまでになり、砂塵が舞ったのである。

「汚ねえぞ！」

「なんだよあーれー」

信彦や太ッチョは大きな声で抗議を訴えたが、戦っている二人には全く聞こえなかった。

「くそー！それなら！」

牛米も我慢の限度を越えて、反撃に出たのである。それは強引に下舵をとって（背面飛行なので上舵ではなく下舵である）黒田の Mustang に体当たりをしようというものだった。

「おりゃー！」

「ふふふ…」

それでも黒田は、状況を素早く察知して、ふわりと軽くかわしたのである。その直後、黒田の Mustang が、一瞬上下に機体を揺さぶって速度を落として、牛米の尾翼のストリーマーを引きちぎって行ったのである。

「くそー！やられた…」

牛米は残念そうに独り言をいった後に、背面飛行から脱出したのであった。

－決戦の火蓋－

準々決勝で牛米が黒田に破れたが、信彦は準々決勝を勝利で飾った。準決勝に進出したのは、OS野郎の黒田、信彦、去年準優勝の曾根松（機体はメッサシュミット）、さらに出場二回目になる野田（機体はカーチス）の四人であった。

そうして準決勝の組み合わせは、曾根松と野田、黒田と信彦となっていた。

「こうなったら、ノブにあいつをつぶしてもらうしかないぞ」

「絶対に！ やってくれよなーノブ」

牛米と太ッチョが信彦に言った。

「そんなにプレッシャーかけるなよー…マイペースさ。おれは」

信彦は機体を持ち上げて言った。

「なに、ここまでこれただけでも大したものさ…」

益男がなだめるように言った。

「まあーボン！ 精一杯やって来い。かっかっかっ…」

関田が信彦の肩を軽く叩いた。

「えーそれでは、これよりコンバットジュニアクラスの準決勝を行います。最初の組み合わせの、黒田さんと川辺さんは準備をして下さい…」

実行委員会のスピーカーから案内が入った。

「がんばれ、ノブ」

「よし！」

信彦は気合いを入れると、鋭い視線を円周の中央に向けて歩き出した。さらに反対側からは、対戦相手の黒田が不気味な笑いを浮かべて、同じ円周上へと向かって来たのである。

そうして、円周の中央部で激しい視線がぶつかった。

「またビギナーか、ふふふ…」

「ああー、けど負けないぞ」

「けっ！みんな同じこと言うけど、結局はちょろいのさ」

「そうか。やったら分かるさ」

信彦と黒田はエンジン始動を待った。

「いいかい。エンジンを始動するよ」

係員が信彦たちに向かって大きな声でそう言った。

「いよいよだな。ノブが破れたらもう切り札がないんだからな」

牛米が言った。その言葉に美加のスタントを見終えた中浦が居て様子をうかがった。

「大丈夫さ。ノブなら…」

ブロロー…ブイイーン…

両者のエンジンが始動して、信彦と黒田は互いに手をつないだ。

ムスタングとスピットファイヤーは、ゆっくりと滑走を始めた。スピットファイヤーよりも幾分か先に離陸した黒田のムスタングではあったが、信彦も負けてはいなかった。

「まあー、お前もよくここまで残ってきたもんだ。けど、やってやるよ」

離陸直後に黒田がそんなことを言ったのである。

「ふん！こんどは俺がやる番だ」

信彦も言葉の上では負けてはいなかった。

「いくぞ！」

「来い！」

さすがにビギナーといえども、ここまで勝ち進んできたということで、強引に出てくる黒田だった。そうして二機は、離陸直後同時に曲芸的飛行ラインを取るのだった。

「うおうおうお！やっぱ違うわ、ここまで来ると…」

牛米が叫んだ。

実行委員会のテントの中では、柳田の目が厳しくバトルを見つめていた。

「やっぱり、あいつは覚えが早い」

「えっ！何がです。柳田さん？」

「いやいや独り言ですよ」

他の係員に言葉を濁す柳田だった。

信彦は大きな宙返りで旋回をした。すかさず、その後を追うように黒田が後を付き大きな円を描いた。

「しつこいな！」

信彦は黒田を横目で見たのである。

「ふへへ…Uコンなんて、そ・そんなに甘かーねえーよ」

黒田はハンドルを操作しながら、そう呟いた。

今度は大きな逆宙返りだった。それに伴ってぴったりと信彦について回る黒田だった。逆宙返りから水平飛行に移ったあと、信彦の得意なウイングオーバーに入っていたのである。

「おっ！ウイングオーバーか？」

黒田が笑みをこぼした。

すかさず、黒田も垂直に上り詰めていった。

「両者とも激しいバトルを繰り返しております。優勝候補の黒田くん、それに初出場ながらにして、準決勝まで進んだ川辺くん、さあどちらが決勝への進出を決めるのでしょうか…」

スピーカーからは興奮を押さえきれない声が、ひび割れた声で流れていた。

「そうよ、ガッツに上り詰めるのよ」

円周の外では美加が信彦に声援を送った。

美加伝授のウイングオーバーは見事なまでに完成度が高かった。そのため観衆からは拍手が上がったのである。

「やるじゃないか！」

黒田が円周の頂上を見て言った。もちろん黒田もきれいにウイングオーバーを決めていた。垂直に下降ラインを取ったウイングオーバーが終局を迎えると、信彦はそのまま水平飛行を、黒田は背面飛行に切り替わった。

「出たな背面！」

信彦は黒田の他での戦いぶりを観察していて、動きをある程度つかんでいた。直後に信彦も急回避をして背面に移ったのである。

「おっ！」

黒田得意の背面から超高速でストリーマーを追うという技法を見破り、信彦はウイングオーバーからの復帰の際に、咄嗟にこの作戦を考えたのである。ということは、信彦が後追いという結果になり、逆さを向いたまま黒田の後ろを狙うということになったのである。

「へへへその手には乗らないよ」

信彦が笑った。しかし黒田との差は半周もついていて、そのため距離を詰めるのに、信彦は円周を斜角四五度まで上り詰めたのであった。

ブオオオーン…

「なに？」

黒田は後ろからついてくるスピットファイヤーを見て、初めて動揺の表情を見せたのである。斜角四五度から追撃を行ったスピットファイヤーはすっかりと黒田のムスタングを捉えたのである。

「仇を討ってやる」

「……………」

忍び寄るスピットファイヤーに黒田のムスタングが一瞬上昇したかと思ったとたんであった。急速に下向きに角度を変えて、地上スレスレの位置を通過し、背面から回避した。つまり、信彦の真下を通過したのである。

「うわわぁー！」

信彦は目前で技を見せられたのである。

「す・すっげー…」

「なんだ、ありゃー」

牛米たちや周りの観衆から声が上がった。

「なんて奴だ！」

そう言ったあと信彦は動揺しながらも、正しく上昇ラインを取って、正回転へと向かったのである。しかし、それを追っかけるのは尚も、信彦の方だった。距離は再び半周の差がついていたのである。

「そう簡単にはいかないさ。ビギナーくん。ふふふ…」

黒田は怪しく笑みを浮かべた。

「なにお！」

そう言った瞬間に今度は、黒田が半ウイングオーバーで一撃離脱を狙ってきたのである。ムスタングは垂直に上昇し、スピットファイヤーが旋回してくる地点を目がけて再び、垂直に今来たルートを戻った。

「うわー！」

その黒田の攻撃を信彦は小さい円の宙返りで、機体の速度とタイミングをずらして回避したのである。

「なんかUコンでないみたいだ」

太ッチョがそう呟いた。

「やっぱり、ボンは男だ！なかなかいい戦いをしおる」

腕組みに力が入った関田が言った。

「おまえ！」

黒田が真剣な表情になってハンドルを握る手に力がは入ったのだ。宙返りで交わされた黒田の Mustang の直後にはぴったりとスピットファイヤーがくっつき信彦は、一瞬をついて Mustang のストリーマーへ飛び込んだのである。

「うおりゃー！」

「あー！」

ストリーマーを切られるのを避けることから、黒田はハンドルを真上に向けて直後に真下に向けたために、一瞬の失速が発生した。その時である。

ズガガガ…

バキバキ…

「あああ！」

「おわー！」

スローモーションのように瞬間が流れ、信彦のスピットファイヤーのプロペラがバラバラになって空中を散乱しエンジンも外れて落下した。さらに黒田の Mustang の垂直尾翼が吹っ飛んだのである。

会場からは「わあー」という歓声が上がり、スローモーションだった空中の機影が動きを戻したかのようにスピットファイヤーが地上目がけて不安定に滑空していた。黒田の Mustang も不安定な飛行になり、さらに半周した時点で水平尾翼が機体から外れたのである。水平尾翼はロッドでつながっているのに、外れると気流を乱してかえって酷いことになった。一気にコントロールを失った黒田の Mustang は上昇ラインをとって円周反対側へと落下した。

ドドガガーン！

それを後ろ目を見た信彦はスピットファイヤーを不安定に落下しながらも、地上に降ろしたのである。

「これは、大変なことになりました。…両者とも無念のリタイヤです…」

放送は悲しくも聞こえた。

形式が違って地上に降りた両者は、一瞬顔を見合わせた。

「おっ！」

「えっ？」

そうして一瞬沈黙したあと、信彦が突然吹き出し笑いをしたのである。

「うっわっははは、うわっははは…」

そのようすに、沈黙を守っていた黒田もつられるように、吹き出し笑いを浮かべたのである。

「ふふふ…うわっはは、うわっはは…」

「あの野郎！やりやがったな」

太ッチョと牛米が憤慨して、駆け寄ったのである。

しかし、どういうわけか信彦と黒田は笑顔のままだった。

「負けたよ。やっぱり、おまえをやれなかった…」

最後までストリーマーを奪うことができなかったという思いで、信彦が技術の差を認めたのである。

「ふっはは…、なに言ってんだ。お前の勝ちだよ。…最後に俺が失速で接触する寸前にストリーマーを切ったじゃないか。おまえの勝ちだ。負けたよ。ふっははは…」

「このや…」

駆け寄ってきた牛米が言葉をのみこんだ。

次の瞬間だった。黒田は信彦の左手を持ち上げて、勝利の意味の姿勢をとったのである。

「えっ？」

さらに次の瞬間、会場からは一斉に拍手がわき上がった。それは壮絶なものだった。

信彦は今度、黒田の手を持ち上げて勝利の姿勢をとったのである。

－表彰式－

すべての競技が終わる頃には太陽がかなり西の空に傾いていた。選手も観衆も充分に大会の意味を理解し、いろいろなドラマが展開されていった中で、最後の表彰式が行われる。壇上には、集計結果の紙を持った柳田が上がっていた。

「みなさん、本日は本当にご苦労さまでした。これからいよいよ表彰式に移りたいと思います…」

会場では、ざわめいていた声が少しずつ静かになっていったのである。

「えー、それではコンバット部門から表彰を始めます」

コンバット部門の場合はトーナメント制になっていた所以結果は分かっていた。信彦たちの戦いのあと決勝が行われ、メッサシュミットとカーチスが戦ったのである。

「それでは、コンバットジュニアクラス！第三位です。…えー残念ながら、この三位は準決勝でクラッシュしてしまい決勝に進むことができませんでしたが、川辺くん！と黒田くん！の二人です。」

「いいぞー！ノブ」

「ゴーゴー！」

信彦は頭を掻きながら段の前へ進み出た。また、さらに離れたところからは、黒田が歩いてきた。

「続けて呼びます。準優勝のカーチスを駆って出た野田くん！」

「わあー！」

会場からは歓声と拍手が湧いた。

「それでは、発表します。優勝の曾根松くん！」

「ヒューヒュー」

「えー、曾根松くんは去年の準優勝者でもあります。巧みに操ったメッサシュミットで栄光の優勝となりました。今一度拍手を！」

表彰台の上では、入賞した選手が互いに握手を交わしたのである。

会場は、次々に部門別クラス別に表彰が行われていった。そうして、今度は中浦や美加が参加したスタント部門に移ったのである。

美加と中浦はクラスこそ違うものの、より近い関係でもあった。

「それでは発表します。第三位の中浦くん！」

会場では再び拍手が上がった。

「えっ！俺？えっ…」

「りょう！早く行けよー、お前だ…」

中浦は顔を赤らめて、前へ進み出たのである。

「よかったね。りょうくん」

美加も激励を送った。

中浦は表彰台の上で優勝、準優勝の者とならんでトロフィーを嬉しそうに掲げたのであった。

そうして、さらに中浦の上のクラスである美加の競技の発表となった。第三位は中村という男だった。

「それでは準優勝です」

信彦たちは一瞬生唾を飲んだのである。

「えー、松金くん！」

そこで、美加ががっくりしたように頭を落とした。

一瞬の空白のような沈黙の後である。

「そうして、優勝は…」

中浦がギラリと鋭い視線で壇上の柳田を見た。

「柳田さん！」

「えっ？」

「や・やったー！」

中浦は飛び上がりながら、叫んだ。

美加が驚いて顔を上げ、次の瞬間に精一杯の笑顔が優勝の喜びを表現したのである。

そんな大会から一週間が過ぎ、背藻井川では晴天の強い陽光の中、一機のスピットファイヤーが甲高いエンジン音を残して、旋回していった。